午　王　堂　山　Ⅱ　遺　跡

第３次発掘調査報告書

２０１５

静岡市教育委員会

例　　言

1．本書は、静岡県静岡市清水区庵原町944番地 他における午王堂山Ⅱ遺跡発掘調査にかかわる報告書である。
2．発掘調査は株式会社しみずソーラー 太陽光パネル設置に伴うもので、静岡市教育委員会（生活文化局文化スポーツ部文化財課による補助執行）が主体となり実施した。
3．調査体制は以下のとおりである。
現地調査
調査担当者　大川敬夫（生活文化局文化スポーツ部文化財課　主　　査）
古牧直久（生活文化局文化スポーツ部文化財課　主任主事）
発掘作業員　菊地泰子、小林良晴、滝井昭次、野中学、森田豊治、柳澤英次、小澤晧男
篠塚喜久代、野末徳子、増田美津子、秋元進一、石上五十一
整理作業
整理作業員　金子洋子、三好節子
図化作業員　大畑智子、河合澄野、川嶋鈴乃、藤下紀代美、渡邉花織、杉山すず代
4．本書の執筆及び編集は古牧が担当した。概要の英文訳は前田晃宏（文化財課非常勤嘱託）がおこなった。遺物写真撮影は杉山が担当した。
5．発掘調査に関わる資料は、静岡市生活文化局文化スポーツ部文化財課が保管している。
6．発掘調査にあたっては、株式会社しみずソーラー様には埋蔵文化財の保護に対する御理解と御協力を賜った。
7．発掘調査及び報告書作成・執筆にあたっては、次の方々から御教示・御助言・御協力を賜った。
佐藤祐樹、篠原和大、杉山満、渡井英誉、渡辺康弘（五十音順、敬称略）

凡　　例

1．今回の発掘調査を示す記号を「014GDⅡ」と定め、発掘調査資料及び出土遺物のすべてにこの記号で注記を行った。
2．本文及び実測図に記した高度は、海抜高度をもって示した。
3．地図及び実測図中の座標は、世界測地系に基づく値である。
4．地図及び実測図中の方位は座標北を示す。
5．遺構実測図の縮尺は、図ごとに縮尺を示した。
6．遺物実測図の縮尺は、土器を1/3、石製品を1/2とした。

目　　次

例言・凡例・目次
第１章　序論 ……1
　第１節　調査に至る経緯 ……1
　第２節　調査の方法と経過 ……3
　第３節　地理的・歴史的環境 ……5
第２章　調査の成果 ……8
　第１節　基本土層 ……8
　第２節　遺構……12
　第３節　遺物……32
第３章 まとめ ……49
写真図版・報告書抄録

挿図目次

第１図　午王堂山Ⅱ遺跡の位置 ……1
第２図　調査位置図(S ＝1/2,500) ……2
第３図　グリッド設定図(S＝1/1,000) ……2
第４図　静岡・清水平野の地形(明治22年測量) ……4
第５図　遺跡位置図(国土地理院1/25,000「清水」) ……6
第６図　土層模式図(S＝1/20) ……7
第７図　調査区全体図……8・9
第８図　SH01平面・断面図 ……10
第９図　SX01平面・断面図 ……10
第10図　SB01平面・断面図(床面相当) ……11
第11図　SB01平面・断面図(掘方) ……11
第12図　SB02平面・断面図(掘方) ……12
第13図　SB03平面・断面図(掘方) ……13
第14図　SB04平面・断面図(床面) ……14
第15図　SB04遺物出土状況 ……14
第16図　SB04平面・断面図(掘方) ……15
第17図　SB05 平面・断面図……16
第18図　SB05平面・断面図 ……17
第19図　SB06平面図・遺物出土状況 ……18
第20図　SB06遺物出土状況 ……18
第21図　SB06平面図 ……18
第22図　SB07平面・断面図 ……20
第23図　SB07平面・断面図 ……20
第24図　SB08平面・断面図 ……21
第25図　SB08平面・断面図 ……22
第26図　SB09平面・断面図 ……23

第27図　SB10•11•平面・断面図 ……24
第28図　SB12 平面・断面図 ……25
第29図　SB13平面・断面図 ……26
第30図　SB14平面・断面図 ……27
第31図　SB14平面・断面図 ……27
第32図　SB16平面・断面図 ……28
第33図　SD01•02平面・断面図 ……29
第34図　SD01遺物出土状況 ……29
第35図　SD03平面・断面図 ……30
第36図　SD04平面・断面図 ……31
第37図　出土遺物① ……33
第38図　出土遺物② ……34
第39図　出土遺物③ ……35
第40図　出土遺物④ ……36
第41図　出土遺物⑤ ……38
第42図　出土遺物⑥ ……39
第43図　出土遺物⑦ ……40
第44図　出土遺物⑧ ……42
第45図　出土遺物⑨ ……43
第46図　出土遺物⑩ ……44
第47図　午王堂山遺跡調査地点合成図 ……50

挿表目次

第１表　遺物観察表(土器) ……44
第２表　遺物観察表(石製品) ……48

図版目次

図版１　１．調査地点遠景、２．調査区全景
図版２　１．SH01全景（東から)、２．SH01柱穴及び出土遺物
図版３　１．住居跡検出状況(東から)、２．SB01完掘状況(南から)、３．SB01炉？(北東から)、
　　４．SB02 検出状況(東から)、５．SB02 完掘状況(東から)
図版４　１．SB03 検出状況(南から)、２．SB03炉検出状況(南から)、３．SB03炉半裁状況(西から)
　　４．SB03 炉完掘状況(西から)、５．SB03 完掘状況(南西から)
図版５　１．SB04 床検出状況(南東から)、２．SB04 完掘状況(南東から)
図版６　１．SB04 東西ベルト及び床検出(南から)、２．SB04・SB07 切り合い関係(南から)
　　３．SB04 西壁付近(南西から)、４．SB04 壁周溝完掘状況(南西から)、５．SB04 出土遺物(東から)
図版７　１．SB05 床検出状況(南から)、２．SB05 完掘状況(南から)
図版８　１．SB05 出土遺物①(壺底部33)、２．SB05 出土遺物(高坏36)、３．SB05東西ベルト(床)
　　４．SB05 南北ベルト(床)、５．SB05東西ベルト西半(堀方)
　　６．SB05 東西ベルト東半(堀方)、７．SB05南北ベルト南半(堀方)
　　８．SB05 南北ベルト北半(堀方)

図版９　１．SB06 床検出状況(南から)、２．SB06 完掘状況(南から)
図版10　１．SB06 東西ベルト(南から)、２．SB06南北ベルト(西から)、３．SB06 遺物出土状況①(東から)
４．SB06 遺物出土状況②(東から)、５．SB07 検出状況(北西から)
図版11　１．SB07 床検出状況(北西から)、２．SB07 完掘状況(北西から)
図版12　１．SB07 東西ベルト(床、南から)、２．SB07 南北ベルト(床、西から)、３．SB07 遺物出土状況(南東から)
４．SB07 炉検出状況(西から)、５．SB07 炉半裁状況(西から)、６．SB07 炉完掘状況(西から)
７．SB07 ベルト(床)、８．SK01ベルト(南から)
図版13　１．SD02 完掘状況(南から)、２．SD02完掘状況(北から)、３．SB07・SD02 切り合い関係(南から)
４．SD01・SD02 切り合い関係(西から)、５．SD02 覆土(南から)
図版14　１．SB08 検出状況(北西から)、２．SB08 床検出状況(北西から)
図版15　１．SB08 完掘状況(北西から)、２．SB08 東西ベルト(床、南から)、３．SB08 南北ベルト(床、西から)
４．SB08 東西ベルト(掘方、南から)、５．SB08 南北ベルト(掘方、西から)
図版16　１．SB08 周溝土層断面(南から)、２．SB08 遺物出土状況(壺72・73)、３．SB08 炉検出、半裁状況(西から)
４．SB08 炉完掘状況(西から)、５．SD01 検出状況(北西から)
図版17　１．SD01 完掘状況①(北西から)、２．SD02 完掘状況②(西から) 、３．遺物出土状況(南から)
４、SD01 ベルト①(南西から) ５．　SD01 ベルト②(南西から)
図版18　１．SB09～SB11 検出状況(南東から)、２．SB09、SB11 完掘状況(南東から)
図版19　１．SB09 炉半裁状況(南西から)、２．SB09 炉完掘状況(南西から)、３．SB09 完掘状況(南東から)
４．SB10 東西ベルト(東から)、５．SB10 完掘状況(東から)、６．SB11 炉半裁状況(南西から)
７．SB11炉跡完掘状況(南西から)、８．SB11 完掘状況(南東から)
図版20　１．SB12 検出状況(南西から)、２、SB12 完掘状況(南西から)
図版21　１．SB12 炉検出状況(東から)、２．SB12 炉半裁状況(東から)、３．SB12 炉完掘状況(東から)
４．SB12 遺物出土状況(短頸壺92)　、５．SB13 検出状況(南西から)
図版22　１．SB13 完掘状況(南西から)、２．SB13 炉半裁状況(西から)、３．SB13 炉完掘状況(西から)
４．SK02 半裁状況(南西から)、５．SK02 完掘状況(南西から)
図版23　１．SB14 検出状況(南西から)、２．SB14 床検出状況(南西から)
図版24　１．SB14 完掘状況(南西から)、２．SB14 ベルト(床、南西から)、３．SB14掘方及び壁溝検出状況(北から)
４．SB14 ベルト(掘方、南西から)、５．SB掘方及び壁溝土層「(南から)
図版25　１．SB14 炉検出状況(西から)、２．SB14 炉跡裁状況①(西から)、３．SB14 炉跡裁状況②(西から)
４．SB14 炉完掘状況(西から)、５．SB14 炉枕石除去状況(西から)
図版26　１．SB15 検出状況(南西から)、２．SB15 壁溝完掘状況(南西から)、３．SB15?枕石検出状況(南から)
４．SB06 内側壁溝検出状況(南西から)、５．SX01 検出状況(北から)、６．SX01 ベルト(東から)
７．SX01 完掘状況(北から)、８．SX01 遺物出土状況(北から)
図版27　１．SD04・SB16完掘状況(南から)、２．SD04土層断面①(北から)、３．SD04土層断面②(東から)
４．SB16検出状況(北から)、５．SB16完掘状況(北から)
図版28　１．上土掘削時出土土器、２．SB01・SB03出土土器
図版29　１．SB04出土土器、２．SB05・SB06出土土器①
図版30　１．SB06出土土器②、２．SB06出土土器③
図版31　１．SB07出土土器①、２．SB07出土土器②
図版32　１．SB08出土土器、２．SB09出土土器
図版33　１．SB10・SB11出土土器、２．SB12出土土器
図版34　１．SB14出土土器、２．SD01出土土器①
図版35　１．SD01出土土器②、２．SD01出土土器③
図版36　１．SD01出土土器④、２．SD01出土土器⑤
図版37　１．SX01出土土器⑥、２．SD01出土石器

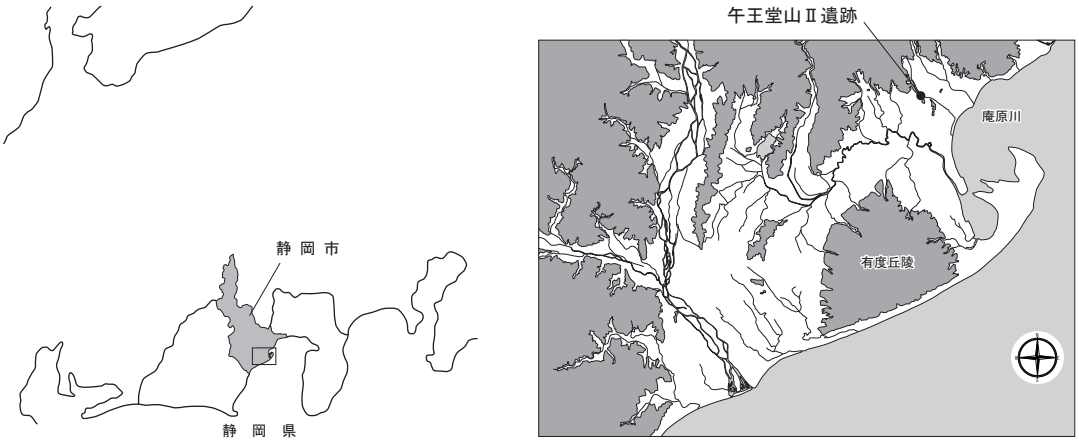
第１章　序論

第１節　調査に至る経緯

午王堂山遺跡は、静岡市清水区庵原町字上午王堂に広がる弥生時代から平安時代にかけての複合遺跡である。東名高速道路清水インターチェンジ建設に伴い、第１次調査として昭和39年４月28日から５月９日まで、第２次調査が同年７月25日から８月27日まで実施された。調査は計画地にトレンチを35本設定して実施され、弥生時代中期の溝や弥生時代後期、古墳時代初頭、古墳時代中期、平安時代の住居跡が検出された。また、同丘陵上には古墳が３基認められ、そのうちの１、２号墳の調査が行われている。第１次調査では手つかずとなった３号墳は昭和48年にトレンチ調査が実施され、一部主体部まで調査が実施された。主体部は粘土郭で副葬品として三角縁神獣鏡が出土している。この調査によって、午王堂山３号墳は前方後方墳であるとの推定がなされ、三角縁神獣鏡が出土したことから、近くの神明山１号墳と同様、清水平野で最古級の古墳として注目されている。現在では東名高速道路建設により失われた丘陵の南半を午王堂山Ⅰ遺跡、残存する北半を午王堂山Ⅱ遺跡として包蔵地登録がなされている。今回の調査は、これらに続く第3次の調査（午王堂山遺跡からの通しとして第3次調査とする）である。

今回、静岡市教育委員会（市文化財課の補助執行）は、平成26年３月に株式会社清水ゴルフセンター（株式会社しみずソーラーと同一の施主）より、ゴルフ場を閉鎖し太陽光パネルを設置する計画があるとの照会を受けた。当該地は午王堂山Ⅱ遺跡に含まれていたほか、３号墳の前方部も含まれていたため、遺構の埋没状況を確認するため確認調査を実施することで調整を進めた。特に3号墳については、現状保存することで株式会社しみずソーラーに理解を得たため、周溝を検出することを目的にトレンチ調査を実施した。確認調査はゴルフ場の営業を休止して実施することとなったため、極力調査期間を短縮し、成果をあげるためトレンチ幅を狭くするなどし、平成26年４月16日から同年４月25日まで実施した。トレンチは計画地内に10本、うち古墳に３本設定した。その結果、3Tr及び7Trから遺構・遺物が検出され、3Trでは住居の床が検出され、床上では甕が潰れた状態で出土した。既往の調査から3Tr付近にも住居域が広がっているものと想定された。それ以外のトレンチでは、ゴルフ場あるいはゴルフ場以前の蜜柑畑に伴う造成土下が地山という状況であり、丘陵の平坦部にのみ遺構が残存することが判明した。古墳は2KTrから墳丘裾と周溝が確認され、昭和48年の調査を踏襲する成果となった。このため、想定範囲及び周溝の想定範囲を保護の対象として工事計画から外すことでご承諾いただいた。

確認調査の結果をもとに、遺跡を破壊しない計画への変更を求めたが、不可能とのことであったため、3Tr及び7Tr、確認調査が実施できなかった南東のグリーンについて本発掘調査が必要と判断した。平成26年５月19日付けで株式会社しみずソーラーから埋蔵文化財発掘の届出書が提出され、同年５月19日付け、26静生文文財第814号で本発掘調査及び工事立会い指示を行った。これにより埋蔵文化財までの保護層が確保できない約1,480㎡において本発掘調査を実施することとなった。



第1図　午王堂山Ⅱ遺跡の位置

第２節　調査の方法と経過

(1) 調査の方法

今回の調査では、太陽光パネル設置に係る造成箇所に調査区を設定した。発掘調査面積は約1,480㎡である。現地はゴルフ場であったため、まず重機にて芝生を除去し、その後造成土を除去した。以下、人力で遺構検出面の精査を行い、遺構、遺物を検出、完掘した後に記録作業を行った。

遺構測量作業は、トータルステーションを使用して、1/20及び必要に応じて1/10の縮尺で図作成を行った。現地における写真撮影は、35㎜カラーリバーサル及びモノクロ、６×７版モノクロを基本とし、補助的にデジタルカメラを使用した。また、基準点測量は株式会社ユニオンに委託して行った。

(2) グリッドの設定

今回の調査では国家座標を軸として、任意の調査グリッドを設定している。グリッドは10m間隔で、南北方向を数字、東西方向をアルファベットで表記し、その組み合わせで各グリッドの位置を表している（第３図、A1・B1などと呼称する。）。

(3) 調査の経過

午王堂山Ⅱ遺跡の発掘調査は平成26年６月９日より開始し、平成26年８月14日まで行った。調査の工程は以下のとおりである。また、調査完了後に工事立会い対象地域とした箇所で遺構（SB16・SD04）が確認されたため、一時工事を中断し平成26年11月10日から平成26年11月13日まで追加で調査を実施した。

平成26年

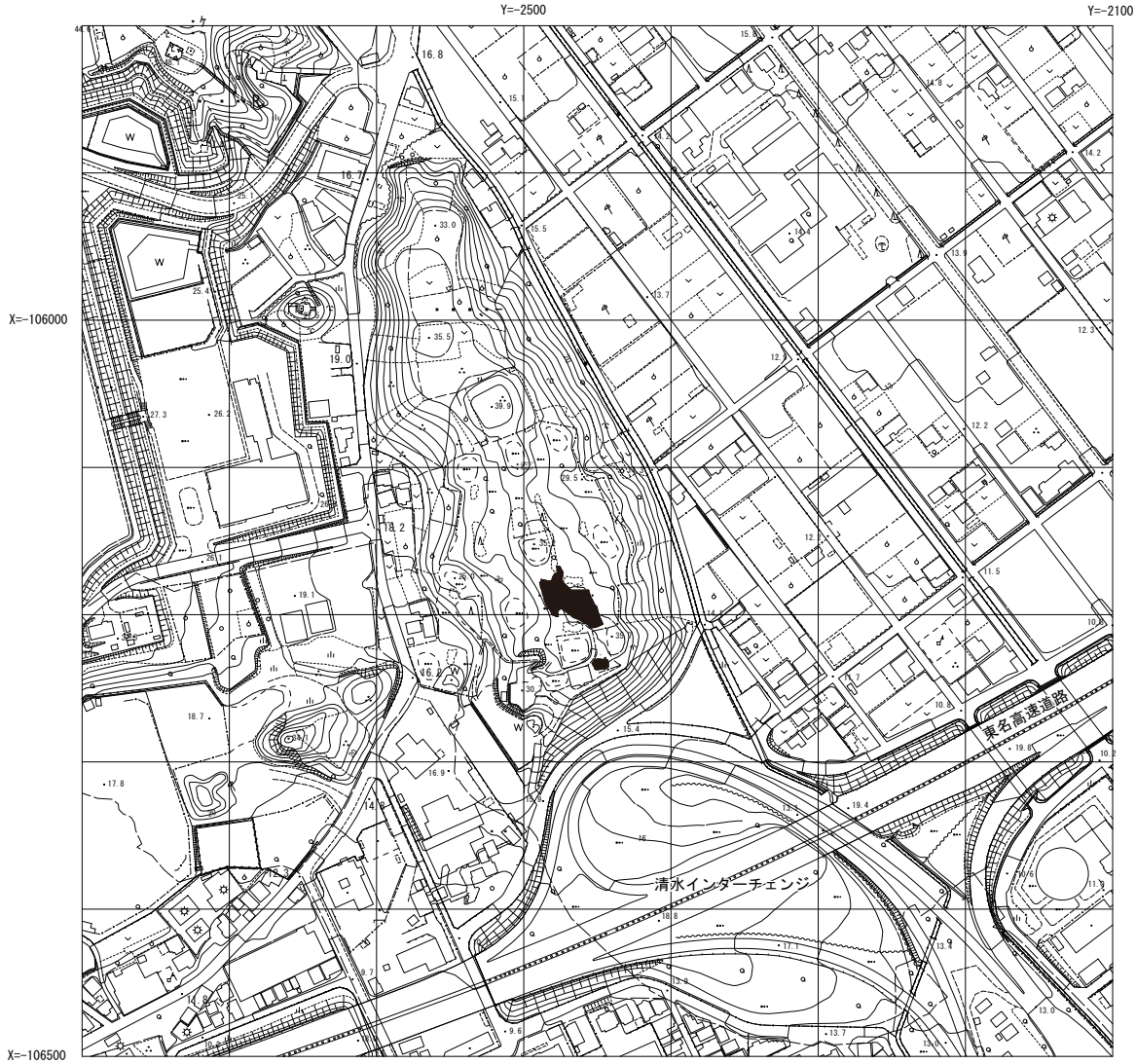
６月９日	調査区芝生除去、表土掘削
６月10日～	表土掘削、備品等搬入、トレンチ掘削
６月11日	造成土除去面で地山を掘り込む住居跡確認
６月19日	住居跡の検出作業開始
６月23日	住居跡10基検出
６月24日	SB01掘り方まで完掘開始
７月４日	SB03検出、炉跡半裁
７月９日	SD01、SD02、SB07掘削
７月14日	SB05床面検出、下層にSB06が検出
７月15日	SB07床面、炉跡検出
７月16日	SB08床面検出、床面上から壺底部出土
７月22日	SB04遺物集中出土、SB09～14掘削開始
７月28日	SB14床面及び炉跡、柱穴検出
８月１日	遺構全体図作成開始
８月６日	SB06の内側に重複する壁周溝完掘
８月８日	SB09～14の検出状況写真撮影
８月10日	SB09～14掘り方まで掘削
８月14日	遺構平面図作成完了

重機掘削状況

発掘作業状況

(4) 資料整理

現地調査と併行して、現場事務所にて出土遺物の洗浄、注記、接合作業等の基礎整理を実施した。基礎整理作業の続き及び図化・写真撮影等の本整理作業については、静岡市埋蔵文化財センターで実施した。出土遺物のうち、遺構から出土した遺物については、なるべく実測を行った。遺物実測図及び遺構図については、イラストレーター（CS4）を使用して製図した。



第2図　調査位置図（S=1/5,000）

第3図　グリッド設定図（S=1/1,000）

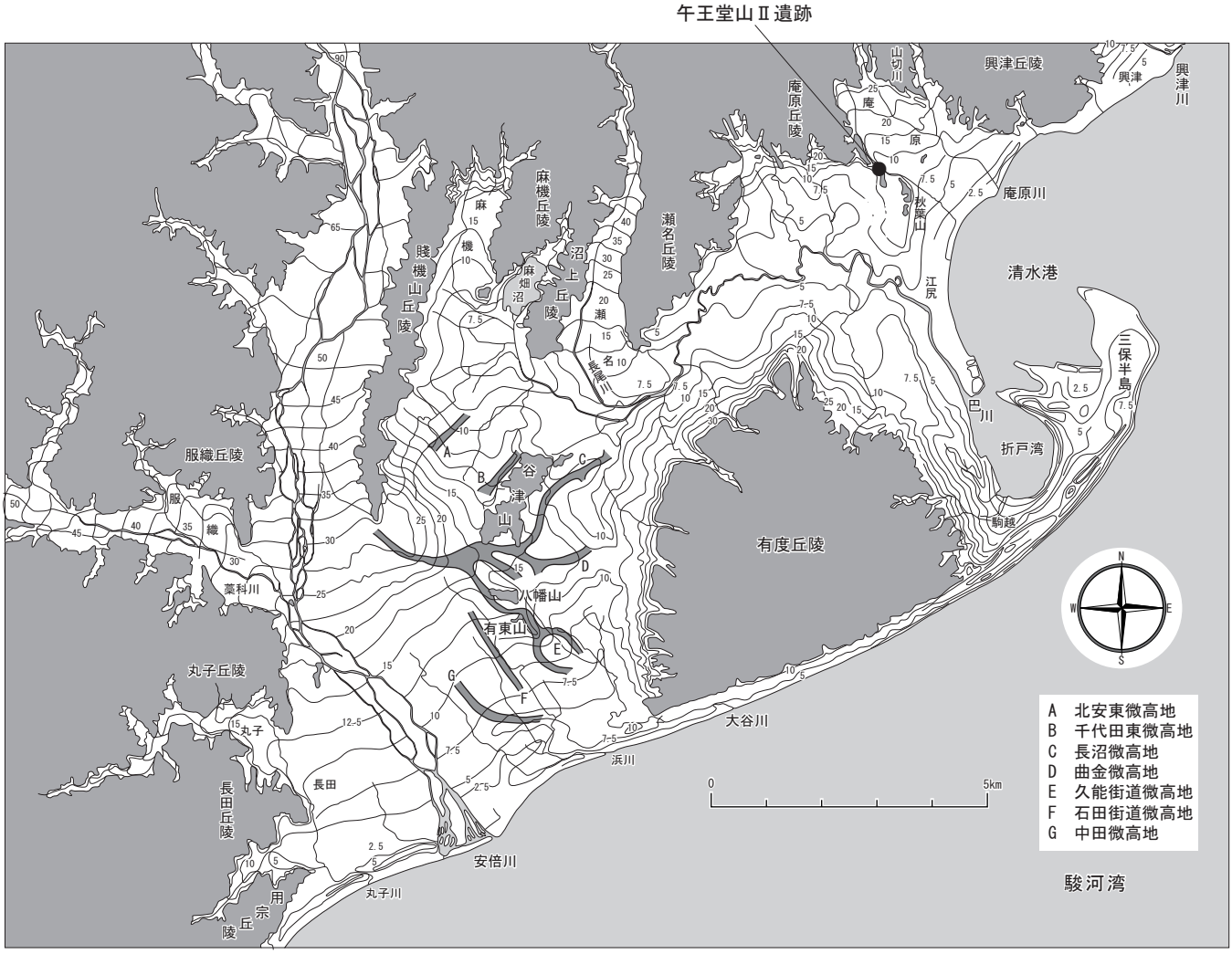
第３節　地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

午王堂山Ⅱ遺跡は、清水平野北東部の庵原山塊から南へ舌状に延びる丘陵上に位置している。丘陵は標高30m前後の低平なものであり、1958年の地形図からは丘陵上に平坦面が確認できる。平坦面は多少の起伏が見られるが、遺跡群は中央部から平野部に突出した南側の平坦面（南方に向かって緩やかに傾斜）に生活の場を見出し展開している。未調査ではあるが、丘陵北側の平坦部でも石器が表採されたとされており、この丘陵上全域が包蔵地範囲として登録されている。

当丘陵の東側は庵原川流域の沖積低地が広がり、現在は宅地化が進むものの、それまでは「庵原たんぼ」と呼ばれるほど水田が広がっていた地域である。西側には巴川流域北岸の飯田沖積低地が広がる。南側には舟山、秋葉山があり、南東側には神明山や嶺の丘陵など小さな独立丘陵が存在する。いずれの丘陵上にも居住域や古墳などの墓域が展開されていたが、現在、舟山はほとんど、午王堂山は南半が東名高速道路清水インターチェンジにより削平されている。神明山や嶺の丘陵についても嶺神明伊佐布線や宅地化により、旧地形を伺うことは難しくなっている。駿河湾からは2.5kmほど離れている。

庵原地域の遺跡群は、沖積低地（自然堤防や後背湿地）やそれに接する低い丘陵ないしはその裾部の小規模な扇状地に立地している。



第4図　静岡・清水平野の地形（明治22年測量）

『特別展 静岡・清水平野の弥生時代―新出土品に見る弥生時代―』
1988 静岡市立登呂博物館の掲載図を再トレース、改変した。

(2) 歴史的環境

清水平野では、明確に遺跡が確認できるのは縄文時代になってからである。午王堂山Ⅱ遺跡が位置する庵原地域においても、縄文時代の遺跡が丘陵の先端部や独立丘陵上などにまとまりをもって点在している。

縄文時代の遺跡は、庵原山塊と平野の接点にある現在の草ヶ谷、大乗寺台地を中心とした一帯で確認される。前期には、集石遺構やピット群が検出された大乗寺遺跡が知られる。出土する土器は諸磯式土器が主体であり、庵原地域で最も古い土器である。また、多種多量の石器類が出土しているが、特に石錘の出土量が多く、漁労を主体とした生活を営んでいたことがわかる。大乗寺遺跡は、晩期まで断続的に人々の活動痕跡が見られるため、台地の中でも中核をなす集落遺跡として考えられている。中期では、高部山遺跡や原平遺跡、寺田遺跡など大乗寺遺跡の周辺に遺跡が展開していく。後期、晩期では、大乗寺遺跡や原平遺跡、若宮遺跡で土器片や石錘などがわずかに見られるものの、集落跡など明確な痕跡は認められていない。

弥生時代の遺跡は、縄文時代と似通った遺跡分布を示すが、庵原低地への進出が確認される。前期は大乗寺遺跡で水神平式土器が出土したとされるが、明確な遺構はない。中期は、丘陵上の午王堂山Ⅰ遺跡、神明遺跡、上嶺遺跡で、集落域、墓域が確認されている。低地では、一丁田遺跡で弥生時代中期の有東式期の細頸壺が出土したほか、磨製石斧や敲き石、石包丁も出土している。これらの遺物が伴う住居はプランが調査区外に延び明確ではない。このほか、水田跡が検出され、大畦畔付近からは弥生時代中期の条痕土器片が出土している。大畦畔築造時に混入した可能性も排除できないため、この水田跡が弥生時代中期に帰属するかは慎重にならざるを得ないが、居住域など少なくとも低地での営みは始まっているものと考えられる。後期では、住居跡やU字溝などが検出された午王堂山Ⅰ遺跡や大型壺が出土する原平遺跡、住居跡や古墳時代初頭にかけての土器が出土した山ノ根遺跡、上嶺遺跡などが知られる。

古墳時代の遺跡は、集落遺跡として先に述べた午王堂山Ⅰ遺跡、神明遺跡、上嶺遺跡が弥生時代から継続して営まれる。ほかにも明確な遺構は伴わないものの、土師器や須恵器が出土する遺跡として、大手前遺跡、町屋遺跡、下川原遺跡がある。庵原川の氾濫原に位置するこれらの遺跡は、庵原川流域の集落遺跡が洪水に流され、その洪水堆積物に土器が混入していることも考えられる。厚い洪水堆積層に覆われており、未調査なこともあって性格は不明である。生産遺跡としては、秋葉山窯跡群がある。6世紀後半から8世紀後半まで操業していた可能性が報告され、現在8基の窯跡が確認されている。一丁田遺跡では、庵原川の洪水堆積物に覆われた水田遺構がされており、低地付近の集落遺跡で生活をしていた人々の生産域としての場であったことがわかる。

庵原地域では、前期に神明山1号墳、午王堂山3号墳、三池平古墳の大型古墳が認められている。神明山1号墳は前方部先端が撥形に開く前方後円墳で古相を示し、午王堂山3号墳は粘土郭に三角縁神獣鏡を副葬する前方後方墳である。三池平古墳はこの両古墳よりは後の古墳である。独立丘陵など清水平野を一望できる立地にそれぞれ大型古墳が築造されている。中期では、鏡1面が副葬されている午王堂山1号墳が挙げられる。後期になると、前半は古墳の築造が希薄になるものの、後期後半に入ると東久佐奈岐古墳群、薬師平古墳群など小規模な古墳群が形成される。

奈良時代では、古代寺院跡と考えられる尾羽廃寺跡がある。庵原地域の東南端、尾羽の扇状地上に位置する。古くから礎石や古瓦が出土し、駿河志料や駿河記にもその所在が記されている。また、金堂や講堂が確認され、掘立柱建物跡なども多数検出されている。

平安時代では、集落跡として弥生時代から継続して営まれる午王堂山Ⅰ遺跡、上嶺遺跡、神明遺跡など丘陵上で多くの住居跡が検出されている。ほかにも、低地部と平野部の境目付近に位置する小里前遺跡では、竈を伴った竪穴住居が検出されている。出土遺物には鉄滓や炉壁片が出土していることから周辺に鍛冶遺構の存在が考えられる。

第5図　遺跡位置図（国土地理院1/25,000「清水」）

1	午王堂山Ⅱ遺跡	10	庵原山城跡	19	町屋遺跡	28	大屋敷遺跡	37	大田切Ⅱ遺跡
2	午王堂山古墳群	11	大乗寺遺跡	20	小屋敷遺跡	29	神明山古墳群	38	大坪遺跡
3	午王堂山Ⅰ遺跡	12	原平遺跡	21	庵原館跡	30	深田遺跡	39	角田遺跡
4	一丁田遺跡	13	寺田遺跡	22	小里前遺跡	31	嶺遺跡	40	飯田館跡
5	尾羽廃寺跡	14	足高遺跡	23	下川原遺跡	32	秋葉山窯跡群	41	下野遺跡（Ａ地区）
6	若宮遺跡	15	高部山遺跡	24	船山遺跡	33	秋葉山遺跡	42	下野遺跡（Ｂ地区）
7	上平遺跡	16	大手前遺跡	25	山ノ根遺跡	34	秋葉山古墳群	43	石川Ⅰ遺跡
8	三池平古墳	17	上町屋遺跡	26	神明遺跡	35	矢倉遺跡	44	飯田遺跡（判官大島地点）
9	三池遺跡	18	大門古墳	27	上嶺遺跡	36	大田切Ⅰ遺跡	45	山原古墳

第２章　調査の成果

第１節　基本土層

Ⅰ層　褐色土

現地表下0.1～0.5m前後がゴルフ場造成土である。

Ⅱ層　灰褐色土

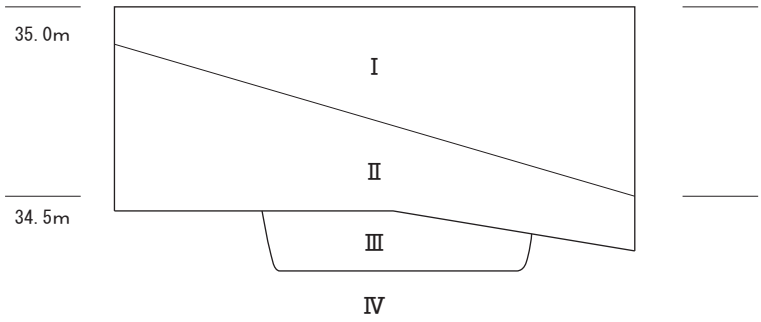
ゴルフ場造成前は蜜柑畑であったため、その際の堆積と考えられる。層中には畳の繊維や陶磁器片、ガラスなどが含まれる。

Ⅲ層　黒褐色土

弥生時代から奈良時代にかけての遺構覆土である。（時代ごとでⅢ層の色調が異なる）今回の調査では、生活層と考えられる遺物包含層は検出されなかった。本来存在していた包含層は、Ⅰ、Ⅱ層によって削平されていると考えられる。

Ⅳ層　黄褐色土

当該丘陵のベースとなる地山である。今回の調査区内では粘性を持った部分や礫を混じる部分が確認される。今回の調査では、Ⅰ、Ⅱ層除去面であるⅣ層が遺構検出面である。



第6図　土層模式図（S=1/20）

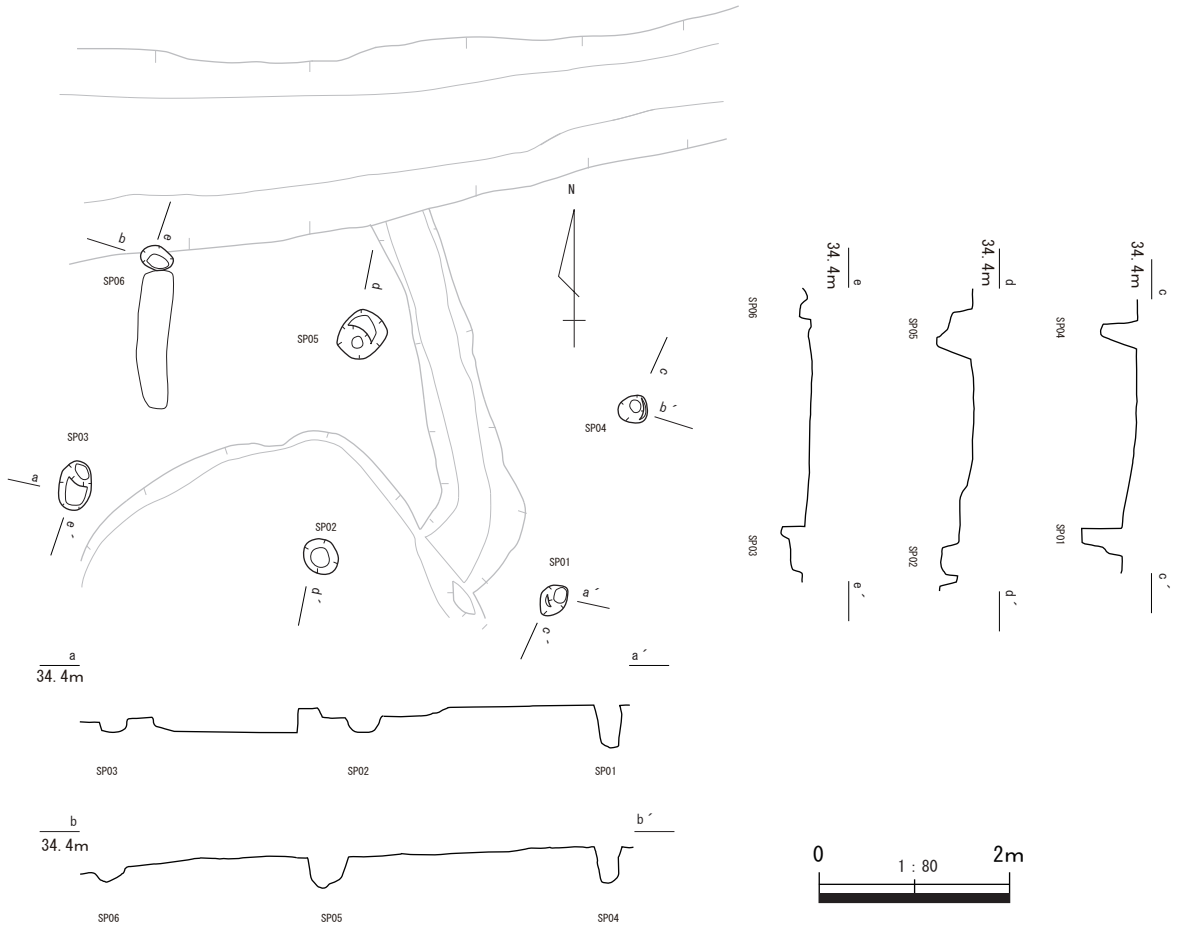
第２節　遺構

今回の調査では、弥生時代から古墳時代にかけて竪穴住居及び溝が検出された。奈良時代の遺構は、１間×２間の掘立柱建物跡が検出されている。調査区全域で遺構は検出されているが、特に調査区の中央やや西寄りに遺構が複数切り合い密集している。調査区中央で検出される竪穴住居床面の標高は34.3mと最も高く、東西は標高34.0m程で検出される。調査区中央付近に高まりがあり、その東西、主に西側に住居が密集する。これは昭和39年の調査で検出された遺構分布が丘陵の西側であることに似た傾向である。以下、各時期の遺構について詳述する。

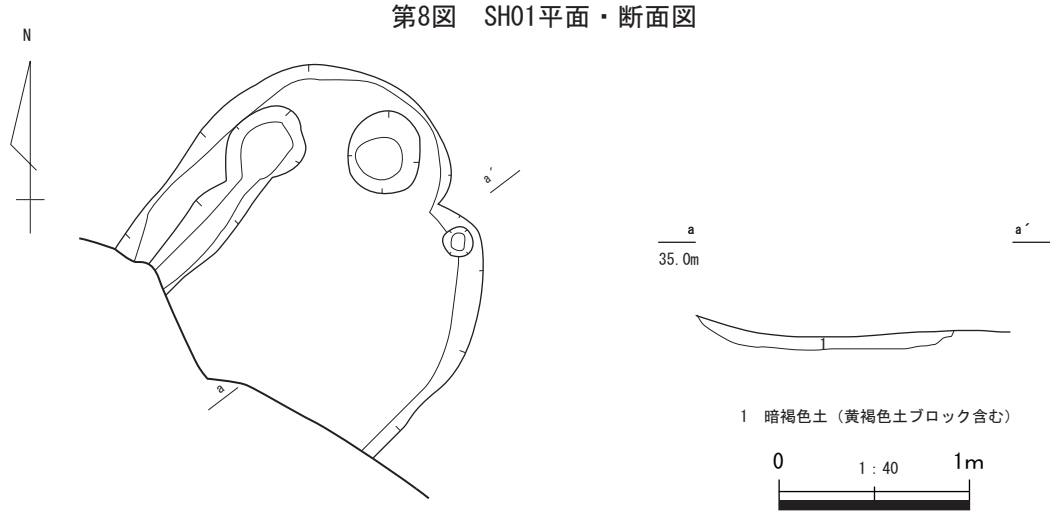
（１）奈良時代の遺構

SH01（第７図）　E3・F3グリッドで検出された。地山及びSB07の覆土を掘り込む柱穴が確認されたため、周囲を慎重に精査したところ、６基の柱穴からなる掘立柱建物跡が検出された。いずれも柱根は残存しておらず、抜き取り痕も明瞭ではなかった。検出された柱穴の柱間は、東西方向で２間（3m前後）、南北方向で１間（2.6m前後）である。柱穴は、検出面から－0.3～－0.45m程掘り込まれている。覆土は黒褐色土で、他の弥生時代、古墳時代の遺構と比べて色調が暗く、ピット１基は弥生時代の竪穴住居覆土を掘り込んでいたが、容易に検出することができた。

このうちの柱穴SP01からは、高台の付いた須恵器の坏身が一点出土している。そのため、この遺構は奈良時代に帰属すると考えられる。



第8図　SH01平面・断面図



第9図　SX01平面・断面図

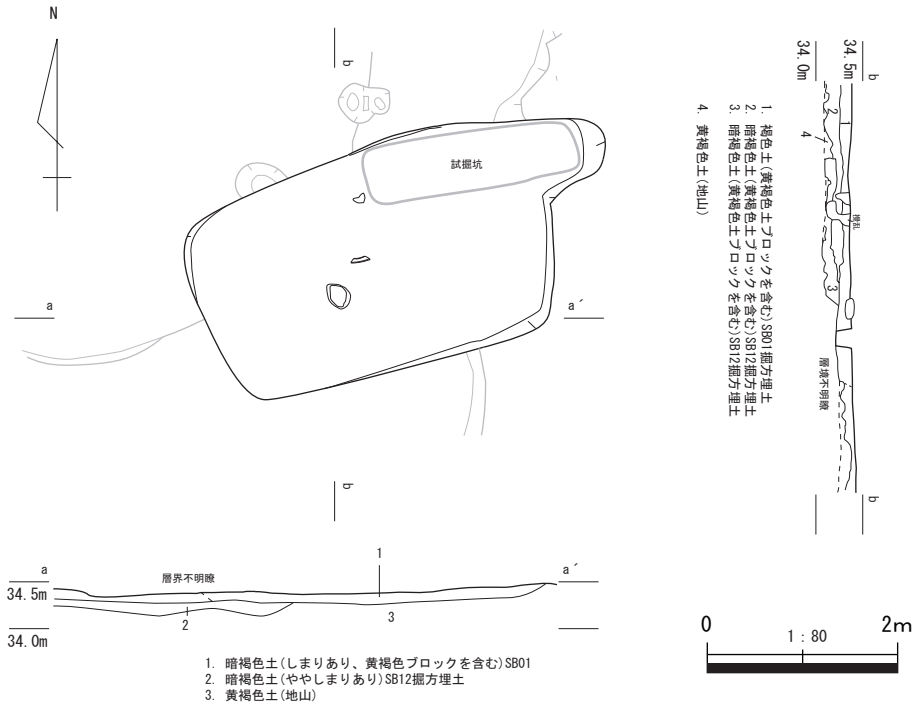
（２）古墳時代の遺構

SX01（第８図）　E4で検出された。一部はゴルフ場の植栽があったため調査することはできなかったが、長軸1.9m、短軸1.8m検出された（工事立会いでも植栽の影響により調査区外への広がりは確認できなかった）。地山を浅く掘り込み、その中にピット状の掘り込みが２ヶ所みられる。貼床や壁溝は認められず、規模、形状からも住居跡とは考えにくい。

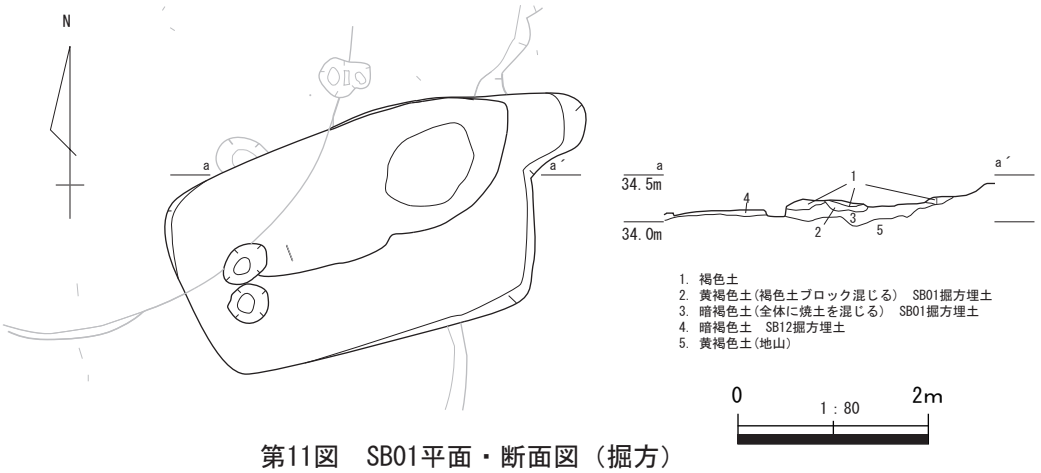
出土遺物は、覆土中から二重口縁壺及び土師器片が多数出土した。古墳時代前期の遺物であり、SX01は古墳時代前期の遺構と考えられる。覆土は黒褐色土の単層で、奈良時代の遺構覆土である黒色土よりは褐色系の土で、弥生時代の遺構覆土に類似する。

F
E
D
C
2
3
4
5
SD04
SB16
SD02
SD01
SB08
SH01
SB07
SK01
SB04
SB13
SB11
SB12
SB15
SB06
SB05
SB10
SB01
SB09
SB03
SX01
SB02
SB14
SD03
SK02
N
0
1 : 150
10m

第７図　調査区全体図



第10図　SB01平面・断面図（床面相当）



第11図　SB01平面・断面図（掘方）

（３）弥生時代の遺構

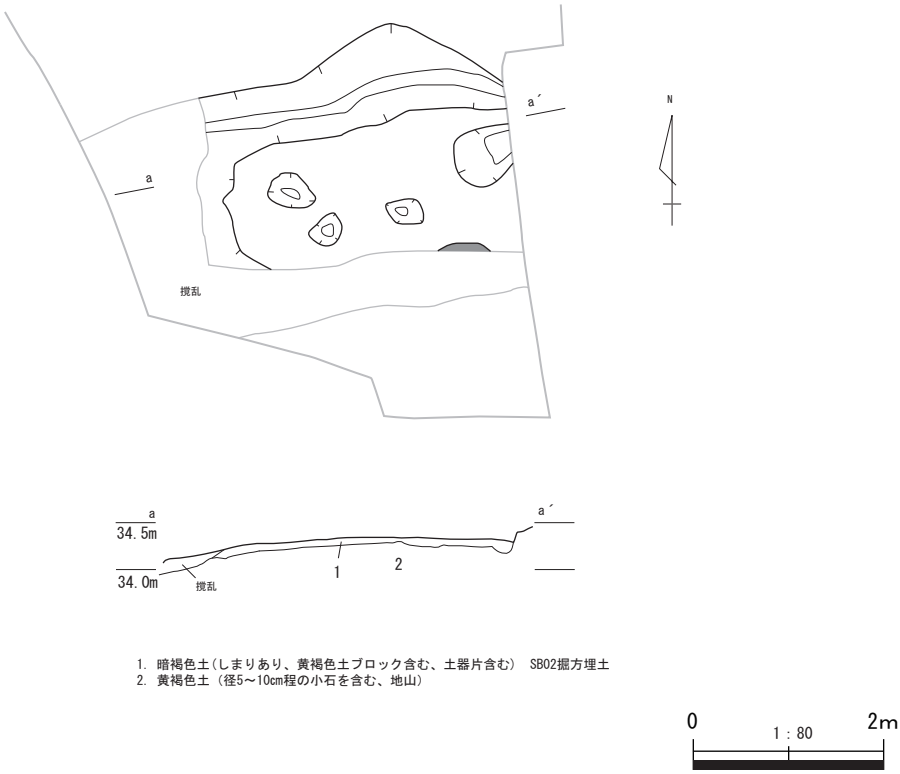
SB01（第９、10図）　E4で検出された。ゴルフ場、蜜柑畑の造成土により上面を削平されている。造成土を除去したところ、南東側で地山への掘り込み、中央付近に焼土が点在する状況が確認されたため、その高さで遺構検出を行った。SB01の西半はSB03内に収まるため土層帯を残し、土層断面観察を試みたが、壁の立ち上がりは不明瞭であった。規模からみても若干の誤認がある可能性がある。SB03及びSB12と切り合い関係にあり、SB03及びSB12より新しいことがわかる。

検出された住居の形状は、長方形に近いがやや不整形である。住居の規模は、東西方向に約4m、南北方向に約2.1mである。床は、既に削平されており確認することはできなかった。

炉は、住居の中心に焼土が点在するが、明確なプランは認められず住居廃絶時に破壊されている可能性がある。造成土除去面で焼土の上に直径20㎝程の石が置かれていたが、石は焼けていないため炉に伴うかは不明確である。また、壁溝は検出されていない。

住居の掘方は、埋土が黒褐色土で黄褐色土ブロックを含む。北半は一段低く、底面はほぼ平らに整えられている。掘方まで検出したところ、柱穴が２基確認されたが、有意な配列は見出せない。

出土遺物は、焼土付近から台付甕の口縁部が出土している。



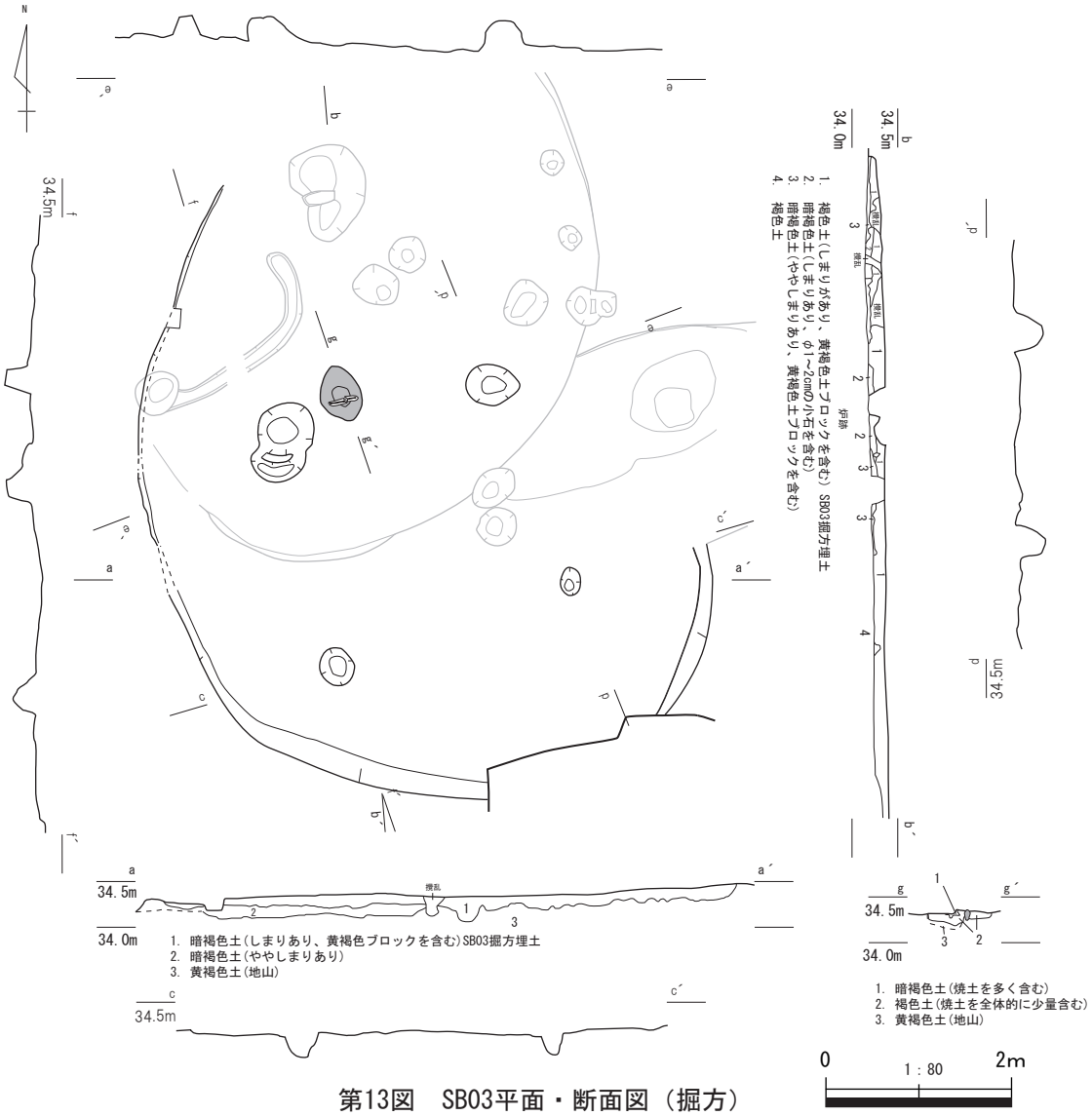
第12図　SB02平面・断面図（掘方）

SB02（第12図）　E4•E5•F4•F5で検出された。ゴルフ場、蜜柑畑の造成土により床面まで削平されている。造成土を除去したところ、地山を掘り込む暗褐色土が確認され、土器片を含むことからこの高さで遺構検出を試みた。西側はゴルフ場造成によって切土され傾斜となっており、本来遺構が延びていたものと考えられるが、削平されており確認はできなかった。南半は砂礫及び陶磁器、ガラス、畳の繊維などが確認されるため、蜜柑畑の造成土及び撹乱として判断した。また、この撹乱によって切られているが、撹乱との境で焼土がまとまって検出された。遺構の残存状況が悪く、明確なプランははっきりとしなかったが、周辺の遺構の状況や焼土が検出されたことから、住居跡として調査を行うこととした。他の遺構とは切り合い関係にない。

住居の形状、規模については前述のとおり、不明である。検出長は東西方向に最大3m、南北方向に最大2.4mである。

床は削平されていたため確認できなかった。壁溝及び貯蔵穴も確認されていない。炉は焼土がまとまって検出された位置付近に存在した可能性が高いが、落ち込みははっきりとせず、撹乱及び後世の造成によりほとんどが失われているものと思われる。

住居の掘方は、北側に溝状に確認された。掘方埋土は暗褐色土で土器片を少量含んでいる。確認された溝状の掘り込みは、壁溝とするには幅広であるため、住居築造時の掘方として判断した。それ以外は多少起伏をもつのみである。掘方まで掘り下げたところで、楕円形のプランが４箇所検出された。いずれも浅い窪みで柱穴かどうかは不明である。出土遺物は土器破片が数点出土したのみでいずれも図化し得なかった。



第13図　SB03平面・断面図（掘方）

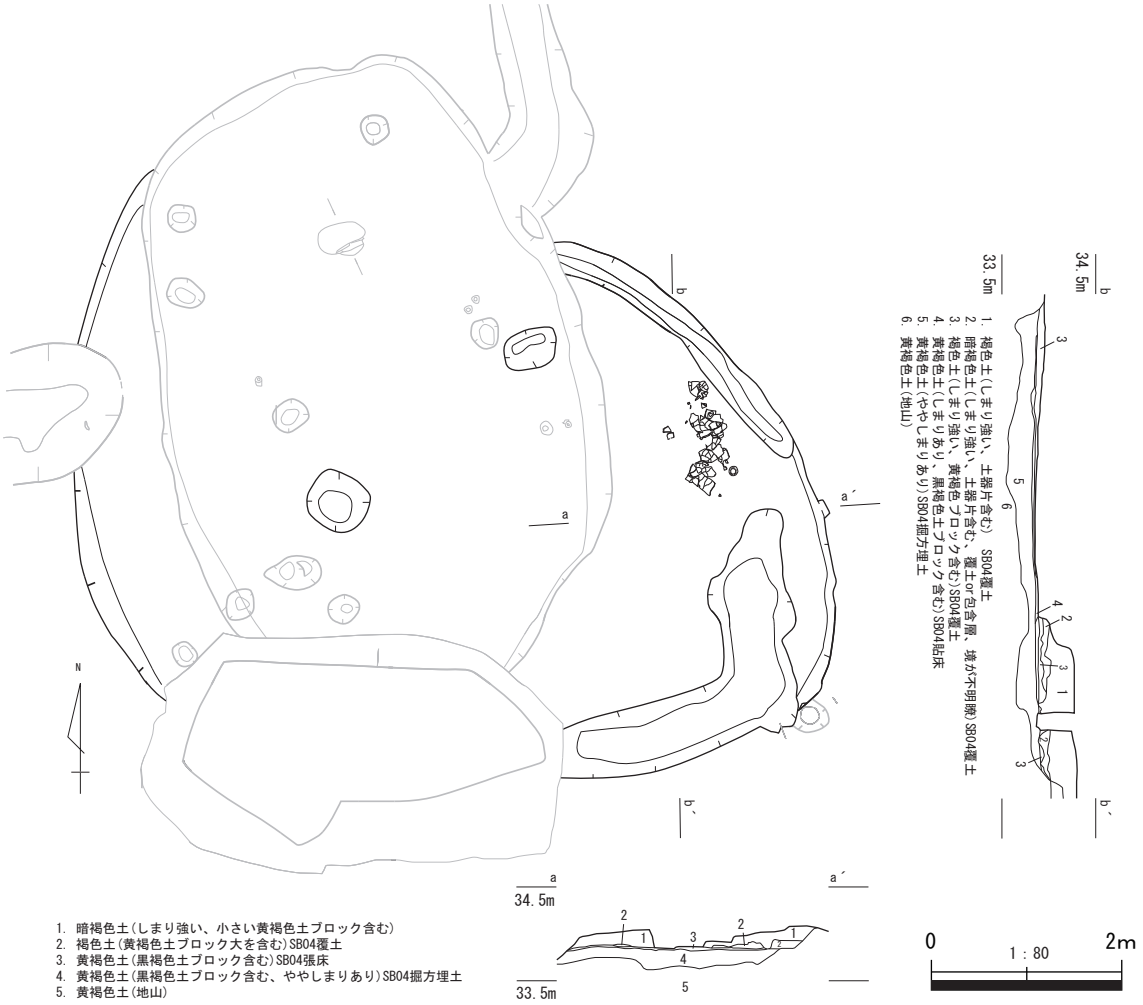
SB03　E4で検出された。ゴルフ場、蜜柑畑の造成土により上面を削平されている。造成土を除去したところ、南西及び南東で地山を掘り込む黒褐色土が確認された。また、炉が検出されたため、この高さで遺構検出を行った。北半はSB12内に収まっているため、壁の立ち上がりを把握できなかった。SB01、SB05及びSB12と切り合い関係にあり、SB01より古く、SB05 及びSB12より新しいことがわかる。

住居の形状は残存部の状況から楕円形と考えられる。住居の規模は、東西方向に5.6m前後、南北方向に推定6m以上となる。床及び貯蔵穴、壁溝は確認されていない。

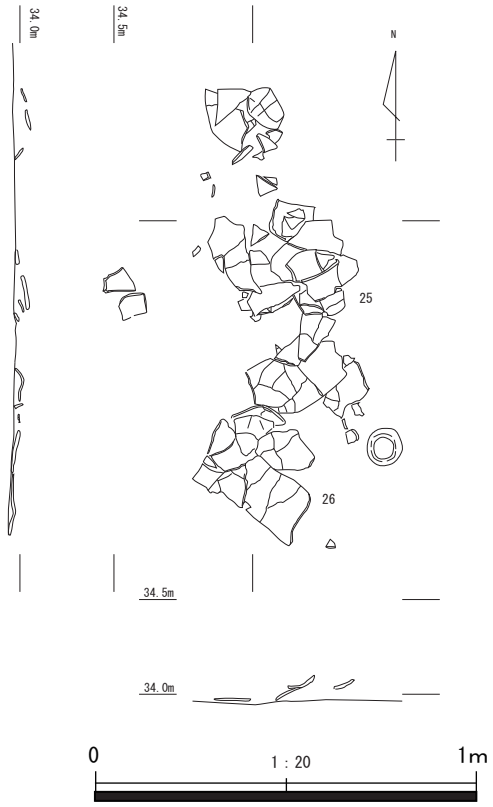
炉は住居中央より北側で検出された。南北60㎝、東西40㎝土坑状に掘り込まれ、覆土には焼土が少量含まれている。幅10㎝、長さ15㎝程の細長い石を２つ組み合わせ枕石とし、平坦面が上、尖った部分を下にして住居の主軸に直交するように据えられる。枕石は被熱を受けており赤黒く変色している。

住居の掘方は、底面がほぼ平らに整えられている。多少の起伏はあるが、他の住居で見られるような溝などは認められなかった。掘方の埋土は暗褐色土で層厚３㎝前後である。掘方まで検出したところで、直径30～40㎝程の円形プラン複数箇所で確認された。それぞれ柱穴と考えられるが、SB12と重複している。このうち炉の位置やプランから4基を主柱穴として捉えた。柱穴の間隔は、長手方向、短手方向ともに芯々で2.5m前後となる。

出土遺物は、台付甕の脚台部及び鉢または甕の口縁部が出土している。



第14図　SB04平面・断面図（床面）

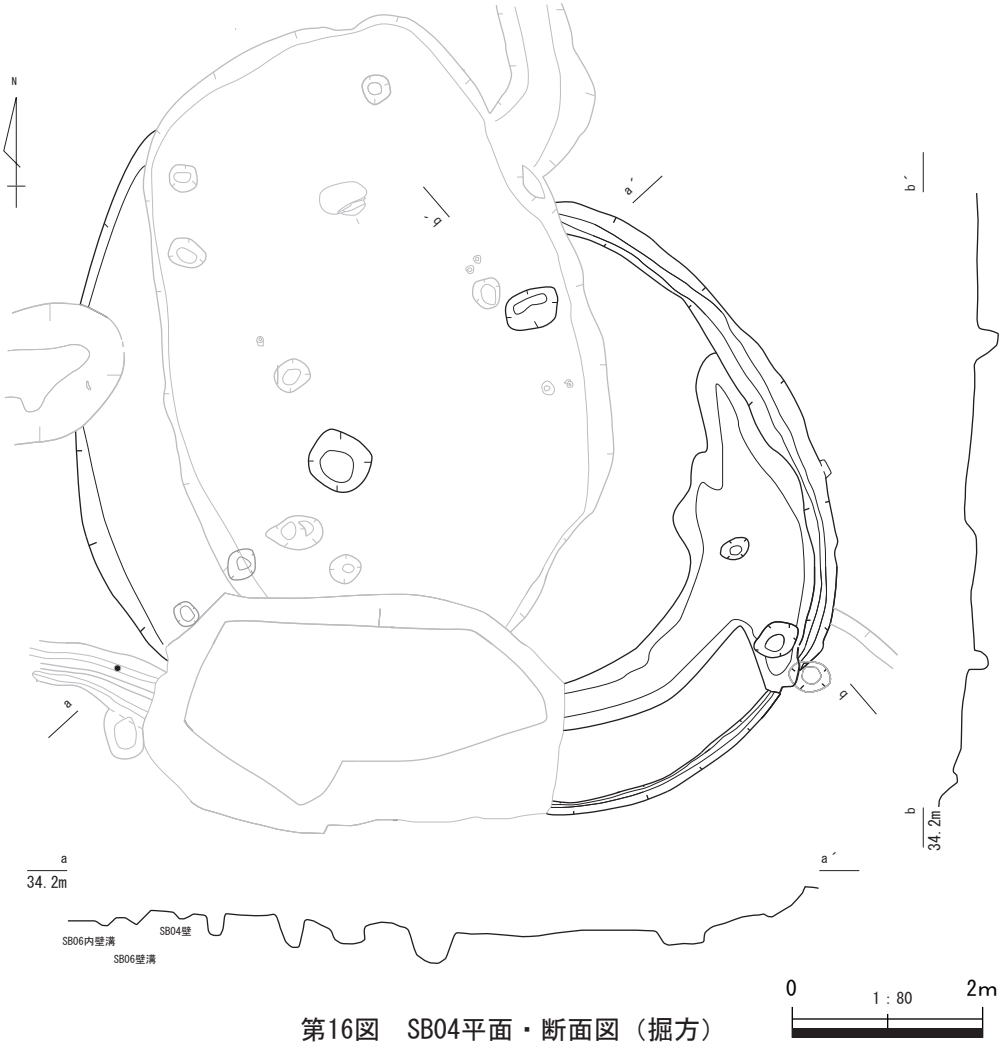


第15図　SB04遺物出土状況

SB04（第14～16図）

E3・F3で検出された。ゴルフ場、蜜柑畑の造成土により上面を削平されている箇所が多い。残存する部分では覆土を0.2m程の厚みを確認できるのみである。南西側はゴルフ場の植栽のため調査できなかった。また、SB07により全体の半分を削られている。SB07、SB12と切り合い関係にあり、SB07より古く、SB12より新しいことがわかる。

住居の形状は、残存部の形状から楕円形と考えられる。南西がゴルフ場の植栽により調査できず、その延長上に壁と考えられる立ち上がりが認められるが、SK01により切られる。調査時の誤認によりSB07の西壁ととらえた立ち上がりがSB04の西壁であった可能性も考えられるが、土層帯を残し断面を観察したもののとらえることはできなかった。住居の規模は、東西方向に6.4m、南北方向に8.6m程と推定



第16図　SB04平面・断面図（掘方）

される（SB07 西壁がSB04の西壁であった場合は、東西方向に5.8m、南北方向に6.5m前後と考えられる）。

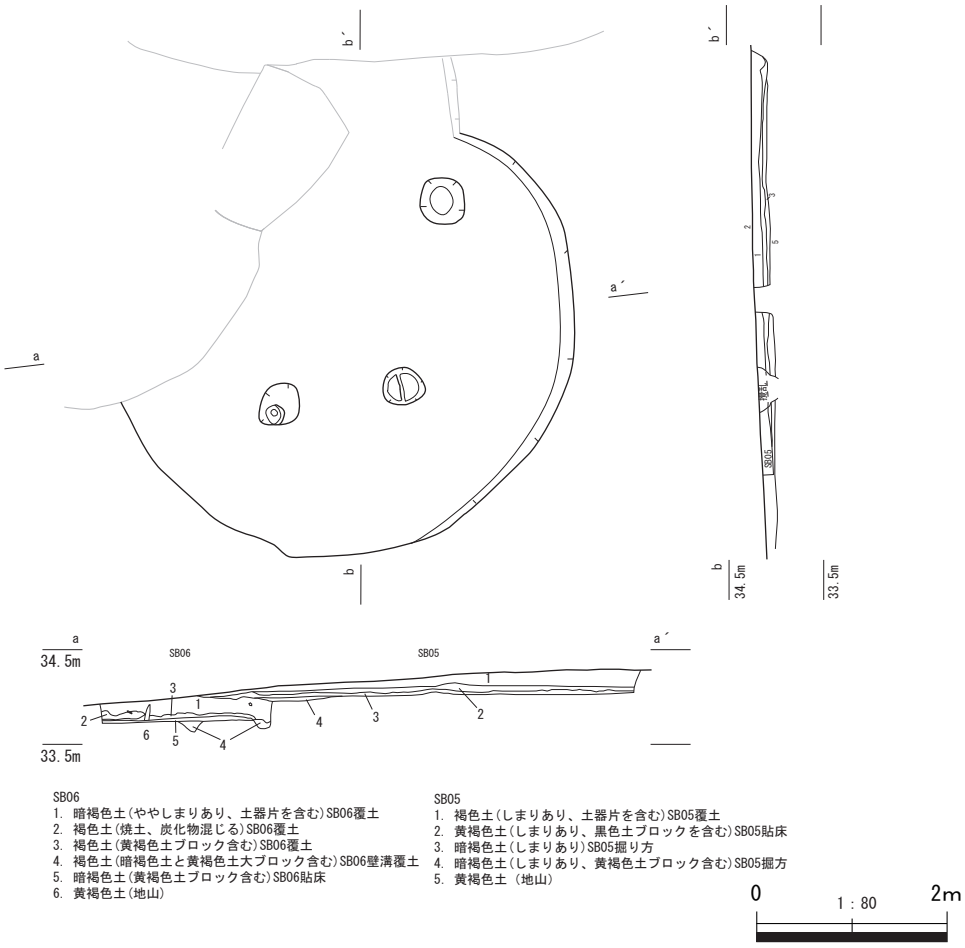
床は、黄褐色土と黒褐色土を混合した素材が用いられている。覆土の黒褐色土下で残存部分のほぼ全域にわたって確認された。南東隅は廃絶時に壊されたためか、土坑状に掘り込まれ床面が失われている。床面は部分的に硬く敲き締められており、覆土との境は比較的明瞭である。２～５㎝の厚みがあり、住居の縁近くで薄くなる、あるいは確認できなくなる。

炉は、SB07により失われている部分に位置していたものと推定されるが、確認することはできなかった。

壁溝は幅10～40㎝、東側で大きく広がるが、掘り過ぎている可能性がある。掘方まで検出したところ、残存部では全周にわたって壁溝が検出された。南側では幅5㎝程度である。

住居の掘方は、馬蹄状に周囲に溝が掘り込まれている。柱穴は１基確認された。プランなどから推定するとSB07の掘方面で検出された柱穴２基がSB04に付随すると考えられ、もう１基はゴルフ場の植栽部分に位置すると考えられる。長手方向に芯々で3.4m、短手方向に芯々で2.6mとなる。

出土遺物は床上覆土及び床面直上から出土している。床面直上からは、ほぼ形形の甕と壺が１個体ずつ潰れるようにまとまって出土した。弥生時代後期後半から古墳時代初頭のもので、廃絶時に廃棄されたと考えられる。



第17図　SB05平面・断面図（床面）

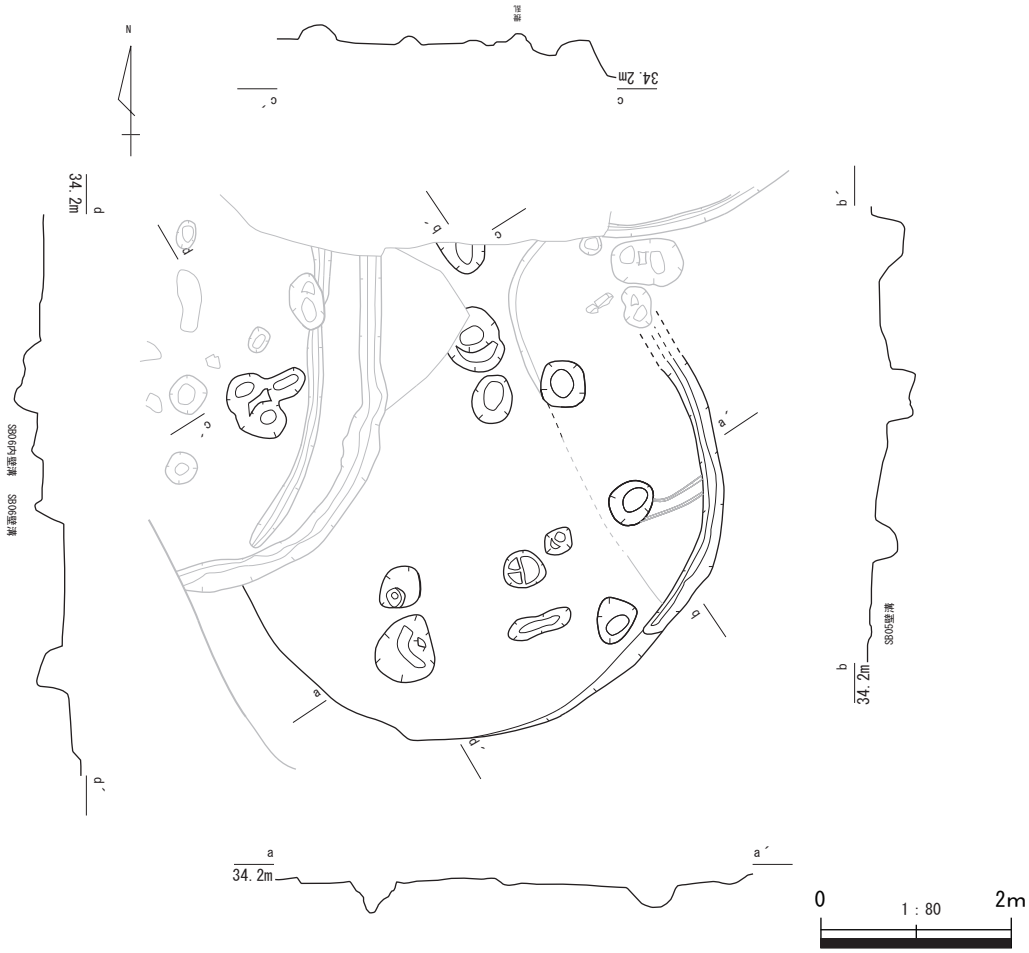
SB05（第17、18図）　E4・F4で検出された。覆土は耕作やゴルフ場の造成により撹乱されている箇所があり、一部ではこれら後世の開発に伴う堆積土の除去面で床面、掘方、SB06が検出された。また、現況が東から西へ緩やかに下る地形となっており、SB05東半は覆土や住居の壁がある程度残っているが、SB05西半は床面や壁についても残存していない箇所がある。東に隣接するSB03と切り合い関係にあり、東側上面も一部破壊されているなど、残存状況はあまりよくない。また、SB06、SB12 とも切り合い関係にあるが、SB05はこれら遺構よりも新しいことがわかる。

北側がゴルフ場の植栽により調査できなかったが、住居の形状は楕円形と考えられる。住居の規模は、東西方向に5.3m、南北方向に推定６m以上となる。

床は、黄褐色土と黒色土を混合した素材が用いられている。層厚は２～５㎝、敲き締められた様子はなく、覆土中にも床の素材と同様の黄褐色土がブロック状に砕けて混入する状況であった。住居が放棄された際あるいは覆土が堆積する以前に床が壊された可能性もある。床面上では、直径30～40㎝前後の円形ないしは楕円形のプランが３箇所確認された。それぞれ柱穴と考えられるが、間隔やプラン全体からの位置としては主柱穴とは考えにくい。

炉及び貯蔵穴は確認されていない。壁溝は掘方まで掘り下げたところ幅10㎝前後、深さ３㎝前後で住居の東側、立ち上がり際に確認された。それ以外の壁溝は残存状況がよくないこともあり、有無を明確にすることはできなかった。

住居の掘方は、底面がほぼ平らに整えられている。多少の起伏はあるが、他の住居で見られるような溝な



第18図　SB05平面・断面図（掘方）

どは認められなかった。掘方の埋土は暗褐色土で層厚３㎝前後である。掘方まで検出したところで、直径30～70㎝程の円形プランが新たに７箇所で確認された。それぞれ柱穴と考えられ、このうち３基及びSB06で検出された１基を主柱穴として捉えた。柱穴の間隔は、長手方向に芯々で3.2～3.3m、短手方向に芯々で2.8mとなる。

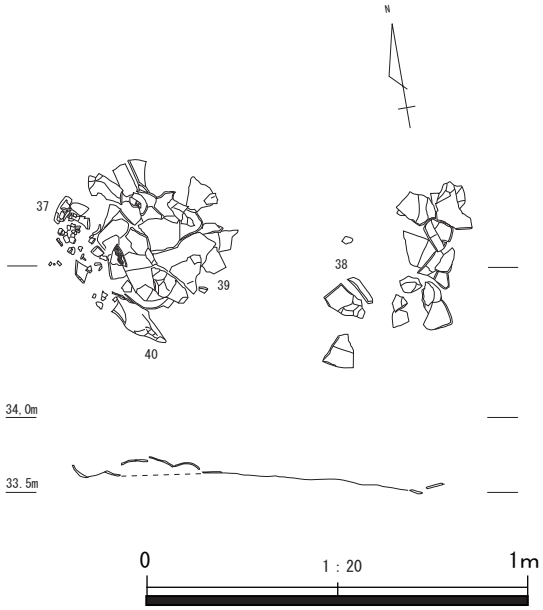
出土遺物は、床上覆土から出土している。弥生時代中期の壺頸部もみられるが、弥生時代後期の遺物が主体的である。

SB06（第19～21図）　F3・F4で検出された。調査区として設定した位置より西側は大きく地形が下り、造成により地形が改変されていることがわかる。この改変によりSB06の西半は既に失われ、東半を調査したにとどまった。覆土は耕作やゴルフ場の造成により撹乱されている箇所があり、主に北西辺りではこれら後世の開発に伴う堆積土の除去面で床面、掘方、地山が検出された。南東側はSB05の掘方を検出した際に、同時にプランを検出することとなった。南東側ではSB05の下層でSB06の覆土が良好に残存している。SB05と切り合い関係にあり、SB06はSB05よりも古いことがわかる。

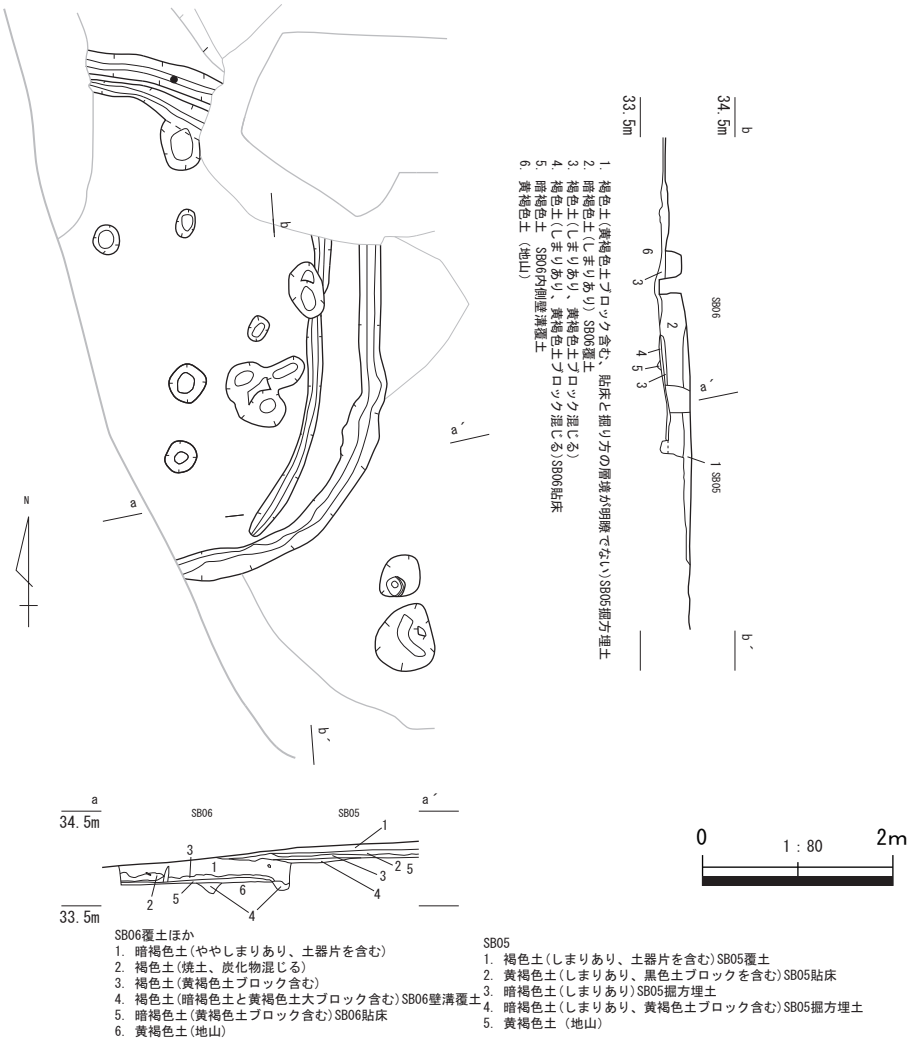
西側は調査できなかったが、住居の形状は楕円形と考えられる。住居の規模は、東西方向推定4.5m程、南北方向5.8m程となる。

床は、黄褐色土と黒色土を混合した素材が用いられている。層厚は２～８㎝、粘性がある黄褐色土がブロック状に点在し、残存状況が良好な南東側で部分的に敲き締められた様子が見られる。覆土中にも床の素材と同様の黄褐色土がブロック状に砕けて混入する状況であった。住居が放棄された際あるいは覆土が堆積する

第19図　SB06平面図・遺物出土状況（床面）



第20図　SB06遺物出土状況



第21図　SB06平面図（床面除去）

以前に床が壊された可能性もある。床面上では、直径30〜40㎝前後の円形ないしは楕円形のプランが３箇所確認された。それぞれ柱穴と考えられるが、西半が失われており、間隔やプラン全体からの位置としては主柱穴をとらえることはできなかった。

炉は、住居のほぼ中央にあたる位置に床材が赤く焼けた箇所が4か所確認できた。他の住居のように土坑状の掘り込みや枕石は確認できなかったが、この付近で火を焚いていたと考えられる。なお、貯蔵穴は確認されていない。

壁溝は、幅20㎝前後、深さ３㎝前後で住居の南東側及び北側の立ち上がり際で確認された。床を除去したところ、さらにその内側に幅10㎝前後、深さ３㎝前後の壁溝がもう１条検出された。SB06に建て替える前の住居に伴う壁溝であろう。

住居の掘方は、底面がほぼ平らに整えられている。多少の起伏はあるが、他の住居で見られるような溝などは認められなかった。掘方の埋土は暗褐色土で層厚３㎝前後である。掘方まで検出したところで、直径30〜70㎝程の円形プランが新たに７箇所で確認された。いずれも柱穴と考えられるが、主柱穴としてとらえられる配置は認められなかった。

出土遺物は、床上覆土及び床面直上から出土している。床面直上からは、壺、鉢形土器、鳥形土器がまとまって出土している。これらは弥生時代中期後葉のものと考えられ、廃絶時に廃棄されたと考えられる。また、鳥形土器が出土していることから、祭祀的な行為が行われていたことも考えられる。

SB07（第22、23図）　E3・F3から検出された。覆土は、耕作やゴルフ場の造成により撹乱されている箇所があるが、北半で地山である黄褐色土を掘り込むプランが明瞭に検出できた。SH01、SB04、SD02と切り合い関係にあり、SB07はSH01よりも古く、SB04、SD02よりも新しいことがわかる。

南側がゴルフ場の植栽により一部調査できなかったが、住居の形状は楕円形と考えられる。SB04でも述べたが、SB07の西壁を誤認している可能性がある。住居の規模は、東西方向推定4.6m、南北方向6.5mとなる。（SB07 西壁がSB04の西壁であり、より西側にある立ち上がりがSB07の壁であった場合は、東西方向に5.7m、南北方向に推定7m前後と考えられる）。

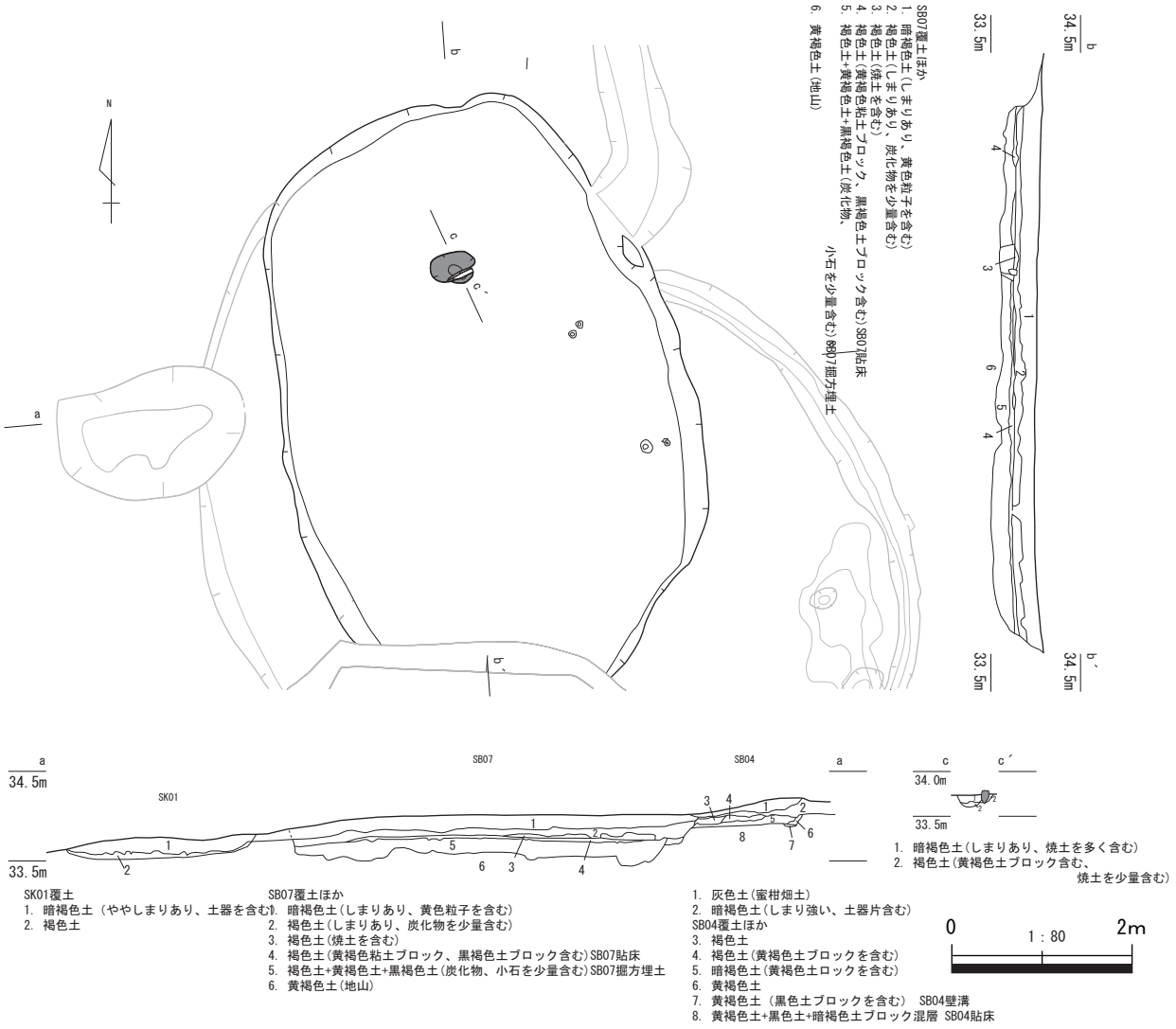
床は、褐色土に黄褐色土を混合した素材が用いられている。層厚は４㎝前後で、粘性がある黄褐色土がブロック状に少量点在する。覆土との境は明瞭で敲き締められた様子が見られる。床はSB07の北半で明瞭に確認できるが、南半では黄褐色土ブロックがほとんど見られなくなる。この境は明瞭ではないが、床面上では、柱穴と考えられるプランは確認できなかった。床素材の主体が褐色土であったため、把握が困難であったことが考えられる。

炉は、住居中央より北側で検出された。南北50㎝、東西40㎝土坑状に掘り込まれており、覆土には焼土が含まれている。幅10㎝、長さ30㎝程の枕石を備えており、枕石は平坦面が上、尖った部分を下にして住居の主軸と直交し据えられる。また、平坦面や尖った部分を作り出すために加工された可能性もある。また、枕石は被熱しており、赤黒く焼けた痕跡が明瞭に見られる。なお、貯蔵穴、壁溝は確認されていない。

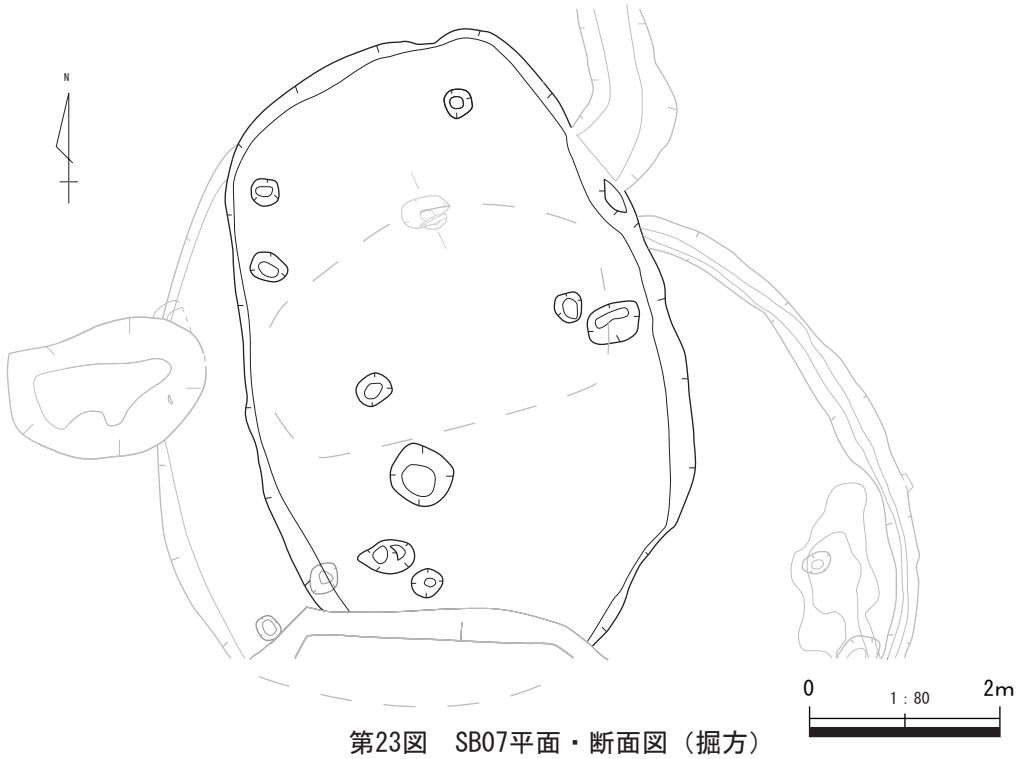
住居の掘方は、起伏が多く、溝状に掘り込まれているなどの明瞭なプランはわからなかった。掘方まで検出したところで、直径30〜70㎝程の円形プランが９箇所で確認された。それぞれ柱穴と考えられるが、主柱穴としての有意な配列は見いだせなかった。

SB07としてとらえた住居は、プランが不整形で炉の位置が偏っている、柱穴の配置が見出せないなど調査段階でとらえられなかったことがあるように思われる。掘方まで検出した際に検討した結果、炉を中心とした四方に柱穴があることからSB07の北側としたその位置に住居が１基（SB07-1）、SB04を切る住居がさらに１基（SB07-2）、SB04としてとらえた住居が１基と３基の住居が切り合っていた可能性がある（第22図中の破線）。土層帯を残しながら掘り進めたが、SB07-1南側の立ち上がりなどを見つけることはできなかった。

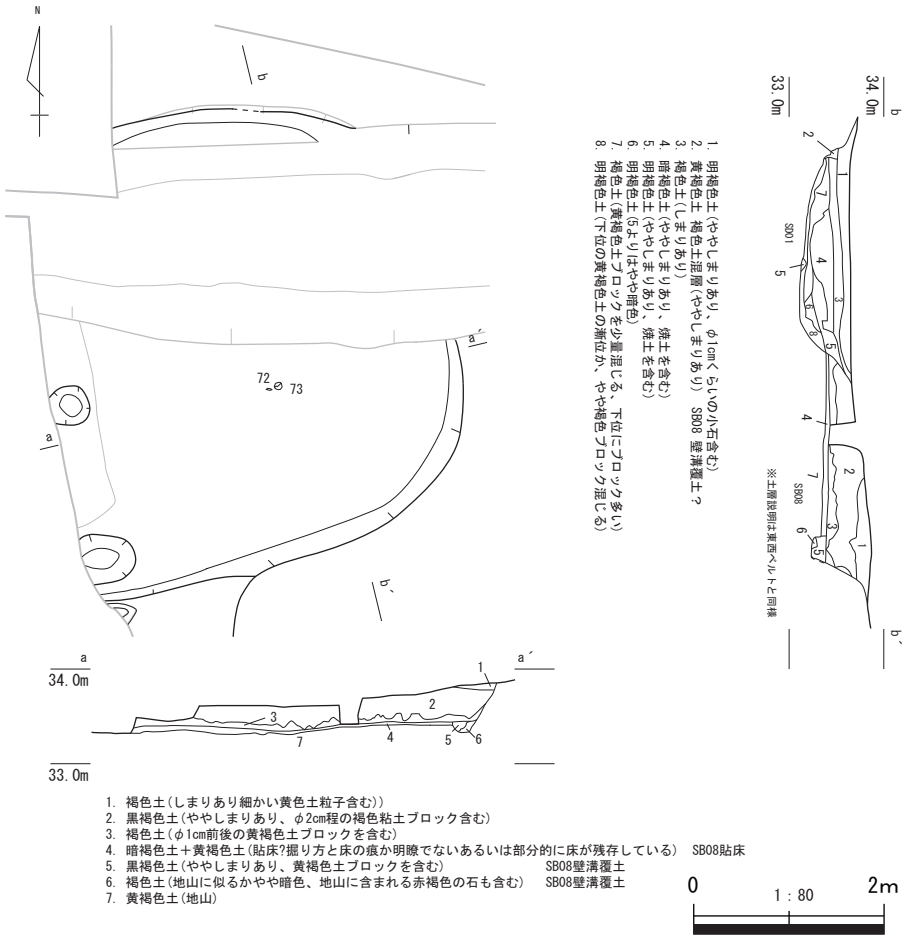
SB07-1は、形状が楕円あるいは隅丸方形に近く、規模が推定で東西方向に4.2m、南北方向に4.2m、となる。SB07-2は、形状が楕円形で、規模が推定で東西方向に5.6m、南北方向に7.0mとなる。



第22図　SB07平面・断面図（床面）



第23図　SB07平面・断面図（掘方）



第24図　SB08平面・断面図（床面）

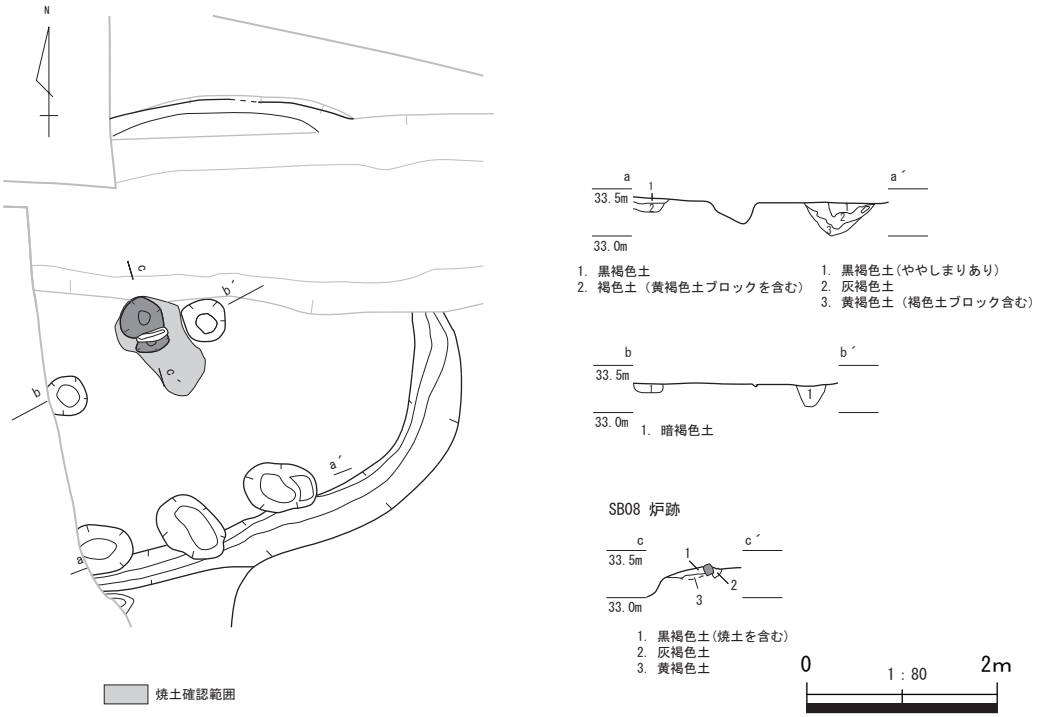
SB08（第24、25図）　F2・F3で検出された。調査区として設定した位置より西は大きく地形が下り、造成により地形が改変されていることがわかる。この改変によりSB08の西側3分の１程度は既に失われ、残存部を調査したにとどまった。覆土は耕作やゴルフ場の造成により撹乱されている箇所があり、主に西側ではこれら後世の開発に伴う堆積土の除去面で床面が検出された。東側では覆土である黒褐色土が層厚40㎝程良好に残存している。SD01と切り合い関係にあり、SB08はSB01よりも古いことがわかる。

西側は調査できなかったが、住居の形状は、楕円形と考えられる。住居の規模は、南北方向5.0m、東西方向は推定することは困難である。

床は、黄褐色土と黒色土を混合した素材が用いられている。層厚は２～６㎝で粘性がある黄褐色土がブロック状に点在し、敲き締められた様子が見られる。床面上では、直径30～40㎝前後の円形ないしは楕円形のプランが５箇所確認された。それぞれ柱穴と考えられるが、壁溝を切っていること、炉に近いこと、西側が失われていることなど、間隔やプラン全体からの位置としては主柱穴と認定できない。

炉は、住居中央で検出された。南北60㎝、東西50㎝土坑状に掘り込まれており、覆土には焼土が含まれている。幅10㎝、長さ30㎝程の枕石を備えており、平坦面を上、尖った部分を下にして据えられる。また、枕石は被熱しており、赤黒く焼けた痕跡が明瞭に見られる。貯蔵穴は確認されていない。

壁溝は幅20～30㎝、深さ5㎝前後で住居南東側の立ち上がり際で確認された。北側の壁溝はSD01に切られているが、断面では一部落ち込みが見られることから、北側まで壁溝が延びているものと考えられる。



第25図　SB08平面・断面図（掘方）

住居の掘方は、底面がほぼ平らに整えられている。他の住居で見られるような溝などは認められない。

出土遺物は床上覆土及び床上直上から出土している。床上直上では弥生時代中期後葉の壺底部が出土している。

SB09（第26図）　D4で検出された。調査区中央付近は、耕作やゴルフ場の造成による堆積土を除去すると地山が検出され、その地山を掘り込むSB09を検出することができた。検出は容易であったが、既に床面まで削平されており、掘方の埋土が確認されたのみであった。他の遺構とは切り合い関係にない。

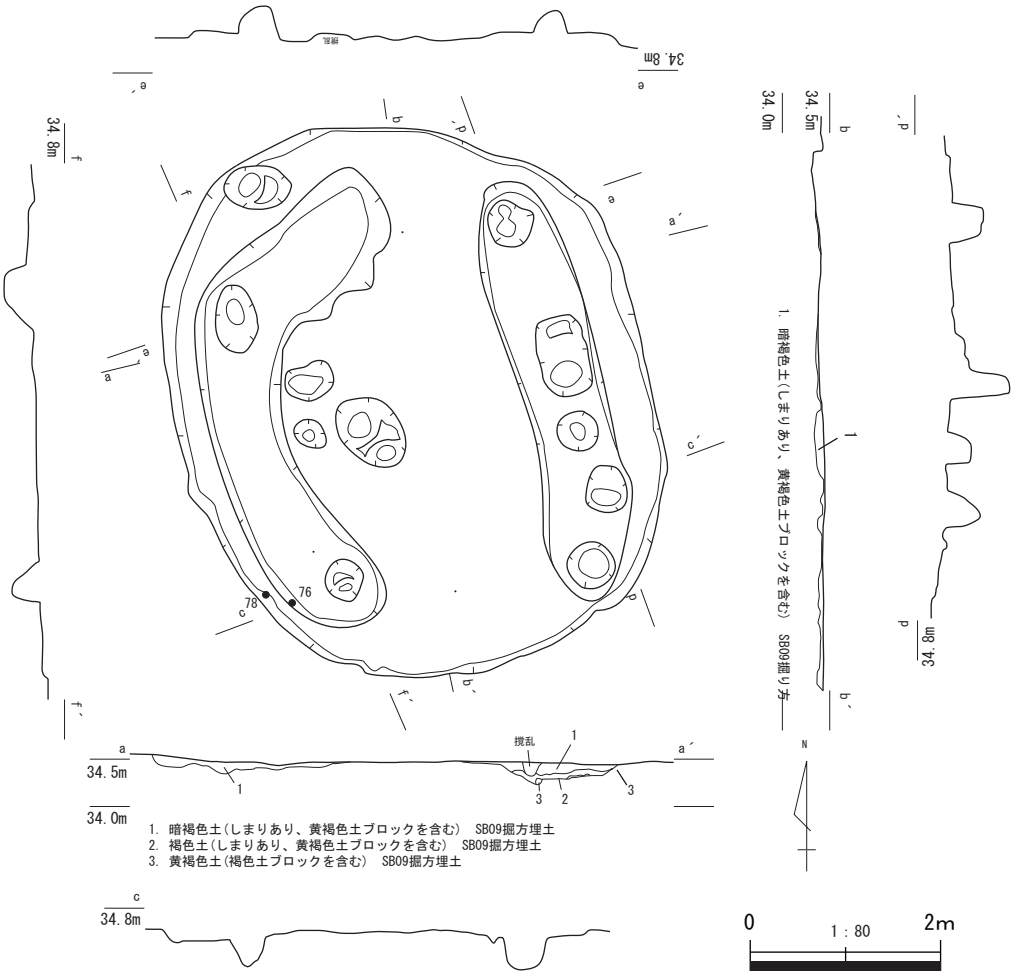
住居の形状は楕円形である。住居の規模は、住居上面がほぼ削平されていることを考慮しなくてはならないが、南北方向6.0m、東西方向5.0mである。

炉は、住居の中央やや西寄りで土坑状の炉が検出された。炉の覆土には焼土少量が含まれており、使用時に掘り起こされ混入したものと考えられる。また、炉の掘り込みより広い範囲で焼土が少量確認される。床面まで削平されているため、枕石の有無は確認できなかった。なお、貯蔵穴は、住居の中央東側で深さ60㎝程の掘り込みが認められるが、土器破片が出土したのみで明確に貯蔵のための施設であったかは不明である。

壁溝は確認されておらず、もともと設けられていなかった可能性も考えられる。

住居の掘方は、馬蹄状に周囲に溝が掘り込まれ、中心部分がやや高くなっている。東側で多少の窪みがあり、地山を掘り込んだ黄褐色土と黒褐色土を混合し、床の素材として使用していたものと考えられる。掘方まで検出したところで、直径30～70㎝程の円形プランが10箇所で確認された。それぞれ柱穴と考えられ、このうち４基を主柱穴としてとらえた。柱穴の間隔は、長手方向に芯々で3.2～3.3m、短手方向に芯々で3.1mとなる。

出土遺物は、掘方埋土中から壺や鉢が出土している。



第26図　SB09平面・断面図（掘方）

SB10（第27図）　D3・D4で検出された。調査区中央付近は、耕作やゴルフ場の造成による堆積土を除去すると地山が検出され、その地山を掘り込むSB10・11を検出することができた。検出は容易であったが、SB11にも半分以上が壊され、さらに造成等により既に床面まで削平され、掘方の埋土が層厚10㎝前後で確認されたのみであった。SB11と切り合い関係にあるが、SB11より古いことがわかる。

住居の形状は残存部から楕円形と想定される。住居の検出された規模は、住居上面が削平されていることを考慮しなくてはならないが、南北方向3.5m、東西方向5.0mである。

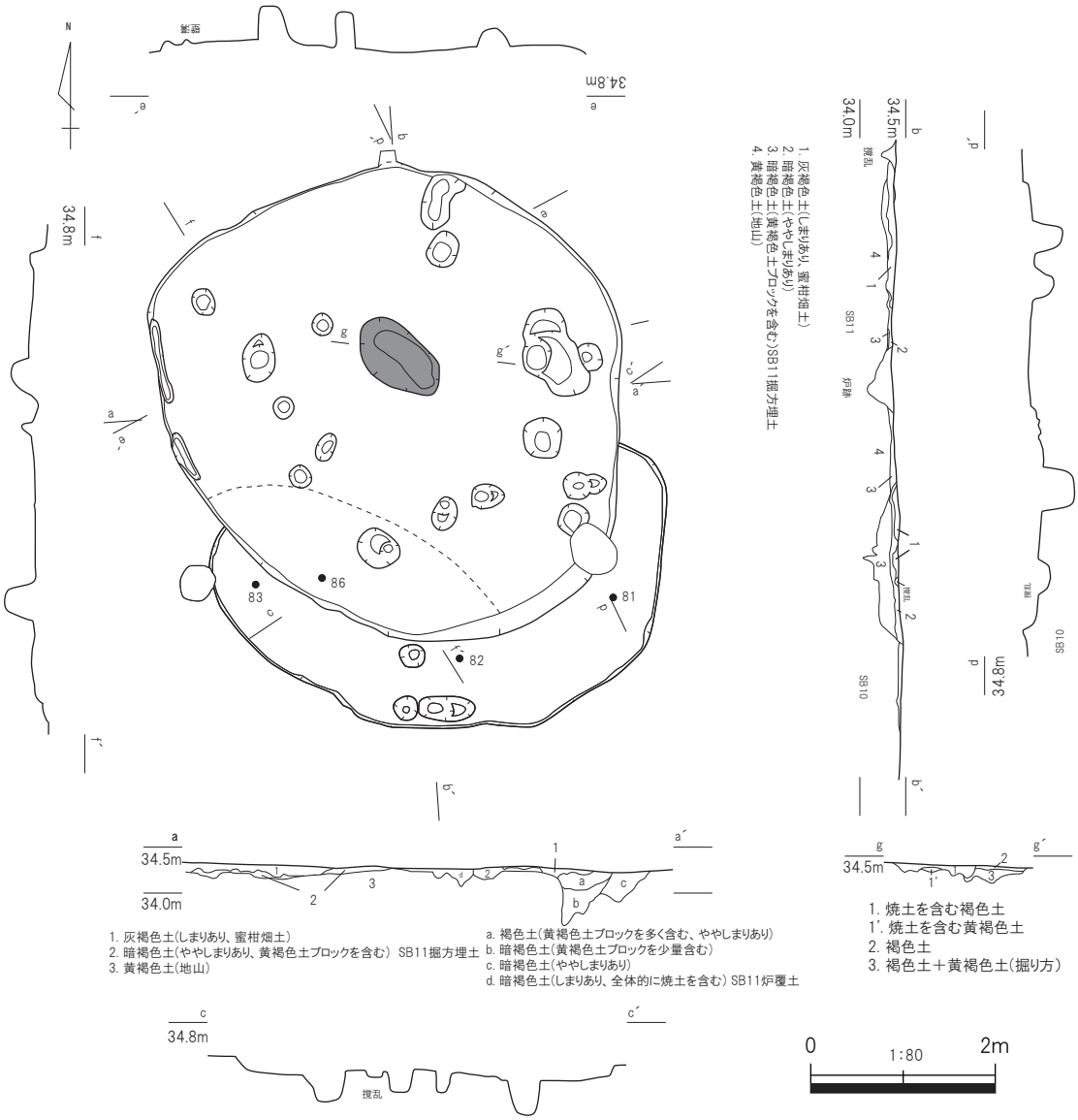
炉は、SB11に壊された位置に本来位置していたものと考えられるが、有無は確認できなかった。なお、貯蔵穴、壁溝についても確認されていない。

住居の掘方は、底面がほぼ平らに整えられている。掘方まで検出したところで柱穴が３基検出されたが、主柱穴としてはとらえられなかった。

出土遺物は灰釉陶器が１点出土しているが、住居に伴うのではなく、混入と考えられる。他に土器片数点が出土している。

SB11（第27図）　D3・D4で検出された。調査区中央付近は、耕作やゴルフ場の造成による堆積土を除去すると地山が検出され、その地山を掘り込むSB11を検出することができた。検出は容易であったが、既にほとんどが床面まで削平されており、一部の床と掘方の埋土が確認されたのみであった。SB10と切り合い関係にあるが、SB10 より新しいことがわかる。

住居の形状はやや不整形だが楕円形である。住居の検出された規模は、住居上面が削平されていることを



第27図　SB10・11平面・断面図

考慮しなくてはならないが、東西方向に4.9m、南北方向に5.3mである。

床は、住居の南西で黄褐色土と黒色土を混合した素材が用いられた床が検出された。残存状況が悪いが、本来は住居全体に広がっていたと考えられる。

炉は、住居の中央やや北寄りで土坑状の炉が検出された。覆土には焼土が含まれており、台付甕の使用時に掘り起こされ混入したものと考えられる。床面まで削平されているため、他の住居で確認される枕石の有無は確認できなかった。なお、貯蔵穴は、住居の中央東側で深さ100㎝程の掘り込みが認められるが、土器破片が出土したのみで明確に貯蔵のための施設であったかは不明である。

壁溝は西側一部で確認することができた。幅４～10㎝、深さ３㎝前後である。

住居の掘方は、馬蹄状に掘り窪められ、中央と北東側がやや高く地山が検出される。地山を掘り込んだ黄褐色土と黒褐色土を混合し、床の素材として使用していたものと考えられる。掘方まで検出したところで、直径30～70㎝程の円形プランが14箇所で確認された。それぞれ柱穴と考えられ、このうち４基を主柱穴としてとらえた。柱穴の間隔は、長手方向に芯々で2.4～2.5m、短手方向に芯々で2.1～2.3mとなる。

出土遺物は、掘方埋土中から壺及び甕の破片が出土している。

第28図　SB-12平面・断面図（掘方）

SB12（第28図）　E3・E4で検出された。覆土は耕作やゴルフ場の造成により撹乱されている箇所があり、一部ではこれら後世の開発に伴う堆積土の除去面で地山及び覆土が検出された。SB01、SB03、SB04、SB05、SB13、SB15と切り合い関係にあり、SB01、SB03、SB04、SB05よりは古く、SB13よりは新しいことがわかる。SB12より新しい遺構の調査過程でSB12の炉が検出されたため、北東で地山への掘り込みと合わせ住居の存在を想定した。他の遺構によりほとんどが炉を検出した面より下まで壊されていた。

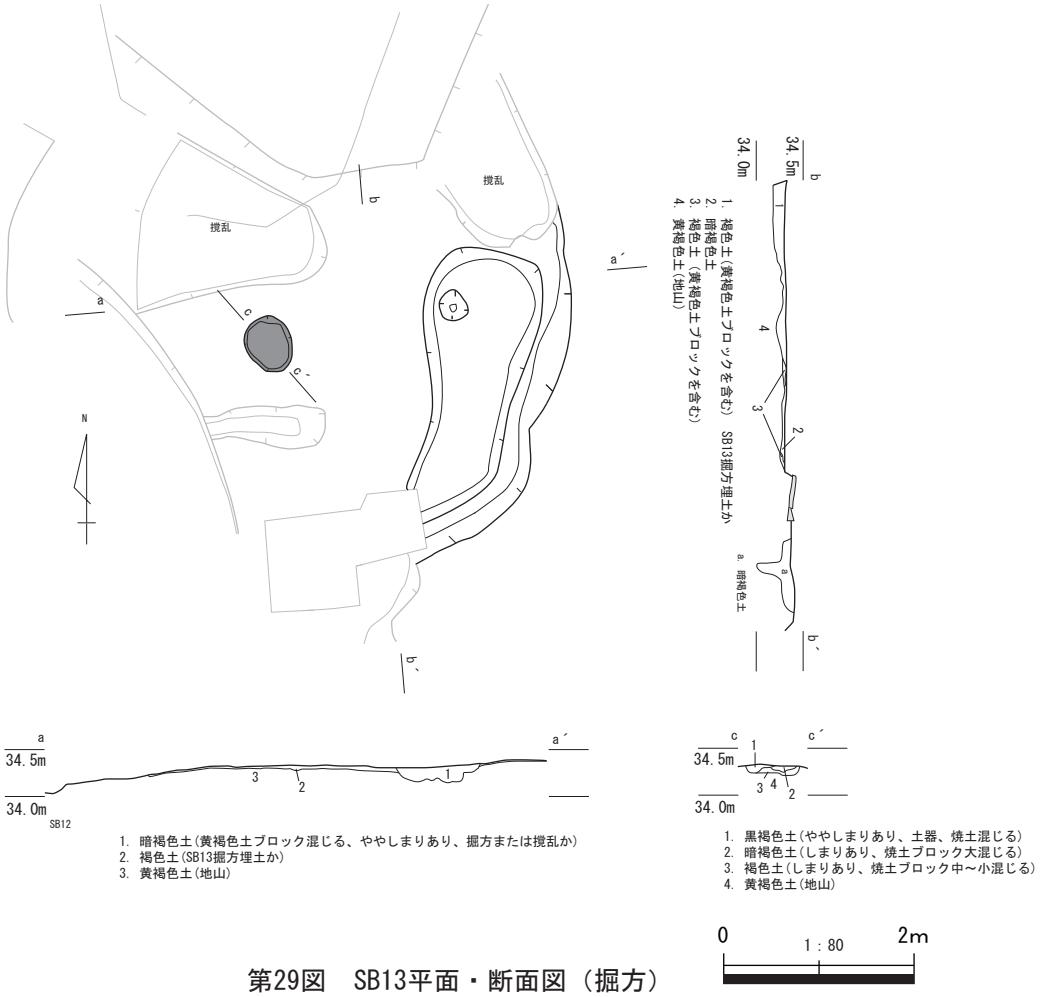
住居の形状は、一部SB04に壊されているが楕円形と考えられる。住居の規模は、東西方向に5.7m、南北方向に推定5.8m程となる。

床は、黄褐色土と黒色土を混合した素材が用いられている。床は炉付近でのみ硬くたたき締められた様子が確認できるが、そのほかでは、黄褐色ブロックが点々と部分的に残るのみである。層厚は２㎝前後で覆土中にも床の素材と同様の黄褐色土がブロック状に砕けて混入する状況であった。SB12より新しい遺構が作られた際に床が壊された可能性もある。

炉は、住居中央のやや北側で検出された。南北１m、東西80㎝土坑状に掘り込まれており、覆土には焼土が含まれている。幅15㎝、長さ38㎝程の枕石を備え枕石の北側には粘土が厚さ10㎝前後敷かれ赤く焼けており、その上で煮炊きをしたようである。他の枕石同様、平坦面を上にするが、据えられている方も平らとなっている。また、枕石は被熱しており、赤黒く焼けた痕跡が明瞭に見られる。

住居の掘方は、中央やや高く地山が検出される。地山を掘り込んだ黄褐色土と黒褐色土を混合し、床の素材として使用していたものと考えられる。掘方まで検出したところで、直径30～40㎝程の円形プランが15箇所で確認された。それぞれ柱穴と考えられ、このうち４基を主柱穴してとらえた。柱穴の間隔は、長手方向に芯々で2.7～2.8m、短手方向に芯々で2.8～3.0mとなる。また、掘方まで検出したところで、壁溝が検出された（SB15とする）。SB12やSB05に上部は壊され、残存していないと考えられる。

出土遺物は、床上覆土から壺及び短頸壺、台付甕が出土している。



第29図　SB13平面・断面図（掘方）

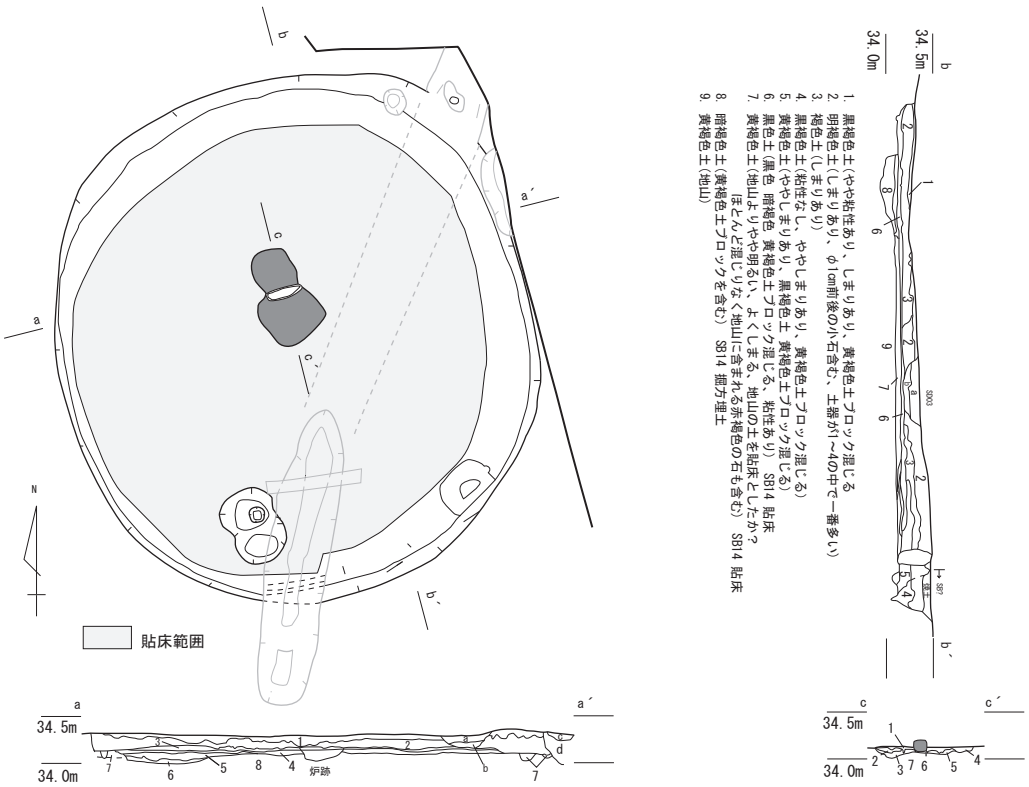
SB13（第29図）　E3・E4で検出された。調査区中央付近は、耕作やゴルフ場の造成による堆積土を除去すると地山になり、その地山を掘り込むSB13を検出することができた。既に床面、掘方の一部まで削平されており、焼土と掘方の埋土が確認され、プランが検出されたのみであった。SB12と切り合い関係にあるが、SB12 より古いことがわかる。

住居の形状は楕円形と想定される。住居の規模は不明である。

炉は、住居の中央やや西寄りで検出された。土坑状に掘り込まれており、覆土には焼土がブロック状に含まれていた。使用時に掘り起こされ混入したものと考えられる。床面まで削平されていたため、他の住居で確認されている枕石の有無は確認できなかった。なお、貯蔵穴及び壁溝は確認されていない。

住居の掘方は、南東が一部掘り窪められ、中央がやや高く地山が検出される。地山を掘り込んだ黄褐色土と黒褐色土を混合し、床の素材として使用していたものと考えられる。掘方まで検出したところで、柱穴と思われる直径30㎝程の円形プランが１箇所で確認された。

出土遺物は、土器片が数点出土しているが、図化しえなかった。



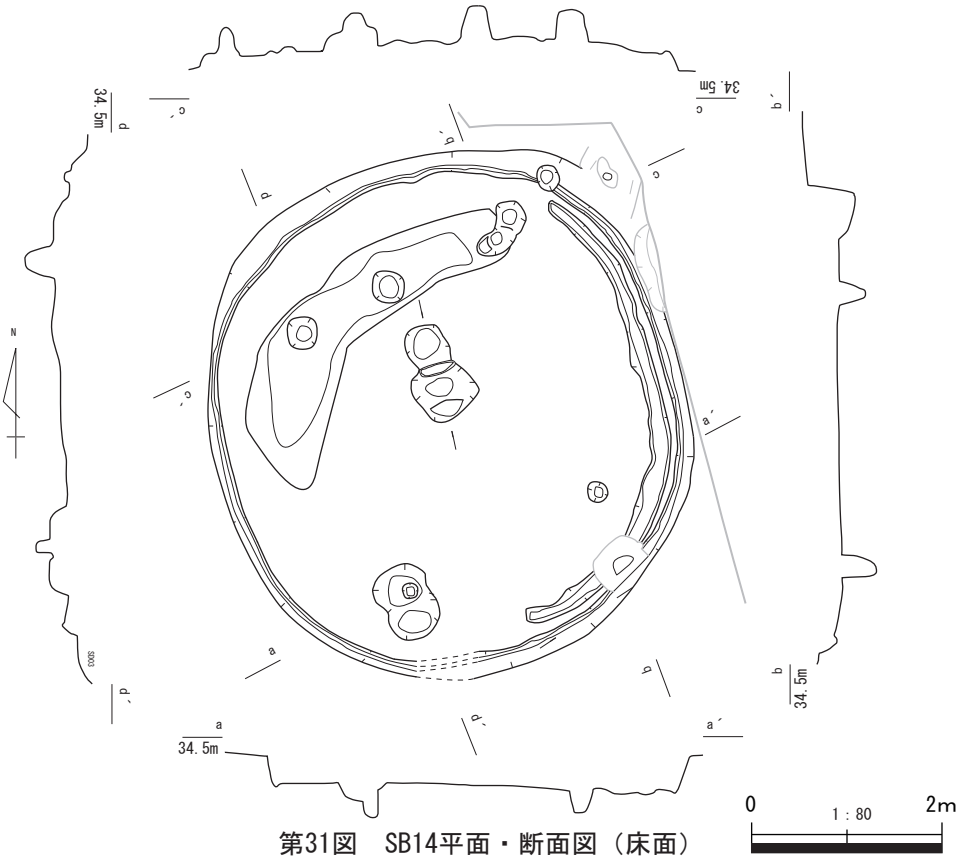
1. 黒褐色土(やや粘性あり、しまりあり、黄褐色土ブロック混じる 覆土
2. 明褐色土(しまりあり、φ1cm前後の小石含む、土器が1～4の中で一番多い) 覆土
3. 黒色土(黒色 暗褐色 黄褐色土ブロック混じる、粘性あり) 貼床
4. 黄褐色土(地山よりやや明るい、よくしまる、地山の土を貼床としたか？
ほとんど混じりなく地山に含まれる赤褐色の石も含む) SB14貼床
5. 暗褐色土(黒色土ブロックφ1cm前後の小石混じる) 掘方埋土
6. 黒色土(褐色土ブロック混じる) SB14 掘埋土
7. 暗褐色土（ややしまりあり）壁溝覆土
8. 黄褐色土(地山)

SD03覆土
a. 黒褐色土
b. 暗褐色土（下面で小石を多く含む）

他の遺構覆土
c. 黒褐色土
d. 暗褐色土

0 1：80 2m

第30図　SB14平面・断面図（床面）



0 1：80 2m

第31図　SB14平面・断面図（床面）

SB14（第30・31図）　C4で検出された。ゴルフ場の造成土と考えられる褐色砂礫を取り除いたところで、地山を掘り込むやや粘性を帯びた黒褐色の覆土が検出された。上面は造成土に多少削平されていると考えられるが、床上覆土は20㎝前後、他の遺構との切り合いも少なく残存状況は良好であった。SD03と切り合い関係にあり、SD03より古いことがわかる。

住居の形状は円形に近い楕円形である。住居の規模は、南北方向5.5、東西方向5.0ｍである。

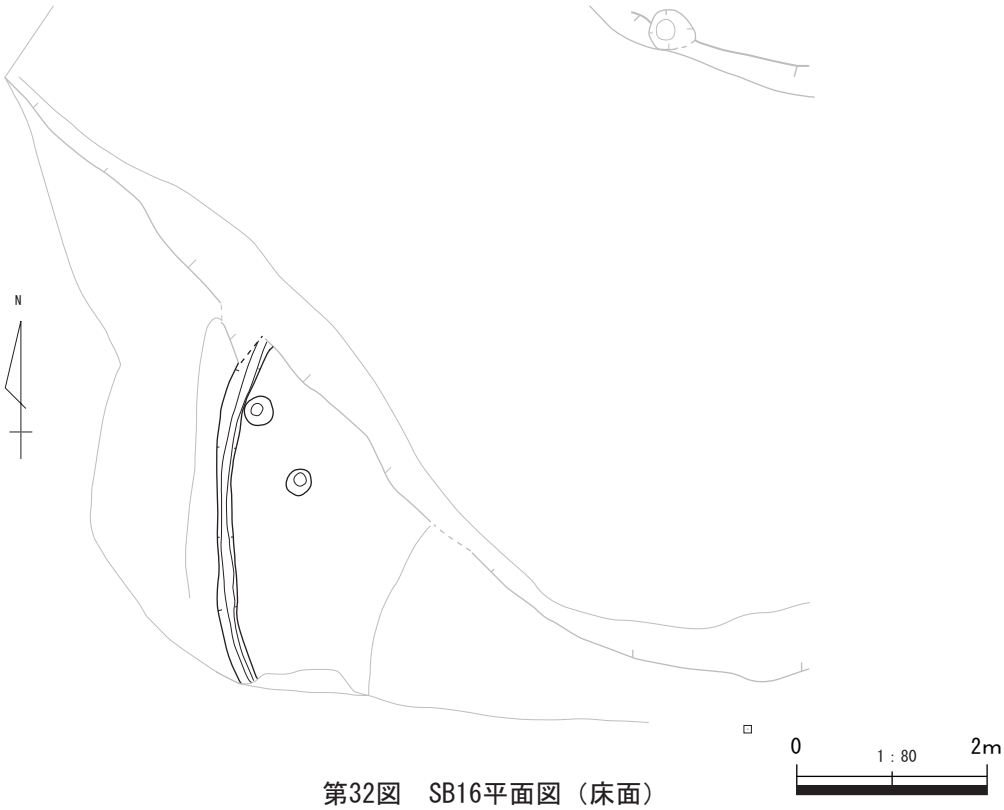
床は、黒褐色土と黄褐色土を混合した素材、黄褐色土のみの素材と２層に分かれていた。いずれも硬く敲き締められており、層厚は上層が２㎝、下層が４㎝前後となっている。床は壁際から50㎝程内側に離れた位置まで貼られており、残存状況は良好である。床面上では、直径80㎝前後の円形ないしは楕円形のプランが１箇所切り合って確認された。柱穴と考えられる。

炉は、住居の中央やや北寄りで検出された。南北１ｍ、東西70㎝土坑状に掘り込まれており、覆土に焼土が含まれている。幅10㎝、長さ30㎝程の枕石を備え、北側には焼土が露出しており、枕石南側は上層が黒褐色土、下層に焼土が堆積している。他の枕石同様、平坦面を上にするが、据えられている方も平らとなっている。枕石は被熱を受けており、赤黒く変色している。

壁溝は、住居の立ち上がり際を全周する。幅5～12㎝、深さ2～8㎝となり、東半は内側で２重になっており、建て替えられた可能性がある。また、南東に貯蔵穴と考えられる掘り込みがあり、一部壁溝を切っている。覆土中からは土器片が少量出土したのみであり、明確な貯蔵施設かどうかは不明である。

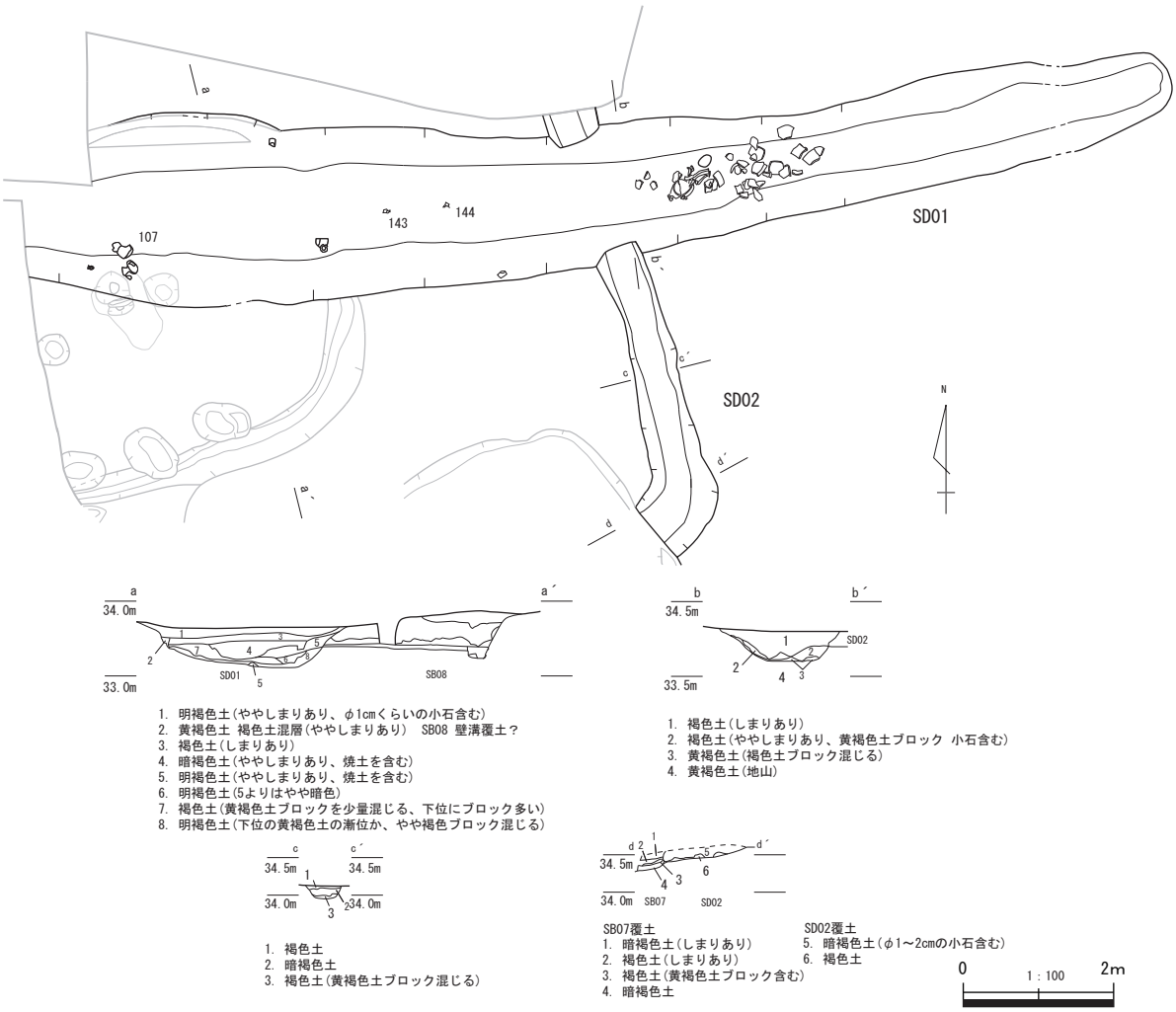
住居の掘り方は、北西が溝状に掘り窪められている。覆土は暗褐色、黒褐色土の混層で、地山を掘り込んだ黄褐色土を床の素材として使用していたものと考えられる。掘方まで検出したところで、直径20～35㎝程の円形プランが５箇所検出された。それぞれ柱穴と考えられ、このうち４基を主柱穴として捉えた。柱穴の間隔は、長手方向に芯々で2.9～3.4ｍ、短手方向に芯々で2.2ｍとなる。

出土遺物は、ほとんどが硬く敲き締められた床上よりやや上層で壺や台付甕が出土している。

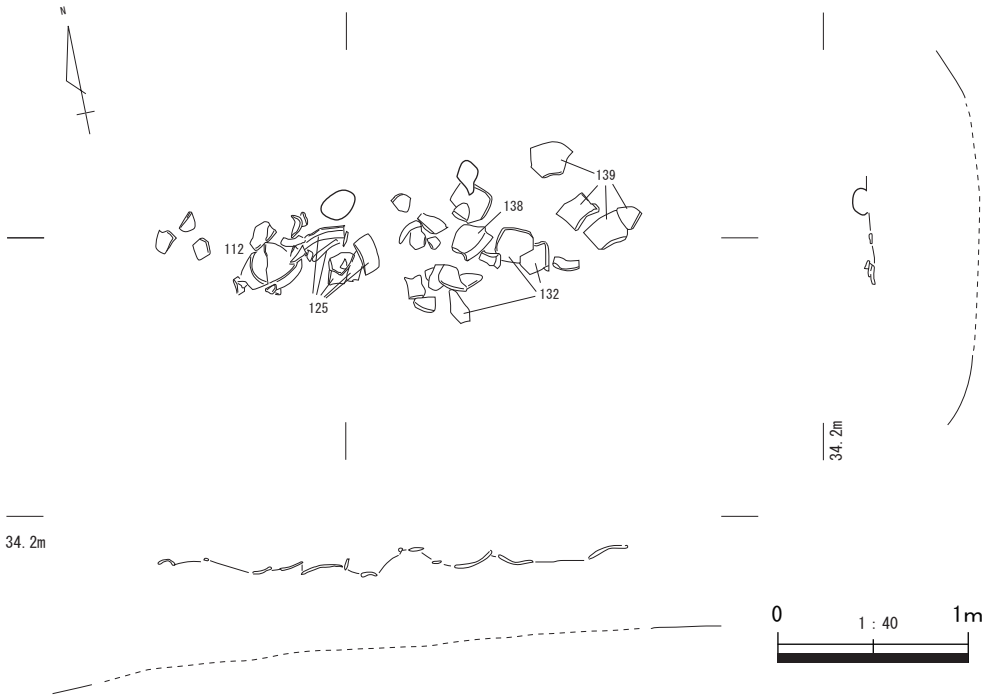


第32図　SB16平面図（床面）

SB16（第32図）　B8・C8で検出された。北側はSD04にほとんどを切られており、南側も後世の造成により失われている。そのため、ほとんど残存しておらず住居の規模、形状は不明である。床は、黄褐色土が硬く敲き締められている。幅10～15㎝の壁溝と柱穴が２基検出された。出土遺物は、複合口縁壺が覆土中から出土している。



第33図　SD01・SD02平面・断面図



第34図　SD01遺物出土状況

SD01（第33・34図）　E2・E3・F2・F3で検出された。丘陵を横断するように東西に延びており、幅1.2mから2.3m、延長15.4mを検出できた。溝はさらに西側の調査区外に延び、東側についても検出面の削平がなければさらに東に延びていたものと考えられる。SD01は最も深いところで深度0.55mを測る。地形は西から東へ緩やかに高くなっており、溝底もこれに伴って西から東へ高くなっている。溝の形状は底に平坦面をもつ。SD02とSB08と切り合い関係にあり、それぞれの遺構を切っていることから、SD01はこれらの遺構よりも新しいことがわかる。

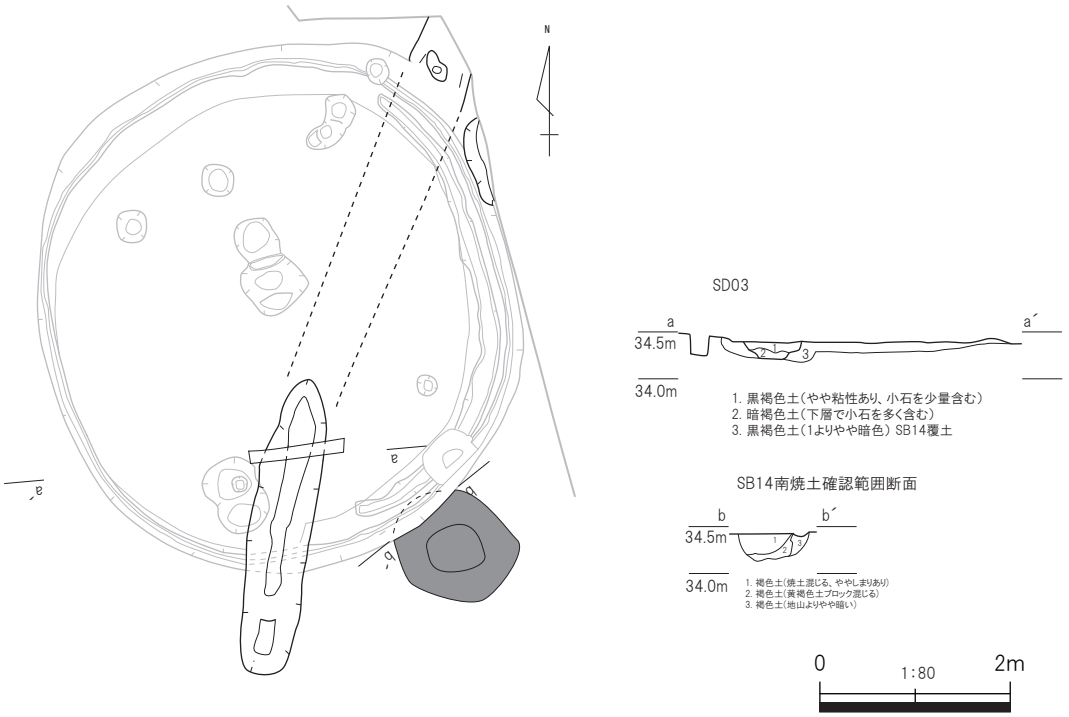
出土遺物は弥生時代中期から弥生時代後期前葉の土器が多数出土している。特にSD02東側で土器が集中して出土している。SB08は弥生時代中期から後期にかけてと考えられるので、当該期に遺物が少量含まれている。覆土下層では遺物はほとんど出土せず、中層で弥生時代後期、上層で古墳時代前期が多くなる。主体的には弥生時代後期前半の遺物が出土するため、溝の時期としては弥生時時代後期前半に掘られたものと考えられる。

遺構の性格としては、排水や区画といったものが考えられるが、判然としない。第１、２次調査では、弥生時代中期の壺が出土した同程度の規模の溝が検出されている。

SD02（第32図）　E3で検出された。幅0.5〜0.9m、延長約5.5mを検出できた。SD02はSD01に切られるが、より北側へ延びる。南側はSB07に切られており、SB07内で終結すると考えられる。深度は最も深いところで0.2mを測る。底は平坦面をもつ。SD01とSB07に切り合い関係にあり、それぞれの遺構に切られていることからSD02がより古い遺構であることがわかる。溝はSD01と直交し南へ直進するが、SB07付近で西に方向を変え、さらに延びてゆくところでSB07に切られている。

出土遺物は、図示し得るものがなく、弥生土器が十数点出土したが小片であり、時期を特定することはできなかった。他の遺構からは弥生時代後期以前と考えられる。

遺構の性格としては、第１、２次調査で検出されている溝か全周するタイプの方形周溝墓と考えたが、SB07より西側などへの広がりは確認できないため、排水や区画などの機能をもった溝と考えられる。



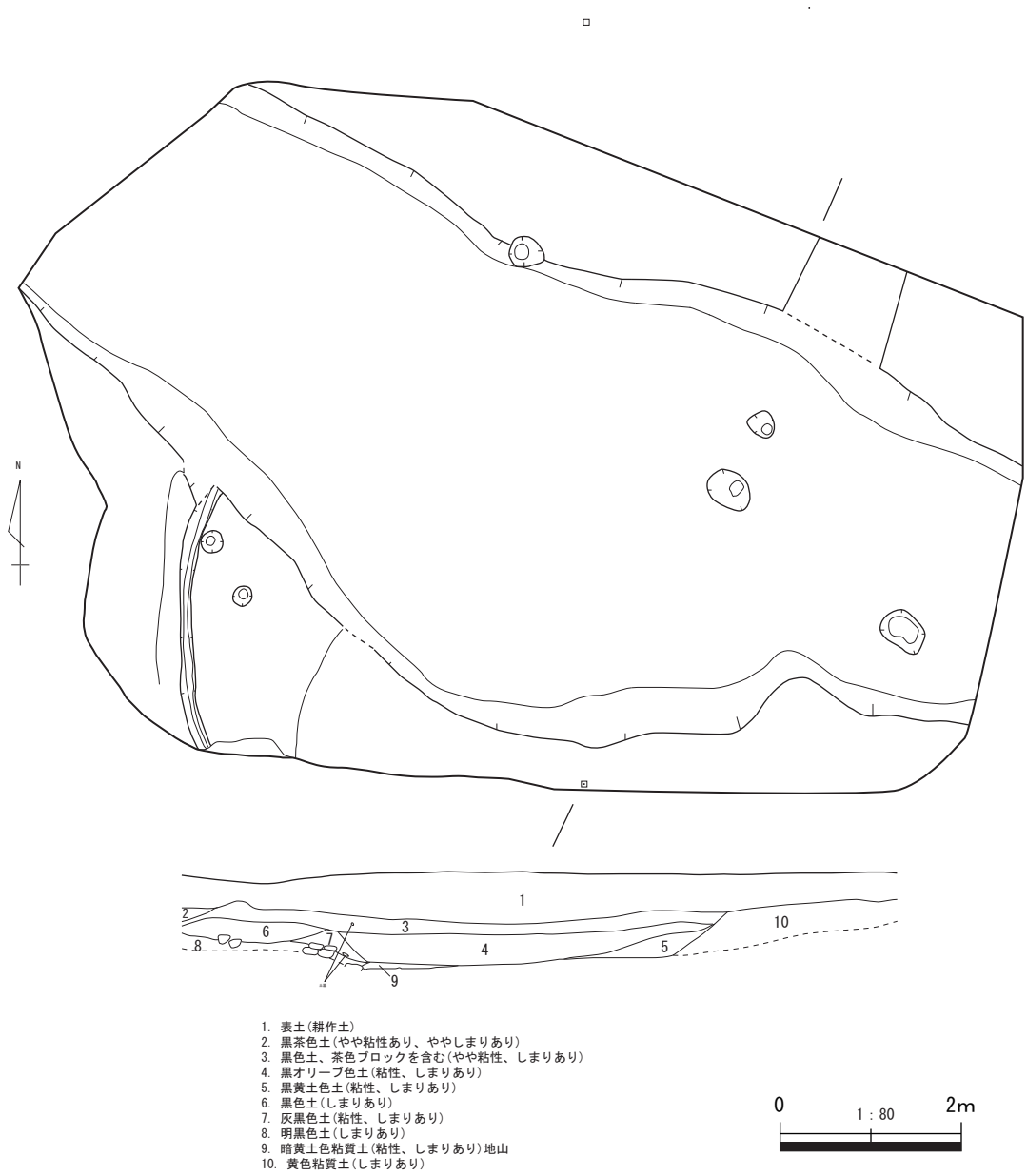
第35図　SD03平面･断面図

SD03（第35図）　C4・C5で検出された。幅0.7m、延長約6.7mを検出することができた。SD03は北東にさらに延びると考えられるが、造成により地形が外改変されており調査区外としたため、確認できなかった。断面は台形に近く底に平坦面を持つ。SD02と幅や深度は同様であり、こちらも区画や排水といった機能を有する溝と考えられる。また調査では、SD03の平面形態がうまく捉えられず、一部土層断面観察のみでの確認となった。SB13と切り合い関係にあり、SB13より新しい遺構であることが分かった。SB13の覆土とSD03の覆土が同様の色調であったことも、平面形態をとらえきれなかった要因である。

出土遺物は、図示し得るものがなかったが、土器小片が数点出土している

SD04（第36図）　A～C8で検出された、幅は最大5.4m、延長約11mを検出することができた。SD04 は東西へさらに延びると考えられるが、造成により地形が外改変されており調査区外としたため、確認できなかった。SB16と切り合い関係にあり、SB16より古いことがわかる。

溝覆土は暗褐色土で、覆土中からは壺及び台付甕、高坏が出土している。



第36図　SD04平面・断面図

第３節　遺物

１～８は表採及び包含層からの出土である。１は複合口縁壺の口縁部である。口唇部に縄文、口縁部付近には羽状に縄文が施され、その上に棒状浮文が貼付される。内面は横ハケ調整が施される。２は単純口縁壺の口縁部で口縁端部にはキザミが施される。外面は縦ハケ後に横ハケ調整が施される。また、内外面に赤彩が認められる。３～６は壺の底部である。３は底部の突出が弱く、底径は広い。器面は磨滅が著しく調整は不明である。４は底部が突出して薄く、弥生時代中期の甕や壺の底部または中部高地系の甕の可能性がある。５、６は３と比べ底部が突出しているため、３よりは古い時期に比定できる。７は甕の口縁部である。端部は弱く折り返され、外面は口縁部から口縁端部付近まで縦ハケ、内面は横ハケ調整が施される。8は小型台付甕の口縁部から体部である。口縁端部は弱い折り返しが丸みを持って仕上げられている。外面は口縁部から体部にかけて左上がりのハケ調整が施される。

９はSB01出土の台付甕の口縁部から体部である。口縁部はキザミがなく端面をもつ。外面は横ハケ調整が施され、体部は左上がりの斜め、口縁部付近は横方向に施される。

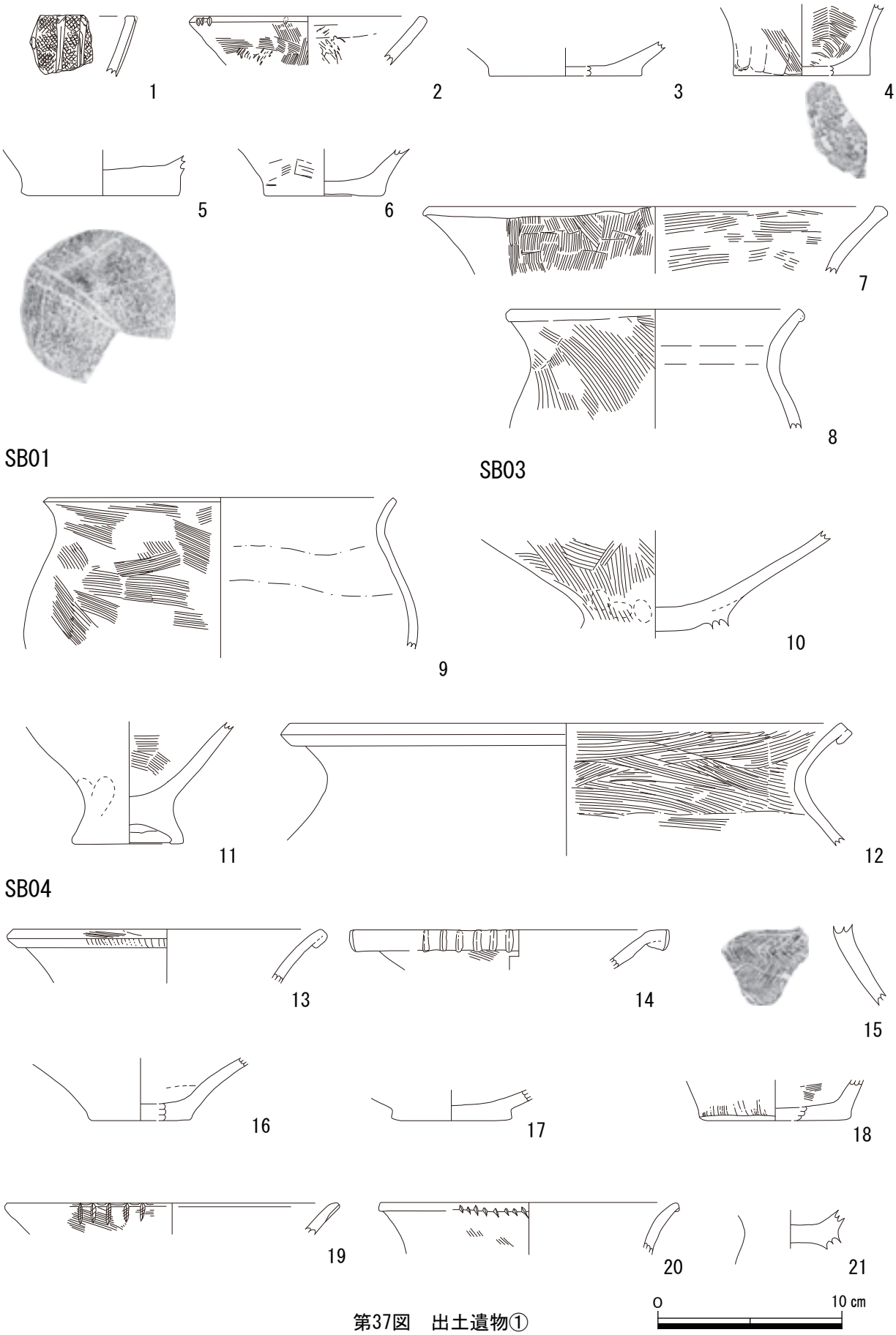
10～12はSB03出土である。10は台付甕の脚台部で、外面は縦ハケ調整が施される。11は台付甕の体部から脚部である。脚部は低く、脚台端部は内側にはみ出ており、不整形である。12は甕または鉢の口縁部から頸部である。折り返し口縁で、内面は斜めハケ調整が施される。

13～27はSB04 出土である。13、14は折り返し口縁壺の口縁部である。14は折り返し部に棒状浮文が貼付され、全周すると思われる。15は壺肩部で、ハケの刺突による沈線と沈線下に横位羽状の刺突文がめぐる。16～18は壺底部である。いずれも器面が磨滅し調整は不明である。16は底径が小さくやや突出する。18は器面が磨滅し、調整は不明である。19、20は甕口縁部である。ともにハケ工具によるキザミが施され、19は口縁部付近に斜めハケ調整が施される。21は台付甕脚台部である。22、23は台付甕の脚部である。22は脚部の高さが低く、端部が内側に肥厚する。外面に斜めハケ、内面に横ハケ調整が施される。23は22同様に端部が内側にやや肥厚する。器面はほとんど磨滅している。24は器種不明である。内面には横ハケ調整が施される。25～27は、SB04の床面直上でまとまって出土している。25は折り返し口縁壺である。折り返し部分は薄く、頸部は太頸化し、最大径を体部中位に持つ。外面は頸部から体部にかけて無文である。外面は口縁部付近に縦ハケ、頸部から体部上半に斜めハケ、体部中位に横ハケ調整が施される。内面は、横ハケ調整が施され、体部と頸部の接合部分には指頭痕が密に残される。26は台付甕である。出土状況からは脚部までが同一個体と考えられるが、接合できない。器高は30㎝程となる。口縁部にはキザミが施される。外面は全体に斜めハケ調整、内面は口縁部付近に横ハケ調整が施されている。27は台付甕の脚台部である。脚部は直線的に開く。

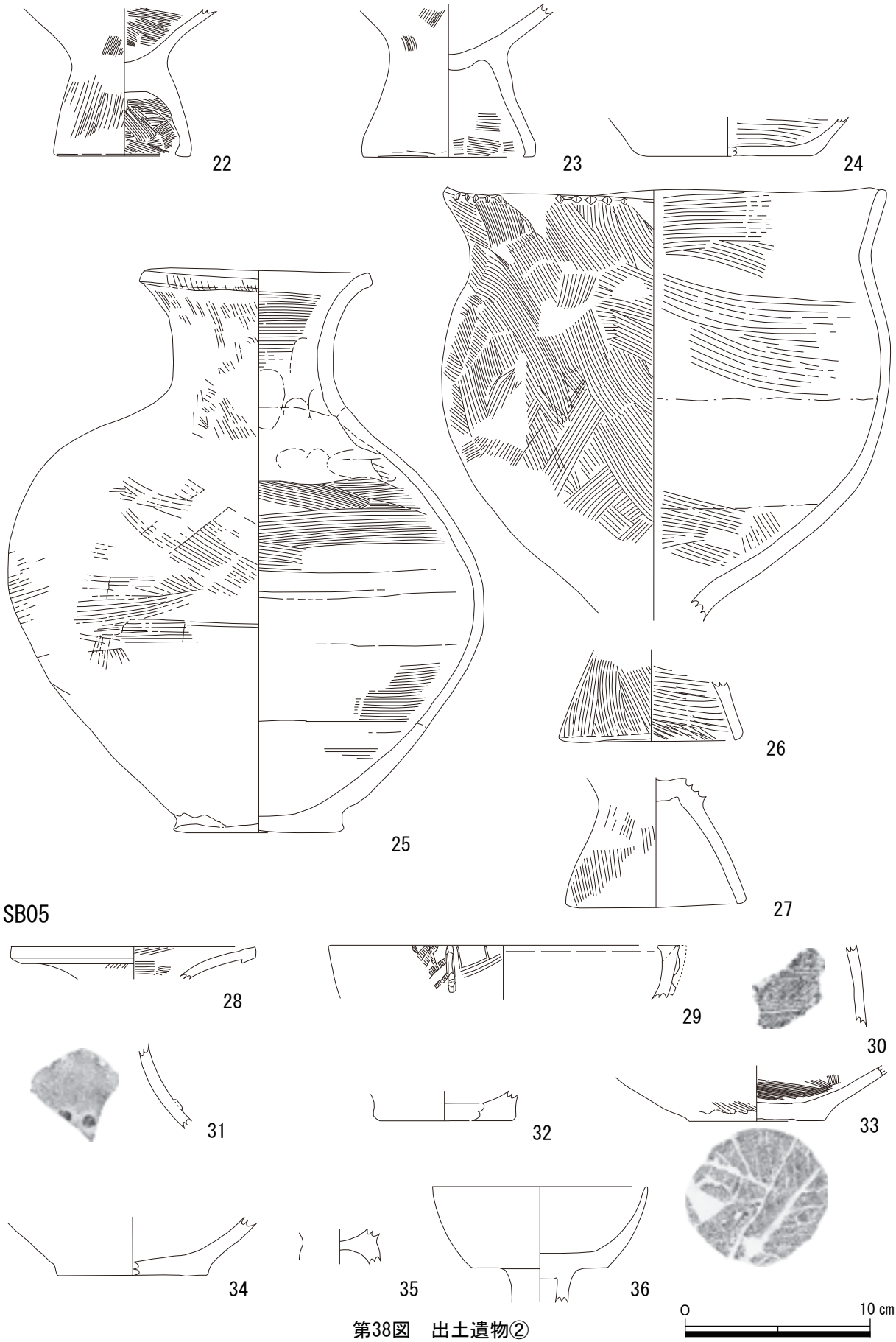
28～36はSB05出土である。28は折り返し口縁壺の口縁部である。折り返しは方形状を呈し、下面と外面に平坦な面をもつ。内面に横ハケ調整が施される。29は複合口縁壺の口縁部である。口縁部付近には縦にハケの刺突を施した後、斜めにハケの刺突が施される。その後、棒状浮文が貼付される。30、31は壺頸部である。30は縄文が施され、その後櫛描文で区画される。31は円形浮文が貼付される。32～34は壺底部である。33は内外面に斜めハケ調整が施されるが、32～34は全体的に器面が磨滅している。35は台付甕の脚台部である。36は高坏の坏部から脚台部である。坏部に明瞭な段をもつ有段高坏で、口縁端部は丸く仕上げられる。脚部が開く開脚高坏と考えられる。

37～42はSB06 出土である。41以外は床上直上からまとまって出土している。37は甕の口縁部でキザミが施される。38は鉢形の土器である。底部から体部にかけては壺と同様の作りで、最大径からやや内傾して口縁部はやや開く。口縁部にはハケ工具によるキザミが見られる。外面は口縁部付近に斜めハケ、体部に横ハケ、体部下半に斜めハケ調整が施される。また、体部上半には櫛描波状文が施される。内面は口縁部付近に横ハケ調整が施され、体部に縦位のミガキが施される。39は壺である。頸部はやや太頸化し、最大径は体部中位にもつ。突出した底部をもち、底径は口径よりやや小さい。口縁部付近に縄文、頸部には3本の櫛沈線の直線文、沈線下に櫛描波状文が施される。体部上半にも櫛描波状文が施される。体部と頸部の接合部の直線文には指頭痕が密に残る。内外面ともに斜めハケ調整が施される。40は鳥形土器である。頭（口縁）部及

上土掘削時出土



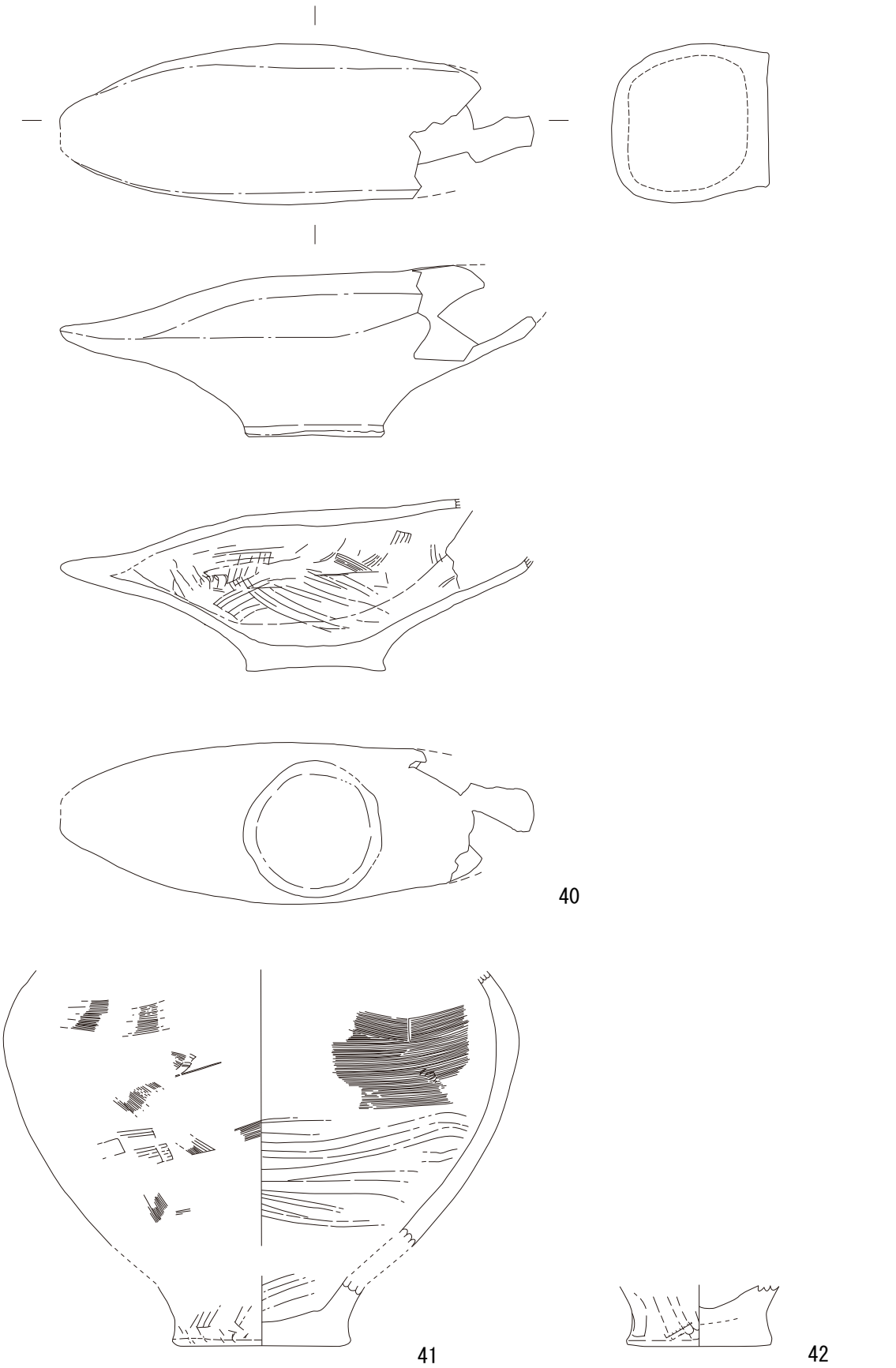
第37図　出土遺物①



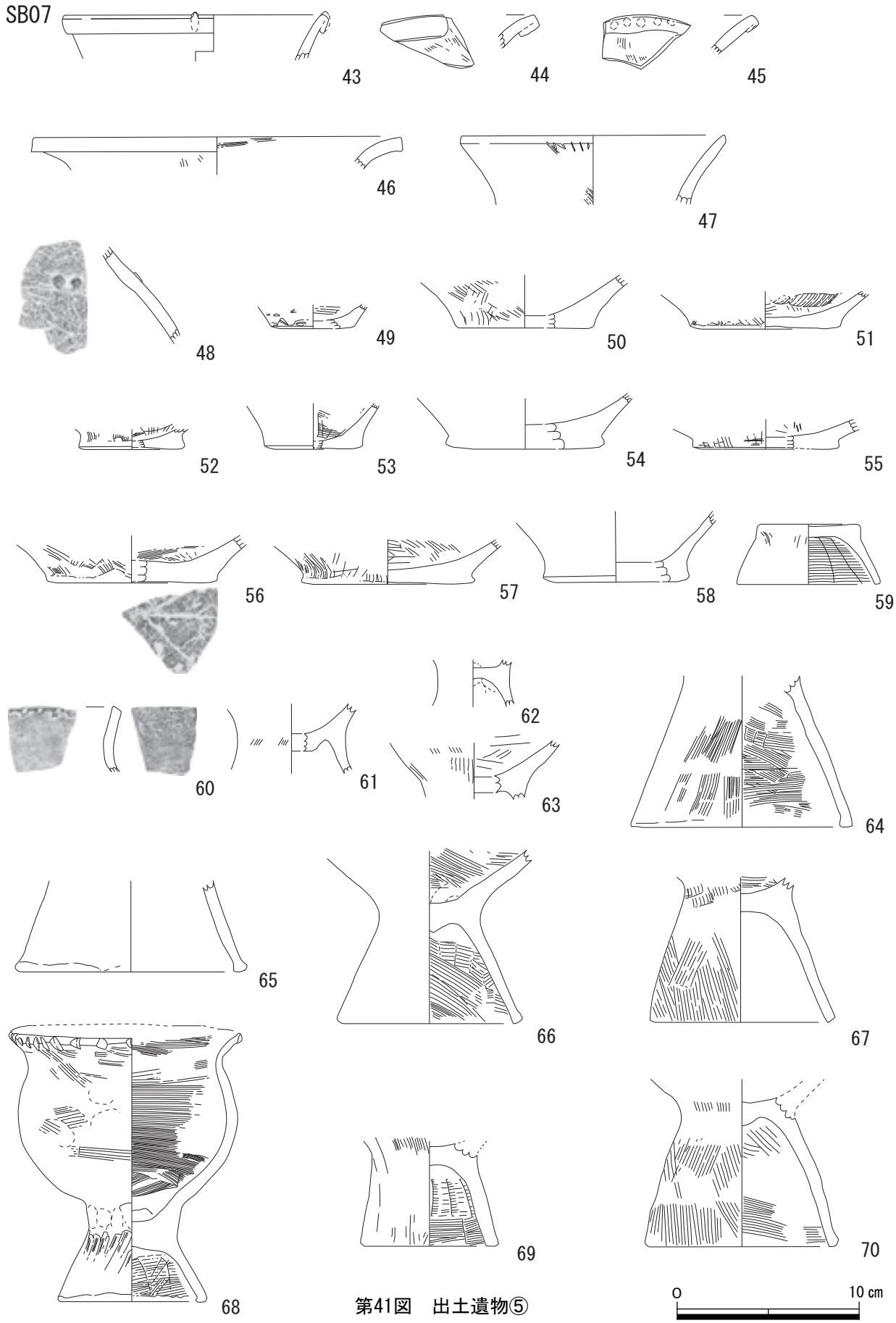
第38図　出土遺物②

SB06

第39図　出土遺物③



第40図　出土遺物④


SB07
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
0
10 cm

第41図　出土遺物⑤

び尾の部分は一部が欠損している。側面及び底部の一部はミガキが施されているように見えるが、はっきりとしない。41は壺の体部から底部である。出土状況や胎土から同一個体と考えられるが、接合しない。内外面ともに横ハケ調整が施される。42は壁溝出土の壺底部である。底部が突出する。器面は全体的に磨滅しているが、外面底部付近に縦ハケ調整が確認できる。

43〜70はSB07出土である。43〜47は壺の口縁部である。43〜45は折り返し口縁壺の口縁部である。43は棒状浮文が貼付される。44、45は折り返し部の形状が方形で下面、外面を平らに整えている。46は壺口縁部で弱く折り返される。折り返し部が薄い。47は単純口縁壺の口縁部である。口縁部にはキザミがみられる。48は壺の肩部である。円形浮文が貼付される。49〜58は壺底部である。50、53、58は底部が突出するため、これらの中では古い段階の土器である。59は台形の土器である。内面に横ハケ調整が施される。60は甕の口縁部である。口縁端部にキザミが見られ、外面は縦ハケ、内面は横ハケ調整が施される。68は小型の台付甕である。脚台部の接合部分はやや長くなり、脚部は端部が内側にはみ出している。口縁部にはキザミがみられる。外面は口縁部付近に横ハケ、体部に斜めハケと指頭痕、体部下半に横ハケ調整が施される。脚台部の接合部分は、指頭痕を密に残し、脚部には斜めハケ調整が施される。内面は、口縁部から体部下半までは横ハケ、脚台部で斜めハケ、脚台端部部付近は横ハケ調整が施される。62〜70（68を除く）は台付甕の脚台部及び脚部である。器面調整は外面が縦ハケ、内面が横ハケ調整を基本として施されている。64、65は脚端部が内側に肥厚している。

71〜75はSB08出土である。71は小型壺底部である。72、73は床面上から出土の壺底部である。いずれも底部が突出し、弥生時代中期後半頃と考えられる。74、75は甕の口縁部である。74はキザミがみられる。75は外面が口縁部付近で横ハケ、以下斜めハケが施される。内面は横ハケ調整が施される。

76〜80はSB09出土である。76は複合口縁壺の口縁部で、複合部に棒状浮文が貼付される。77は折り返し口縁壺の口縁部で折り返し部が薄い。78は壺底部である。79は台付甕の脚部である。端部はやや内側に肥厚する。80は小型の鉢である。外面にミガキが施されている。

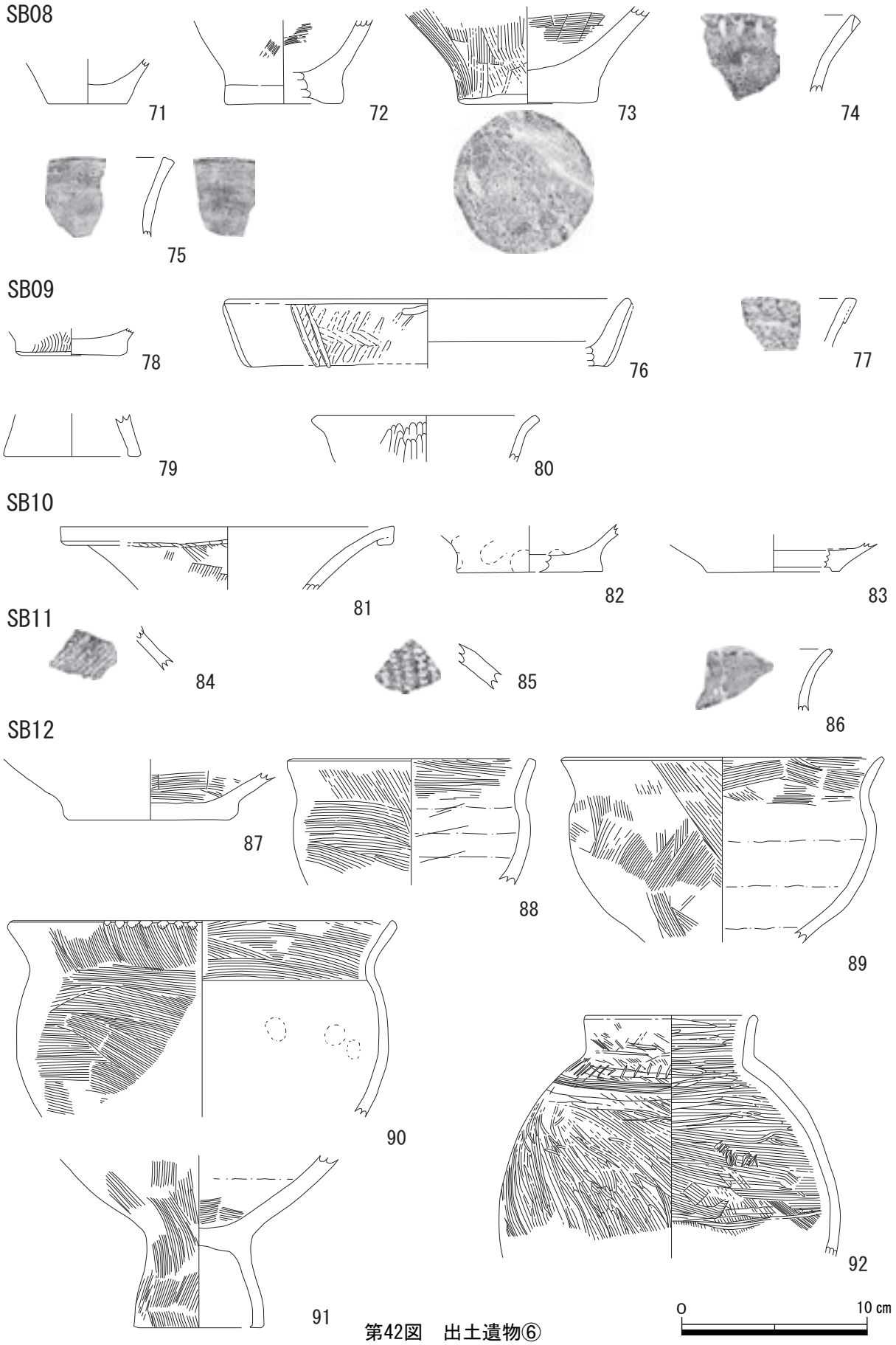
81〜83はSB10出土である。81は折り返し口縁壺の口縁部である。方形の折り返し部は外面と下面に平坦部をもつ。82は壺底部でやや底部が突出している。83は削り出し高台の?である。

84〜86はSB11出土である。84、85は壺肩部で縄文が施されている。86は甕口縁である。端部にキザミがみられる。

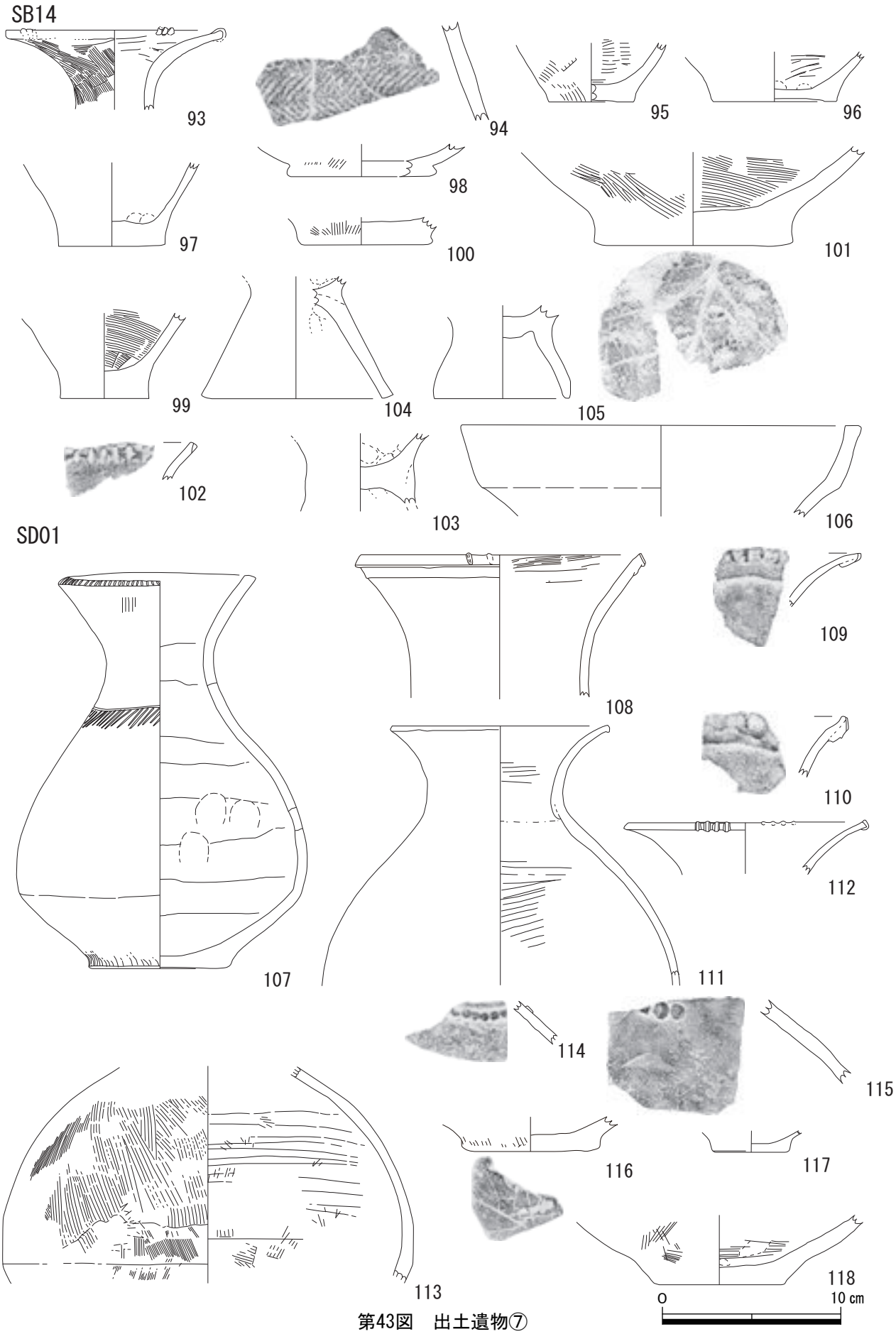
87〜92はSB12出土である。87は床上直上から出土した壺底部で、内面にハケ調整が施される。88〜91は甕である。いずれも最大径は口径で体部は張っている。88、90は外面が口縁部に縦ハケ調整、体部に横ハケ調整が施される。93は斜めハケ調整が施される。内面はいずれも横ハケ調整が施される。91は甕脚台部である。脚部はやや内湾して、端部をやや折り返す。外面は縦ハケ調整、内面は横ハケ調整が施される。92は短頸壺である。口縁端部は丸く仕上げられ、肩部に1〜2㎝程の沈線が縦に入り全周し、その下に4条の沈線が横に施される。外面は頸部付近でハケ調整、体部で斜めのミガキが施される。内面は口縁部から体部上半にかけて丁寧なミガキが施され、体部下半分は横ハケ調整が施される。

93〜105はSB14出土である。93は壺口縁部である。口縁端部に棒状浮文が貼付される。94は壺の頸部で、２列の半裁竹管と横位羽状縄文を施す。95〜101は壺底部である。95、97、99は突出した底部で小型壺と考えられる。内面は横ハケ調整が施される。96は底部が突出し、やや上げ底である。101は底部が突出し、底径は大きい。外面、内面ともに斜めハケ調整が施される。102は甕の口縁部で端部にキザミがみられる。103は甕の脚台部である。104は脚部が直線的に延び外面にハケ調整がなく、内面も指オサエなため高坏または台付鉢の可能性がある。105は脚部が比較的低い。106はSB15出土の複合口縁壺口縁部である。器面は磨滅しており、調整は不明である。

107〜145はSD01出土である。107は単純口縁壺で頸部はやや太く、最大径を体部下位に有し稜をもつ。口唇部にハケによるキザミが見られる。口縁部付近は斜めハケ調整、頸部は無文でなで肩の肩部にハケの刺突による横線文が一条めぐる。その下に長さ2cm程のハケによる刺突文が施される。時期は弥生時代後期前半


SB08
71
72
73
74
75
SB09
78
76
77
79
80
SB10
81
82
83
SB11
84
85
86
SB12
87
88
89
90
91
92
0
10 cm

第42図　出土遺物⑥

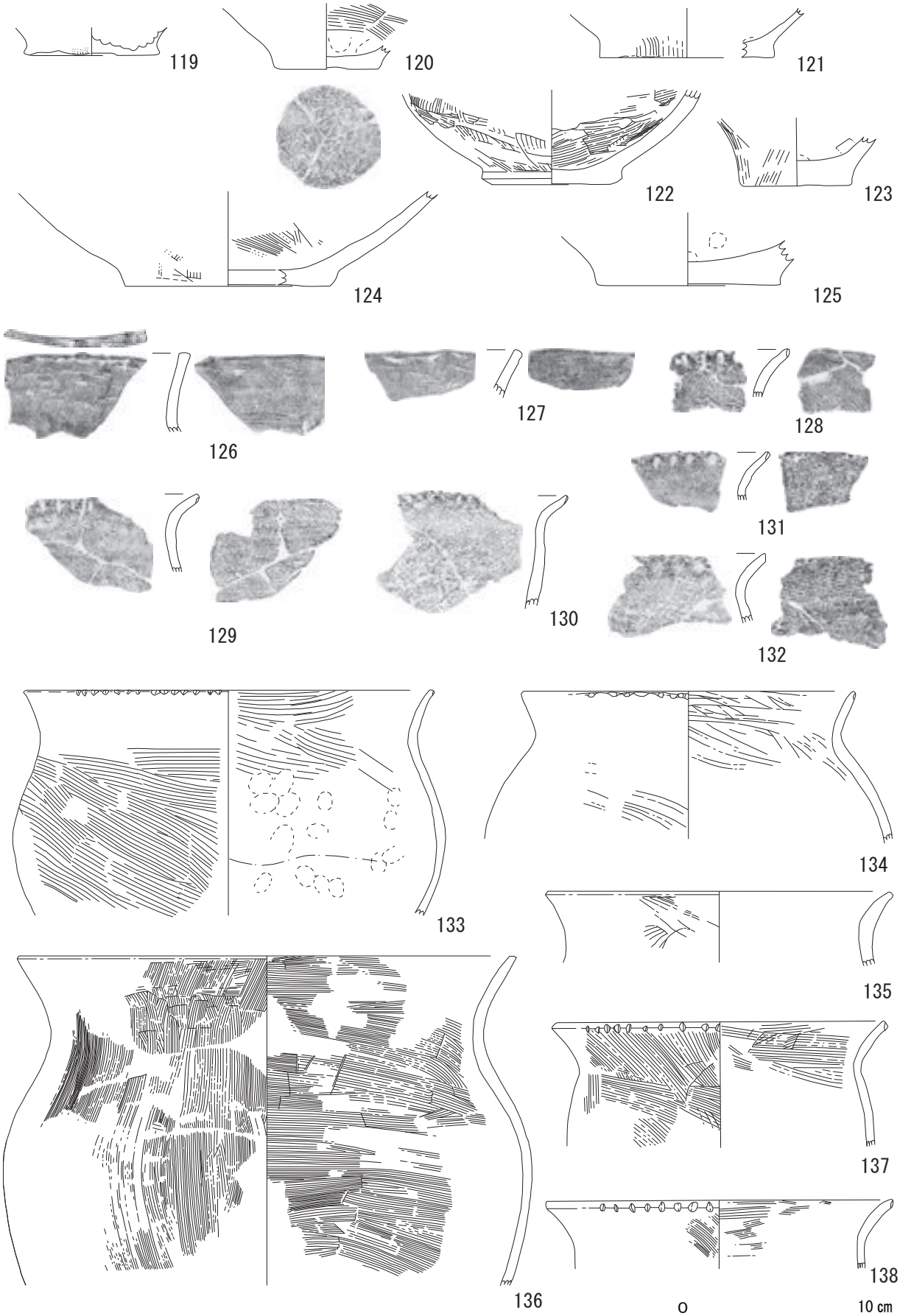

SB14
93
94
95
96
97
98
100
101
99
104
105
102
103
106
SD01
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
0
10 cm

第43図　出土遺物⑦

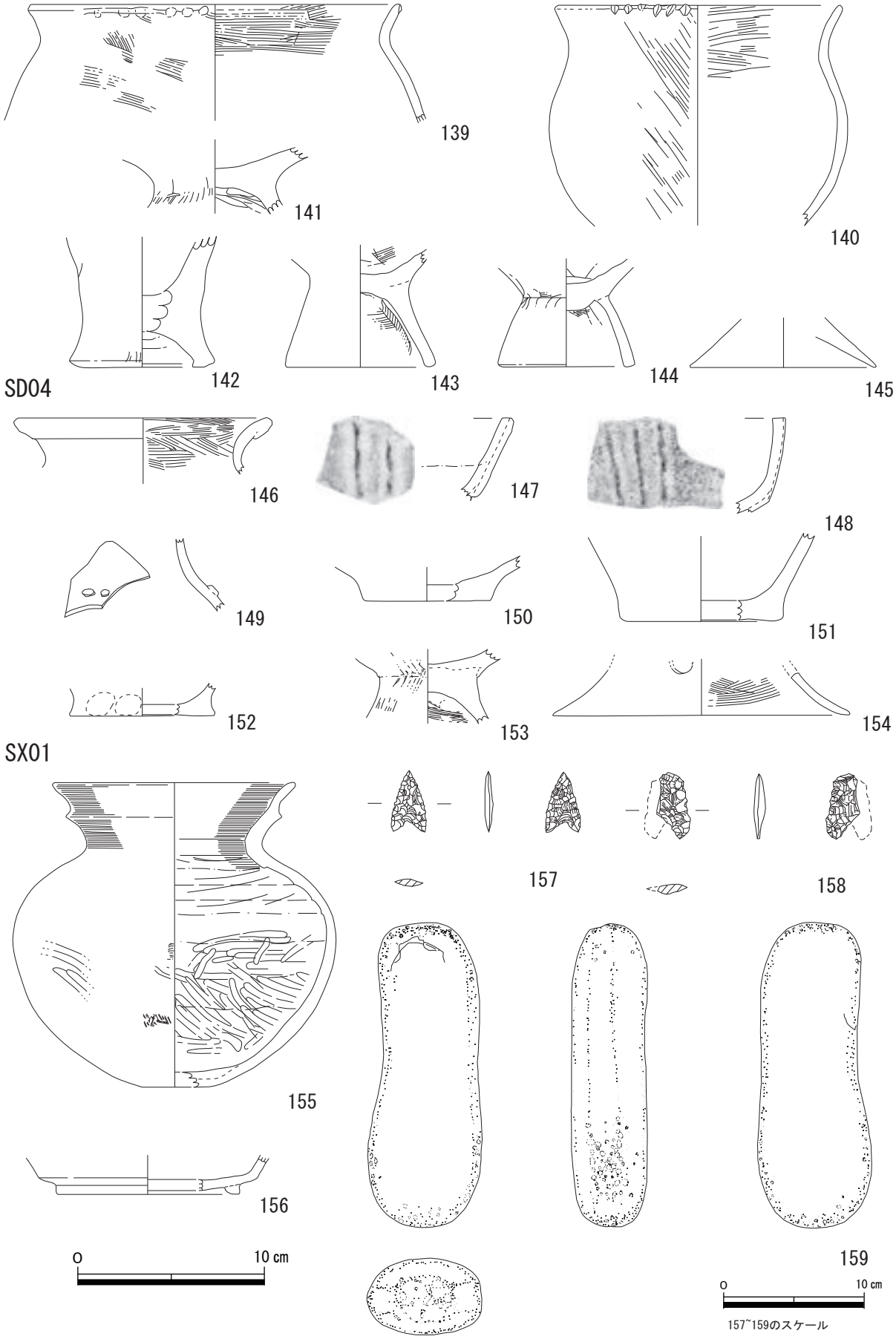
から中頃と考えらえる。108は折り返し口縁壺である。折り返し部は薄く不整形である。また棒状浮紋が貼付される。109、110は折り返し口縁壺の口縁部である。111は単純口縁壺である。107と同様なで肩であるが、やや頸部が太く107よりは新しく弥生時代後期後半頃と考えられる。112は折り返し口縁壺の口縁部である。折り返し部に棒状浮紋が貼付される。113は壺の肩部から体部である。なで肩で外面に縦ハケ調整が施される。114、115は壺肩部である。ともに円形浮文が貼付される。116〜125は壺底部である。いずれも器面は磨滅しており、調整は不明瞭である。123は底部が突出しており、これらの中では古く、弥生時代中期後半であろう。126〜144は甕である。126〜140は甕口縁部から体部である。126は外面に口縁端部まで横ハケ調整を施したのち、縦ハケ調整を施している。127は外面に縦ハケ調整のみ確認できる。内面はいずれも横ハケ調整である。128〜132は口縁部にキザミがみられる。器面が磨滅しているものもあるが、外面斜めハケ、内面横ハケ調整が施されている。133、134は口縁部にキザミがみられ、外面は口縁部付近に斜めハケ、体部に横ハケ調整が施されている。内面は口縁部で横ハケ調整、体部はナデ調整が施されている。135は器壁がやや厚い。136は外面に縦ハケ、内面に横ハケ調整施されている。幅狭のハケが用いられており、形状から中部高地系の平底甕の可能性がある。137〜140はいずれもキザミがみられ外面斜めハケ、内面横ハケ調整が施される。141〜144は脚台部である。142は脚部が短く、端部は内側に肥厚する。体部への立ち上がりはかなり急である。145は高坏または器台の脚部である。

146〜154はSD04出土である。146は壺または鉢の口縁部である。折り返し口縁で折り返しはやや丸みをもつ。内面は口縁部に横ハケ、頸部に斜めハケ調整が施される。147、148は複合口縁壺の口縁部で、棒状浮文が貼付される。149は壺肩部で円形浮文が貼付される。150〜152は壺底部である。器面は磨滅し、調整は不明瞭である。153は台付甕脚台部である。159は開脚高坏の脚部で、円孔が確認できる。160は二重口縁壺である。頸部が太く、肩が張っている。内外面ともに口縁部はナデ、体部から底部にかけては丁寧にミガキが施される。161は須恵器の坏身である。角高台をもつもので8世紀のものである。

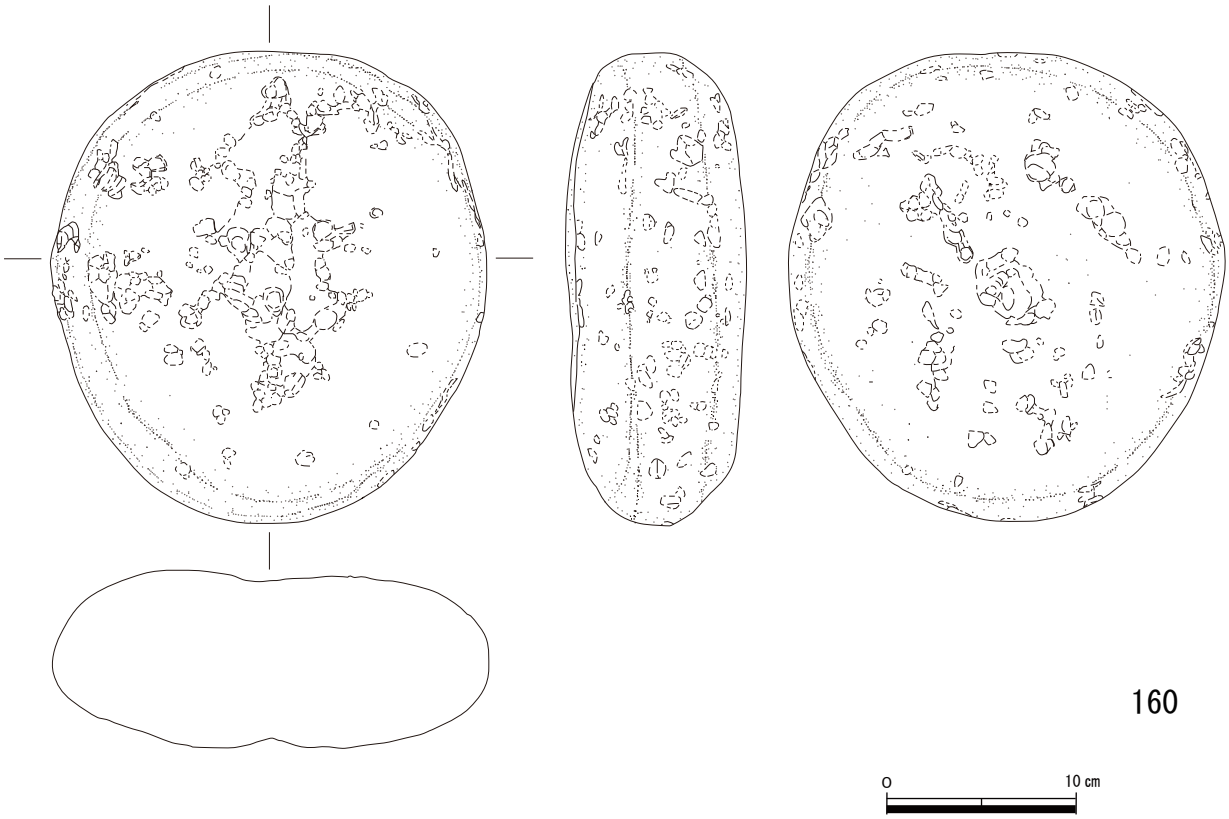
161、162はSB09出土の石鏃である。163、164はSB14出土の敲き石である。


119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
0
10 cm

第44図　出土遺物⑧


139
140
141
142
143
144
145
SD04
146
147
148
149
150
151
152
153
154
SX01
155
156
157
158
159
0
10 cm
0
10 cm
157~159のスケール

第45図　出土遺物⑨



第46図　出土遺物⑩

第１表　遺物観察表（土器）

挿図No.	No.	器　種	遺構名	法量(cm)				胎土	焼成	色調	残存
				口径	底径	器高	その他				
1	10	壺	—	—	—	—		密	良	外：にぶい橙(7.5Ｙ R.7/4) 内：にぶい黄橙（10Ｙ R.7/4)	口縁一部
2	12	壺	—	(12.0)	—	＜3.3＞		密	良	外：にぶい黄橙(Ｈｕｅ.10Ｙ R.7/4) 内：にぶい橙(Ｈｕｅ.7.5Ｙ R.7/4)	口縁部　10%
3	2	壺	—	—	(6.2)	＜1.8＞		密	良	外：橙(Ｈｕｅ7.5Ｙ R7/6) 内：明灰黄(Ｈｕｅ.2.5Ｙ R5/2)	
4	31	壺または甕	—	—	(7.4)	＜3.7＞		密	良	にぶい黄橙(Ｈｕｅ.10Ｙ R5/4)	底部　25%
5	35	壺	—	—	8.5	<2..5＞		密	やや良	黄橙(Ｈｕｅ.7.5Ｙ R8/8)	底部　80%
6	35	壺	—	—	(6.6)	＜2.6＞		密	良	外：橙(Ｈｕｅ.5Ｙ R6/6) 内：黄褐(Ｈｕｅ.2.5Ｙ R5/3)	底部　30%弱
7	29	甕	—	(24.4)	—	＜3.7＞		密	良	黄橙(Ｈｕｅ.10Ｙ R7/8)	口縁部　10%
8	12	台付甕	—	(15.6)	—	＜6.5＞		密	良	黄橙(Ｈｕｅ.7.5Ｙ R7/8)	口縁～胴部　20%
9	398	甕	ＳＢ01	(18.6)	—	＜8.3＞		密	良	黄橙(Ｈｕｅ7.5Ｙ R7/8)	口縁～胴部上半　20%
10	133	甕	ＳＢ03	—	—	＜5.4＞		密	良	橙(Ｈｕｅ.2.5Ｙ R6/8)	底部　40%
11	336	台付甕	ＳＢ03	—	—	＜6.6＞	台付径 (5.9)	密	良	明赤褐(Ｈｕｅ..2.5Ｙ R5/8)	台部～胴部下　30%
12	132	鉢または甕	ＳＢ03	(30.0)	—	＜6.7＞		密	良	橙(Ｈｕｅ.2.5Ｙ R6/8)	口縁　20%
13	202	壺	SB04	(17.4)	—	＜2.9＞		密	良	黄橙(Ｈｕｅ.7.5Ｙ R7/8)	口縁破片
14	262	壺	SB04	(18)	—	＜2＞		密	良	橙(Ｈｕｅ.7.5Ｙ R7/6)	口縁　5%
15	260	壺	SB04	—	—	—		密	良	外：橙(Ｈｕｅ.5Ｙ R6/8) 内：にぶい黄橙(Ｈｕｅ.10Ｙ R6/4)	体部破片
16	137	壺	SB04	—	(5.6)	＜3.6＞		密	良	外：橙(Ｈｕｅ.7.5Ｙ R6/6) 内：にぶい黄橙(Ｈｕｅ.10Ｙ R6/4)	底部　20%
17	213	壺	SB04	—	(6.6)	＜2＞		やや密	良	外：橙(Ｈｕｅ.7.5Ｙ R6/8) 内：黄褐(Ｈｕｅ.10Ｙ R5/8)	底部　50%
18	237	壺	SB04	—	(11)	＜2.3＞		密	良	外：にぶい黄(10Ｙ R］7/4) 内：橙(7.5Ｙ R7/6)	底部破片
19	202	台付甕	SB04	(18.2)	—	＜1.7＞		密	良	外：にぶい黄橙(Ｈｕｅ.10Ｙ R6/4) 内：橙(Ｈｕｅ.　5Ｙ R6/8)	口縁破片
20	213	台付甕	SB04	(17.8)	—	＜3＞		密	良	明赤褐(Ｈｕｅ.5Ｙ R5/8)	口縁破片
21	259	台付甕	SB04	—	—	—		密	良	橙(Ｈｕｅ.5Ｙ R6/8)	台部破片

挿図No.	No.	器　種	遺構名	法量(cm)				胎土	焼成	色調	残存
				口径	底径	器高	その他				
22	269	台付甕	SB04	—	—	＜8.0＞	台部径 8.0	密	良	外：にぶい褐(Ｈｕｅ.7.5ＹＲ5/4) 台部内面：明赤褐(Ｈｕｅ.2.5ＹＲ5/6)	台部　90%
23	261	台付甕	SB04	—	—	＜8.2＞	台部径 9.2	密	良	橙(Ｈｕｅ.5ＹＲ.7/8)	台部　90%
24	400	器種不明	ＳＢ04	—	(9.0)	＜2.1＞		密	良	外：橙(Ｈｕｅ.5ＹＲ7/8) 内：黄褐(Ｈｕｅ.2.5ＹＲ5/3)	底部　15%
25	288	壺	ＳＢ04 床上	12.6	9.2	30.5		密	良	両面とも橙色(Ｈｕｅ.7.5ＹＲ7/6) ～にぶい橙色(Hue.7.5ＹＲ7/4)	ほぼ完形
26	287	台付甕	ＳＢ04 床上	24.0	—	＜30.0＞	台部径 9.1	密	良	橙(Ｈｕｅ.5ＹＲ7/8)	台部　50%
27	324	台付甕	ＳＢ04 床上	—	—	＜6.9＞	台付径 9.4	粗	やや不良	外：橙(Ｈｕｅ.7.5ＹＲ7/6) 内：橙(Ｈｕｅ.5ＹＲ7/8)	台部　完形
28	115	壺	SB05	(13.2)	—	＜1.7＞		密	良	橙（Hue.7.5YR　7/6）	口縁部　10%
29	115	壺	SB05	(19.0)	—	＜2.9＞		密	良	外：黄橙（Ｈｕｅ.10ＹＲ　8/6） 内：橙（Hue.7.5ＹＲ　6/8）	口縁部　10%
30	113	壺	SB05	—	—	—		やや粗	不良	黄橙（Hue.7.5YR 7/8）	体部破片
31	184	壺	SB05	—	—	—		密	良	橙（Hue.7.5ＹＲ・6/6）	体(肩?)部破片
32	122	壺	SB05	—	(7.0)	＜2.1＞		密	良	黄橙（Hue.10ＹＲ　8/6）	底部　10%
33	180	甕	SB05	—	7.4	(3.0)		密	良	外：暗灰黄～明褐～黒（Hue.2.5Y 5/2 ～7.5YR 5/6～7.5YR 2/1） 内：暗灰黄（Hue.2.5Y 4/2）	底部
34	200	壺	SB05	—	(8.0)	＜3.2＞		密	良	黄橙（Hue.7.5ＹＲ 7/8）	底部50%弱
35	108	台付甕	SB05	4.0	—	＜1.9＞		密	良	暗灰黄（Hue.2.5Y　5/2）	接続部　100%
36	192	高坏	SB05	(11.6)	—	<7.3>		密	良	外：坏の口縁～体部　橙 （Hue.2.5ＹＲ 7/8） 内：坏低部～脚部　浅黄橙 （Hue.7.5ＹＲ　8/6）	40%
37	294	甕	SB06 床上	(18.8)	—	＜2.0＞		密	良	橙(Ｈｕｅ.7.5ＹＲ.6/6)	口縁部　15%
38	295	鉢形土器	SB06　床上	(29.0)	(8.3)	(21.9)		密	良	浅黄橙(Ｈｕｅ.7.5ＹＲ8/4)	60%
39	294	壺	SB06　床上	17.2	8.4	45.8		密	良	内外：にぶい黄橙(Ｈｕｅ.10ＹＲ6/4)～橙色 (Ｈｕｅ.5ＹＲ6/6)～暗灰黄(Hue.25ＹＲ5/2)	口縁～頸部..胴部の一部を欠損
40	293	鳥形土器	SB06　床上	—	7.0	＜8.6＞	全長<23.9> 幅8.1	やや密	良	外：にぶい黄褐～褐灰～黒(炭化)（Hue.10ＹＲ 5/3～10ＹＲ 4/1～10ＹＲ　2/1） 内：にぶい黄褐（Hue.10ＹＲ　5/4）	尻尾端を少々欠損 頭部付近欠損
41	296 297	壺	SB06　床上	—	(9.0)	＜19.0＞		やや密	良	両面共ににぶい橙色(Ｈｕｅ.5ｙｒ6/4) ～橙色(Ｈｕｅ.5ＹＲ6/6)	底部1/3周、胴部の1/2
42	395	壺	SB06 内壁溝	—	(7.2)	＜2.9＞		密	やや良	浅黄橙(Hue.7.5ＹＲ8/6)	底部　70%
43	102	壺	SB07	(14.6)	—	＜2.5＞		密	良	両面共に褐～灰黄褐 （Hue.10ＹＲ　4/6～Hue.10ＹＲ　4/2）	口縁部破片
44	102	壺	SB07	—	—	＜1.8＞		密	良	両面共に橙（Hue.7.5ＹＲ　6/8）	口縁部破片
45	102	壺	SB07	—	—	＜2.15＞		密	良	外：橙（Hue.7.5ＹＲ　6/6） 内：灰黄褐（Hue.10ＹＲ 5/2）	口縁部破片
46	185	壺	SB07	—	—	＜3.1＞		密	良	両面共に橙（Hue.7.5ＹＲ 6/6）	胴部破片
47	241	壺	SB07	(14.6)	—	<3.8>		密	良	両面共に橙（Hue.7.5ＹＲ 7/6）	口縁部破片
48	82	壺	SB07	—	—	<5.3>		密	良	両面共に黄褐（Hue.10ＹＲ　5/8）	胴部の破片
49	68	壺	SB07	—	(4.6)	<1.2>		密	良	両面共に明赤褐（Hue.5ＹＲ　5/6）	底部破片
50	82	壺	SB07	—	(7.4)	<3.1>		密	良	両面共ににぶい黄褐（Hue.10ＹＲ　5/4）	底部破片
51	82	壺	SB07	—	(8.4)	<2.0>		密	良	両面共に橙～灰黄褐 （Hue.7.5ＹＲ 6/6～Hue.10ＹＲ 6/2）	底部破片
52	83	壺	SB07	—	(5.8)	<1.1>		密	良	外：にぶい黄橙～黒褐(Hue.10ＹＲ 4/2) 内：にぶい黄橙（Hue.10ＹＲ　7/4）	底部破片
53	102	壺	SB07	—	(5.4)	＜2.5＞		密	良	外：にぶい黄褐（Hue.10ＹＲ 5/4） 内：暗灰黄～(赤褐)（Hue.2.5Y　4/2）	底部破片
54	102	壺	SB07	—	(8.6)	＜3.1＞		密	良	外：にぶい黄褐（Hue.10ＹＲ 5/4） 内：黄褐（Hue.2.5Y　5/3）	底部破片
55	150	壺	SB07	—	(8.0)	<1.7>		密	良	外：黄褐（Hue.10ＹＲ 5/8） 内：黄褐（Hue.2.5Y　5/3）	底部破片
56	117	壺	SB07	—	(9.4)	＜2.5＞		密	良	外：にぶい黄橙（Hue.10ＹＲ 6/4） 内：褐灰～明黄褐（Hue.10ＹＲ 6/1 ～Hue.10ＹＲ 7/6）	底部破片
57	150	壺	SB07	—	(9.6)	<2.4>		密	良	両面共にぶい黄橙（Hue.10ＹＲ 6/4）	底部破片(1/4周)
58	370	壺	SB07	—	8.0	<3.8>		やや粗い	良	外：橙（Hue.7.5ＹＲ 6/6） 内：黄褐（Hue.2.5Y　5/3）	底部破片
59	163	台形土器	SB07 床上	—	5.8	<2.2>		密	良	外：にぶい黄橙（Hue.10ＹＲ 7/4） 内：橙（Hue.5ＹＲ 6/6）	底部～胴部
60	86	壺	SB07	—	—	＜3.6＞		密	良	外：にぶい黄褐～黒（Hue.10ＹＲ 5/3 ～Hue.7.5ＹＲ　2/1） 内：にぶい黄褐（Hue.10ＹＲ　5/4）	口縁部破片

挿図No.	No.	器　種	遺構名	法量(cm)				胎土	焼成	色調	残存
				口径	底径	器高	その他				
61	164	台付甕	SB07	12.8	8.7	15.3		密	良	外：にぶい黄橙～灰黄褐 （Hue.10YR 5/3～10YR 5/2） 内：にぶい黄橙～灰黄褐～橙 （Hue.10YR 5/3～10YR 5/2～7.5YR5/8）	ほぼ完形(口縁部と脚部を少し欠損)
62	102	甕	SB07	—	—	＜3.3＞	径 (6.0)	密	良	橙（Hue.5YR 7/8）	台部?との接続部 30%
63	102	台付甕	SB07	—	—	＜2.4＞	径 4.0	密	良	黄橙（Hue.7.5YR 8/8）	接続部　100%
64	119	甕?	SB07	—	—	＜3.2＞	径(6.0)	密	良	橙（Hue.7.5YR 6/6）	接続部分 ～体部一部　15%
65	102 126	甕	SB07	—	—	＜8.2＞	台部径(13.0)	密	良	浅黄橙（Hue.10YR 8/4）	台部30%
66	126	甕	SB07	—	—	<4.5>	台部径(12.0)	密	良	浅黄橙（Hue.10YR　8/4）	10%
67	161	甕	SB07床上	—	—	<9.5>	台部径(9.2)	密	良	外：橙（Hue.5YR 7/8） 内：橙（Hue.7.5YR 7/6）甕の内面	底～台部30%
68	162	甕	SB07	—	—	<7.9>	台部径9.4	密	良	浅黄橙（Hue.7.5　8/4） 台内部：橙（Hue.2.5YR 7/6）	台部ほぼ完形
69	165	甕	SB07	—	—	<6.5>	台部径7.2	密	良	橙（Hue.5YR　7/6） 台外面：橙（Hue.7.5YR 7/6）	台部ほぼ完形
70	190	甕	SB07	—	—	<9.3>	台部径10.1	密	良	外：にぶい橙（Hue.7.5YR 7/4） 内：橙（Hue.2.5YR 7/6）	台部85%
71	206	甕	SB08	—	(4.4)	＜2.2＞		密	良	にぶい黄褐(Hue10YR5/3)	底部　100%
72	232	甕	SB08床上	—	(6.8)	＜4.5＞		密	良	外：黄橙(Hue.7.5YR7/8) 内：橙(Hue.7.5YR7/6)	底部　50%%
73	232	甕	SB08床上	—	(8)	＜5.1＞		密	良	外：にぶい橙(Hue7.5YR7/4) 内：橙(Hue7.5YR7/6)	底部　100%
74	187	甕	SB08	—	—	＜4.1＞		密	良	外：にぶい黄橙(Hue10YR6/4) 内：黄褐(Hue10YR5/6)	口縁破片
75	187	甕	SB08	—	—	＜4.5＞		密	良	外：明赤褐(Hue.7.5YR7/6) 内：橙(Hue.10YR7/6)	口縁破片
76	3	壺	SB09	(26.3)	—	＜3.5＞		密	良	外：橙(Hue.5YR7/6) 内：橙(Hue.5YR7/8)	
77	255	壺	SB09	—	—	—		密	良	黄褐(Hue.10YR5/8)	口縁破片
78	3	壺	SB09	—	(6.6)	＜1.5＞		密	良	外：明赤褐(Hue.5YR5/8) 内：橙(Hue.5YR7/8)	底部　20%
79	255	台付甕	SB09	—	(7.2)	—		密	良	外：橙(Hue.7.5YR6/6) 内：橙(Hue.7.5YR6/8)	台付き脚部破片
80	3	鉢	SB09	(12.4)	—	＜2.5＞		密	良	橙(Hue.7.5YR7/6)	口縁破片
81	249	壺	SB10	(23)	—	＜3.6＞		やや粗	良	橙(Hue.5YR7/8)	口縁　5%
82	323	壺	SB10	—	(7.6)	＜3.6＞		密	良	外：黄橙(Hue.7.5YR8/8) 内：橙(Hue.7.5YR6/6)	底部　25%
83	354	壺	SB10	—	(8.4)	＜1.6＞		密	良	外：淡黄(2.5Y7/3) 内：淡黄(2.5Y8/4)	底部破片　5%
84	306	壺	SB11	—	—	—		密	良	橙(Hue.5YR6/8)	体部破片
85	306	壺	SB11	—	—	—		密	良	外：橙(Hue.5YR7/8) 内：橙(Hue.5YR7/6)	体部破片
86	306	壺	SB11	—	—	—		密	良	外：にぶい黄橙(Hue.10YR6/3) 内：にぶい黄橙(Hue.10YR7/4)	口縁破片
87	338	壺	SB12床上	—	(8.0)	<3.3>		密	良	外：浅黄橙（Hue.7.5YR 8/4） 内：灰褐（Hue.7.5YR 4/2）	底部　100%
88	339	台付甕	SB12	(12.6)	—	<6.8>		密	良	外：にぶい褐（Hue.7.5YR 6/3） 内：浅黄橙（Hue.7.5YR 8/4）	口縁～体部　30%弱
89	340 352	台付甕	SB12 炉覆土	(17.0)	—	—		密	良	外：浅黄橙（Hue.10YR 8/4） 内：橙（Hue.5YR 7/6）	口縁～体部　25%
90	383 397	台付甕	SB12	(20.4)	—	＜10.6＞		密	良	外：灰黄褐(Hue.10YR4/2) 内：橙(Hue.7.5YR7/6)	口縁～胴部　20%
91	341	台付甕	SB12	—	—	＜9.3＞	台部径　6.6	密	良	灰黄褐(Hue.10YR5/2)	台部～胴部　50%弱
92	361	短頸壺	SB12覆土	9.4	—	＜13.0＞		密	良	両面ともにぶい黄橙(Hue.10YR7/3)	口縁～胴部
93	314	壺	SB14 床面やや上	(12.2)	—	<4.5>		密	やや不良 (気泡多数)	浅黄橙（Hue.10YR 8/4）	口頸部　30%
94	302	壺	SB14	—	—	—		密	良	外：黄橙（Hue.7.5YR 7/8） 内：明黄褐（Hue.10YR 6/6）	肩部一部
95	300	壺	SB14	—	(4.8)	<3.3>		密	やや不良	褐灰（Hue.5YR 5/1）	底部　50%
96	301	壺	SB14	—	7.0	<2.5>		密	やや不良	橙（Hue.7.5YR 7/6）	底部　60%
97	308	壺	SB14	—	6.0	<4.6>		密	良	にぶい褐(Hue.7.5YR 5/3)	底部　100% 体部　20%
98	309	壺	SB14 床面やや上	—	(8.0)	<1.7>		密	やや不良	外：橙（Hue.7.5YR 7/6） 内：褐灰（Hue.10YR 5/1）	底部　15%

挿図No.	No.	器　種	遺構名	法量(cm)				胎土	焼成	色調	残存
				口径	底径	器高	その他				
99	312	壺	SB14 床面やや上	—	5.0	<4.8>		密	良	外：にぶい橙（Hue.5ＹＲ 6/6） 内：橙（Hue.5ＹＲ 6/8）	底部　100% 体部一部　30%
100	325	壺	SB14 南側焼土	—	(68)	＜1.5＞		密	良	外：橙(Hue2.5ＹＲ6/8) 内：褐灰(Hue10ＹＲ6/1)	底部　100%
101	315	壺	SB14 床面やや上	—	(11.2)	＜5.5＞		密	やや 不良	外：橙(Hue.7.5YR7/6) 内：明褐灰(Hue.7.5YR7/1)	底部～胴部　50%弱
102	302	甕	SB14	—	—	—		密	良	外：黒（Hue.5Ｙ 2/1） 内：橙（Hue.5ＹＲ 7/6）	口縁部破片
103	308	甕	SB14	—	—	<3.8>		密	良	外：橙(Hue.2.5YR7/8) 台部裏 浅黄橙(Hue.7.5YR8/6)	接続部100%
104	313	高坏か 台付鉢	SB14 床面やや上	—	—	<6.9>	台部径(10.8)	粗	やや 不良	台部：浅黄橙（Hue.10ＹＲ 8/6） 底部(内)：にぶい黄褐（Hue.10ＹＲ 5/3）	台部　15%
105	315	壺	SB14 床面やや上	—	(11.2)	＜5.5＞		密	やや 不良	外：橙(Hue.7.5YR7/6) 内：明褐灰(Hue.7.5YR7/1)	底部～胴部　50%弱
106	414	壺	SB16	(22.2)	—	＜5.1＞		密	良	橙(Hue.5YR7/8)	口縁部　10%強
107	154	壺	SD01	11.1	8.1	22.2		やや密	良	外：橙色(Ｈｕｅ7.5ＹＲ6/6) 内：灰黄褐色(Ｈｕｅ10ＹＲ) ～にぶい黄橙色(Ｈｕｅ10ＹＲ6/4)	口縁と底部.胴部40% を欠損
108	50	壺	SD01	(15.6)	—	＜8.0＞		密	良	外：黄橙(Ｈｕｅ.7.5ＹＲ7/8) 内：橙(Ｈｕｅ.7.5ＹＲ6/6)	口縁～頸部　10%
109	80	壺	SD01	—	—	—		密	良	外：橙(Ｈｕｅ.7.5ＹＲ6/6) 内：橙(Ｈｕｅ.7.5ＹＲ7/6)	口縁破片
110	80	壺	SD01	—	—	—		密	やや 不良	外：橙(Ｈｕｅ.7.5ＹＲ7/8) 内：黄橙(Ｈｕｅ.7.5ＹＲ6/8)	口縁破片
111	155	壺	SD01	12.0	—	<14.6>		密	良	橙（Hue.7.5ＹＲ 7/8）	口縁部　80% 体部　10%
112	159	壺	SD01	—	5.6	<3.9>		密	良	外：橙（Hue.5ＹＲ 6/8） 内：にぶい黄褐（Hue.10ＹＲ 5/3）	口縁部　80% 体部　10%
113	67、71 73	壺	SD01	—	—	＜12.2＞		密	良	橙(Ｈｕｅ.7.5ＹＲ6/8)	胴部破片
114	75	壺	SD01	—	—	—		密	良	外：橙(Ｈｕｅ.7.5ｙｒ6/8) 内：灰黄褐(10ＹＲ4/2)	体部破片
115	93	壺	SD01	—	—	—		やや密	良	外：橙(Ｈｕｅ.7.5ＹＲ7/6) 内：明黄褐(Ｈｕｅ.10ＹＲ6/6)	体部破片
116	45	壺	SD01	—	(7.8)	＜1.9＞		密	良	外：にぶい黄橙(Hue.10YR7/4) 内：にぶい黄橙(Hue.10YR5/3)	底部　30%
117	65	壺	SD01	—	4.4	＜1.1＞		密	良	外：橙（Hue7.5YR/6/6） 内：橙（Hue7.5YR/6/6）	底部　70%
118	74	甕	SD01	—	(7.2)	＜3.8＞		密	良	外：黄橙(Ｈｕｅ.7.5ＹＲ7/8) 内：橙(Ｈｕｅ.5ＹＲ7/8)	底部　50%
119	80	壺	SD01	—	(7.2)	＜1.6＞		密	良	外：橙(Ｈｕｅ.7.5ＹＲ7/6)	底部　50%
120	87	甕	SD01	—	(6)	＜3.2＞		密	良	外：橙（Hue7.5YR6/6） 内：にぶい黄褐(Hue10YR5/3)	底部　100%
121	152	壺	SD01	—	(9.2)	＜2.8＞		密	良	外：橙(Hue.7.5ＹＲ7/6) 内：にぶい黄褐(Ｈｕｅ.10ＹＲ5/3)	底部　10%
122	156 174	壺	SD01	—	(7.6)	<5.1>		やや密	良	両面共に橙～黄橙 （Hue.7.5ＹＲ 6/6～Hue.7.5ＹＲ 7/8）	胴部～底部
123	159	壺	SD01	—	5.6	<3.9>		密	良	外：橙（Hue.5ＹＲ 6/8） 内：にぶい黄褐（Hue.10ＹＲ 5/3）	底部　50%強
124	159	壺	SD01	—	(11.0)	＜5.2＞		密	良	橙(Ｈｕｅ.7.5ＹＲ7/6)	底部　15%%
125	175	甕	SD01	—	10.2	＜2.6＞		密	良	外：橙（Hue7.5YR6/6） 内：にぶい黄褐（Hue2.5Y6/3）	底部　100%
126	59-1	甕	SD01	—	—	<4.3>		密	良	外：暗灰黄～にぶい黄橙 （Hue.2.5Ｙ 5/2～Hue.10ＹＲ 7/4） 内：暗黄褐～黒 （Hue.10ＹＲ 7/6～Hue.10ＹＲ 2/1）	口縁の破片
127	59-2	甕	SD01	—	—	<2.7>		密	良	両面共ににぶい黄橙（Hue.10ＹＲ 7/4）	口縁の破片
128	59-3	甕	SD01	—	—	<2.6>		やや密	良	外：褐～黒褐(炭化) （Hue.7.5ＹＲ 4/4～Hue.7.5ＹＲ 3/1） 内：にぶい褐（Hue.7.5ＹＲ 5/4）	口縁の破片
129	67	甕	SD01	—	—	<3.7>		密	良	外：明赤褐（Hue.5ＹＲ 5/8） 内：明赤褐（Hue.5ＹＲ 5/8）	口縁の破片
130	93	甕	SD01	—	—	<6.1>		密	良	外：明赤褐（Hue.5ＹＲ 5/8） 内：明赤褐～橙 （Hue.5ＹＲ 5/8～Hue.5ＹＲ 6/8）	口縁の破片
131	151	甕	SD01	—	—	<2.6>		やや粗	普通？	両面共赤褐～黒(炭化部分あり) （Hue.2.5ＹＲ 4/8～Hue.5ＹＲ 7/1）	口縁の破片
132	176	甕	SD01	—	—	<3.8>		やや密	良	外：橙（Hue.5ＹＲ 6/8） 内：橙～橙（Hue.7.5ＹＲ 7/6 ～Hue.5ＹＲ 6/8）	口縁の破片
133	72	甕	SD01	(22.2)	—	<12.2>		粗い	良	両面共ににぶい黄橙～黒褐 （Hue.10ＹＲ 7/3～Hue.10ＹＲ 3/2）	口縁～胴部(約1/8周)

挿図No.	No.	器　種	遺構名	法量(cm)				胎土	焼成	色調	残存
				口径	底径	器高	その他				
134	72 74	甕	SD01	(18.0)	—	<8.2>		粗い	良	外：にぶい黄褐～褐灰 （Hue.10ＹＲ 6/4～Hue.10ＹＲ 4/1） 内：にぶい黄褐～黒褐 （Hue.10ＹＲ 6/4～Hue.10ＹＲ 3/1）	口縁～胴部(約1/6周)
135	77	甕	SD01	(18.8)?	—	<4.0>		やや密	良	外：赤褐～黒褐(炭化) （Hue.5ＹＲ 4/6～Hue.5ＹＲ 3/1） 内：灰褐～赤褐 （Hue.7.5YR 4/2～Hue.5YR 4/6）	口縁部破片
136	89、91 94	甕	SD01	(27.0)	—	<17.8>		やや密	良	両面共に赤褐～橙～黒褐(炭化) (Hue.2.5YR 4/6～7.5Y 6/6～7.5Y3/1)	口縁～胴部
137	176	甕	SD01	(18.2)	—	<6.8>		密	良	外：にぶい黄褐～明赤褐 （Hue.10ＹＲ 5/3～Hue.5ＹＲ 5/8） 内：明赤褐（Hue.5ＹＲ 5/8）	口縁(1/6周)～胴部
138	176	甕	SD01	(18.8)	—	<3.7>		やや密	良	外：黒褐(炭化?)～橙 （Hue.10ＹＲ 1/3～Hue.5ＹＲ 6/6） 内：黒褐～明赤褐 （Hue.10ＹＲ 1/3～Hue.5ＹＲ 5/6）	口縁(約1/8周)
139	177	甕	SD01	(20.0)	—	<6.2>		やや密	良	両面共に赤褐～橙 （Hue.5ＹＲ 4/8～Hue.5ＹＲ 7/6）	口縁(約1/6周)
140	177	台付甕	SD01	(15.0)	—	<11.8>		密	良	明赤褐（Hue.2.5ＹＲ 5/8）	口縁～体部　10%
141	76	台付甕	SD01	—	(6.6)	<3.6>		密	良	両面共橙～にぶい褐 （Hue.2.5ＹＲ 6/6～Hue.7.5ＹＲ 5/4）	底部約1/2～台部の少し
142	78、80 141	台付甕	SD01	—	(6.4)	<7.0>	脚部径7.8	やや密	良	外：にぶい黄褐～黄灰 （Hue.10ＹＲ 5/4～Hue.2.5Ｙ 4/1） 内：橙～黄灰 （Hue.5ＹＲ 6/6～Hue.2.5Ｙ 4/1）	胴部～脚部の1/2周
143	157	台付甕	SD01	—	5.2	<6.3>	脚部径8.0	密	良	両面共に橙～にぶい黄橙 （Hue.7.5ＹＲ 6/8～Hue.10ＹＲ 6/4）	脚部　70% 底部少々
144	158	台付甕	SD01	—	(8.6)	<5.8>	脚部径7.4	やや密	良	両面共に橙～にぶい黄橙 （Hue.5ＹＲ 6/8～Hue.10ＹＲ 6/3）	胴部～脚部の1/2周弱
145	59	高坏	SD01	—	—	<2.6>	脚部径(10.0)	密	良	にぶい黄橙（Hue.10ＹＲ 7/3）	10%
146	409	壺	SD04	(13.2)	—	＜2.7＞		密	良	外：橙(Hue.5YR6/8) 内：浅黄橙(Hue.7.5YR8/6)	口縁部～肩部　10%強
147	409	壺	SD04	—	—	—		密	良	黄橙(Hue.7.5YR7/8)	口縁部破片
148	416	壺	SD04	—	—	—		密	良	外：橙(Hue.5YR6/8) 内：明黄褐(Hue.10yR7/6)	口縁部破損
149	407	壺	SD04	—	—	—		密	良	黄橙(Hue.7.5YR.8/8)	肩部破片
150	409	壺	SD04	—	(6.8)	＜2.5＞		密	良	外：にぶい黄橙(Hue.10YR7/3) 内：黒褐(Hue.10YR3/1)	底部　20%　弱
151	409	壺	SD04	—	(8.8)	＜4.7＞		密	良	外：浅黄橙(Hue.10YR8/4) 内：橙(Hue.7.5YR7/6)	底～体部20%
152	409	壺	SD04	—	(7.8)	＜2.0＞		密	良	外：橙(Hue.5YR6/8) 内：にぶい黄(Hue.2.5Y6/4)	底部　25%
153	408	台付甕	SD04	—	—	＜3.6＞	接合部径6.0	密	良	浅黄橙(Hue.10YR8/4)	台との接合部　100%
154	406	高坏	SD04	—	—	＜2.5＞	基部径(1.6)	密	良	黄橙(Hue.10YR8/6.)	台部　10%
155	403	壺	SX01	(12.8)	(3.6)	16.3		密	良	赤褐(Ｈｕｅ.5ＹＲ.4/8)	50%弱
156	371	坏身	SH01		(9.8)	＜2.1＞		密	良	両面共に灰白(Hue.2.5YR7/1)	底部破損

第２表　遺物観察表（石器）

挿図No.	遺物No.	遺構名	器種	出土地点	法量(cm)			重量(g)	材質など
					全長	幅	厚		
157	276	ＳＢ09	鏃	SB09北東	2.15	1.25	0.3	0.5	黒曜石
158	292	ＳＢ09	鏃	ＳＢ09　南北ベルト	2.35	＜1.2＞	0.4	0.8	黒曜石
159	135	ＳＢ07	敲石	SB07	10.9	5.1	2.7	198	
160	316	ＳＢ14	敲石	ＳＢ14　やや上	12.5	11.6	4.8	990	

第３章　まとめ

（1）各遺構の年代観について

今回の調査では、掘立柱建物跡、溝、竪穴住居、土坑が検出された。遺構の時期を決定付けることのできる一括性を持った土器、切り合い関係から、年代観について詳述する。

弥生時代中期後葉の遺構としては、SB06、SB08がある。SB06からは弥生時代中期後葉の壺（第39図39）が床上から出土している。底径が小さく、突出し、口縁部に縄文を施文する。頸部はやや太頸化し、施文も横帯化していることから、弥生時代中期後葉に時期を求めることができる。なお、鉢形土器や鳥形土器が共伴しており、それぞれ同時期と考えられるが、器種としては静岡市域に同時期の類例がないため（鳥形土器は有東遺跡で同時期の可能性あり）、比較できない。鳥形土器の出土は、住居の廃絶時に何らかの祭祀的行為が行われた可能性を考えることができる。SB08の床上からは壺底部（第42図72・73）が出土しており、壺39と同様のプロポーションを呈することが考えられるため、SB06、SB08はともに弥生時代中期後葉の住居と考えられる。

弥生時代後期前半からの遺構としては、SD01がある。覆土上層からは菊川式系のハケ刺突による壺（第43図107）と内面が口縁までが横ハケ、体部はナデ調整を施す甕（第44図133ほか）がともに数点出土している。切り合いとしてはSB08を切っており、矛盾しない。SD01に少量含まれる弥生時代中期の土器はSB08などを破壊した際に混入したものと考えられる。

弥生時代後期後半から古墳時代初頭の遺構としては、SB04がある。SB04からは弥生時代後期後半から古墳時代初頭の壺及び甕（第38図25、26）が床上から出土している。壺25は頸部が短く、土器自体がやや歪んでいるが最大形を体部中位に持つ、無文の土器である。甕26は壺25と同時期と考えられる。

古墳時代前期の遺構としては、二重口縁壺が出土したSX01がある。口縁部があまり立ち上がらず頸部が太く、肩の張りが強いため、大廓Ⅳ式か中見代Ⅰ式期、古墳時代前期末頃と考えられる。

これら時期がわかる遺構及び遺物から遺構について切り合い関係を考えると、SB06→SB12→SB05→SB03、SB13→SB04→SB07、SB01となる。SB12の出土遺物は弥生時代後期、SB05の出土遺物は、壺頸部30は弥生時代中期と考えられるが、その他は弥生時代後期の範疇に収まるため、SB12からSB01については弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての遺構と考えられる。これらの遺構と切り合い関係にない、SB09、SB10、SB11、SB14、SB15についても弥生時代後期の遺物がほとんどであるため、当該期の遺構と考えられる。

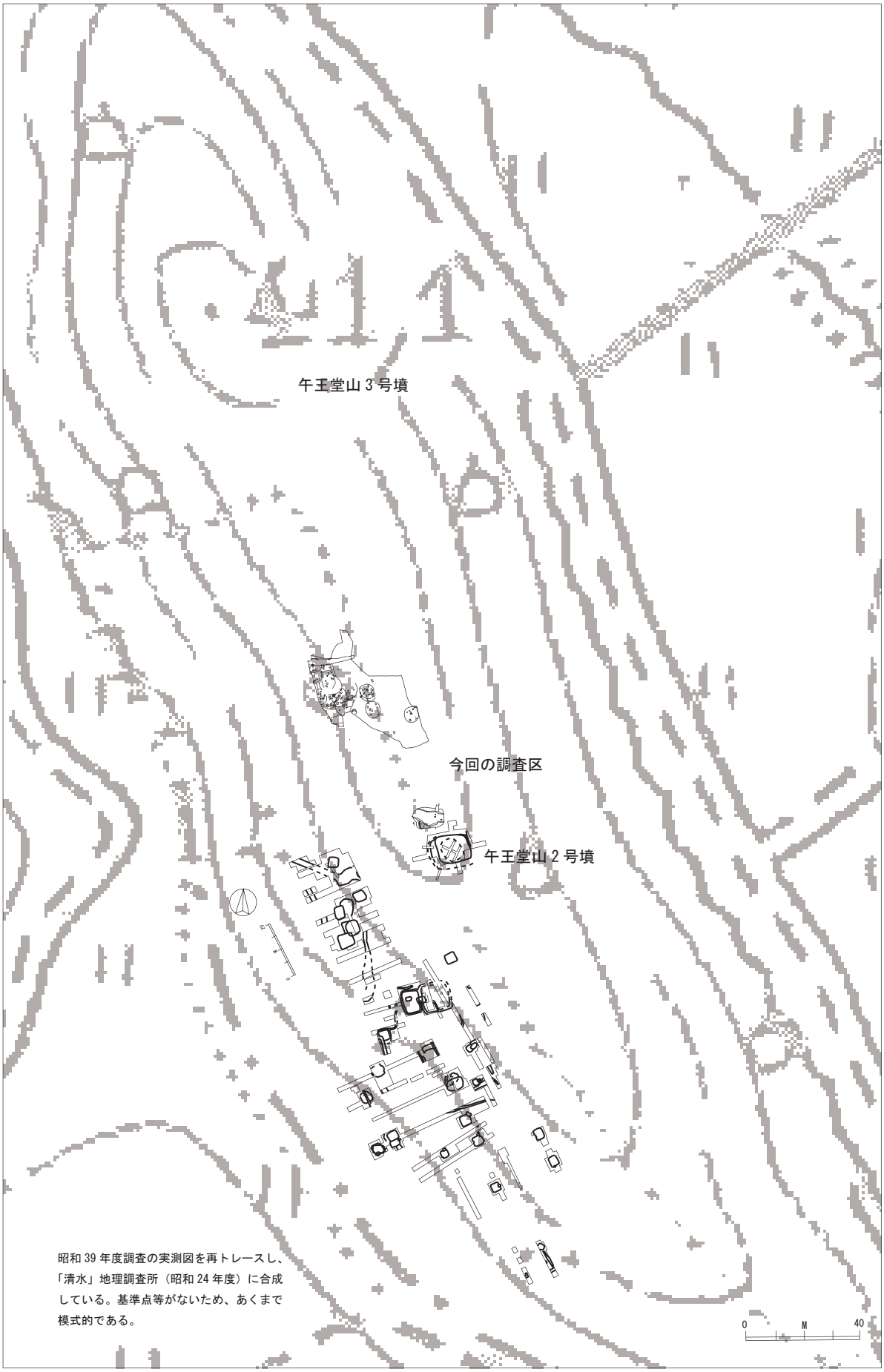
（2）住居の形態等について

今回の調査では、竪穴住居が16基検出された（SB06とSB14で壁溝のみ検出されたものは建て替えのため、数には含めていない）。竪穴住居についてプランや規模、炉から考えてみたい。

今回プランが確認あるいは推測できた住居は、SB03、04、05、06、08、09、10、11、12、13、14である。（SB01、02は残存状況が悪く、明確に捉えられなかったため、ここでは除外する。）不整形なものもあるが、いずれも楕円形のプランを呈する。

規模は、全体がわかったものは少ないが、おおよそ東西方向が5m前後、南北方向が5m～6m程度に収まる。

残存状況の比較的良好な住居からは中央やや奥側で炉が検出されている。このうちSB03、SB07、SB08、SB12、SB14は幅10㎝、長さ30㎝程の枕石を備えている。SB03、SB07、SB08は断面三角形に近い石の平坦面を上にし、尖った側を据えている。SB12、SB14は断面長方形に近い石を用いて平坦面を上にする。また、SB01、02、06、09、11、13では枕石は確認できないものの、焼土が住居の中央付近で検出されている。いずれの住居も床面まで削平されていることから、本来は枕石が存在した可能性がある。枕石は住居の長軸に直行するように据えられ、その両側に焼土が確認できる。北側に広く焼土が広がり、穴も深くなっている。SB12では炉の上面に焼け固まった粘土が検出された。SB14では、炉石の南北に焼土が広く確認される。住居の床が検出された高さでは、北側で焼土が露出し、南側が暗褐色土であったが、掘り進めたところ南側も



第 47 図　午王堂山遺跡調査地点合成図（1/2,000）

暗褐色土除去面で焼土が厚く堆積していた。また、枕石は全て被熱を受けており、炉を使用した際に用いられている。こうした炉は上嶺遺跡でも同時期の竪穴住居から確認されており、一般的に用いられていたようである。

今回検出された竪穴住居は、出土した遺物により時期差は認められたものの、形態、規模や炉の有無など住居ごとに差が大きく、形態と時期差を結びつける要素は認められなかった。

(3) 午王堂山遺跡群について

庵原山塊から延びる丘陵上に位置する午王堂山遺跡群では、縄文時代から平安時代までの遺構が確認されている。ここでは、第1～3次調査で検出された遺構からその配置、集落の様相について考えてみたい（第47図、第1、2次調査の遺構配置図は基準点など合成に必要な情報がないため、地形図からおおよその合成となっていることをお断りしておく）。なお、昭和39年の第1、2次調査は概報として報告されており、本整理、報告書の刊行にいたっていない。そのため、ここでは概報で記された年代観と今回の調査における年代観から詳述する。

明確な遺構が検出されるのは、弥生時代中期からである。弥生時代中期は、第1次調査で完形の壺を出土する溝、今回の調査では、SB06、SB08と2基の竪穴住居が検出されている。丘陵を東西方向に横断する溝は、弥生時代中期頃の居住域と他を区画するものの可能性が考えられるが、性格を決定付けるだけの根拠に欠ける。弥生時代中期に属する遺構は丘陵の西側に見ることができるが、弥生時代後期の遺構密度を考えれば、そこまでの遺構密度ではない。弥生時代後期では、今回の調査でも丘陵を東西方向に横断する溝が検出されている。このほか、竪穴住居が平坦部と一部緩斜面に見られ、複数切り合って検出されている。当該期が集落の盛期とみてよさそうである。また、緩斜面には古墳時代前期及び平安時代の方形プランの竪穴住居が広がっている。

このように、午王堂山丘陵に広がる遺構をみると、丘陵平坦部の高所に集落造営を開始し、時期を追うごとに緩やかな斜面を下り、低地に向かって集落の中心が移っていくことがわかる。ただ、高所においても今回の調査で奈良時代のSH01が検出されたことや事前の確認調査で午王堂山3号墳付近から灰釉陶器が出土していることから、全く活動が見られなくなったということではない。また、午王堂山3号墳の北側にも広く平坦面が広がっているため、こちらについても遺跡が広がっている可能性が十分にある。

午王堂山遺跡群は、立地としては住環境に適した低平な丘陵地であり、人々が弥生時代中期に進出し始め、平安時代にまでその活動を見ることができる。また、午王堂山遺跡群と同様な遺構分布を確認できるのが同じく低平な独立丘陵の神明山遺跡群である。2009年に実施された上嶺遺跡の発掘調査では、弥生時代中期から平安時代にかけての遺構が検出されている。くしくもこの２つの遺跡群には午王堂山3号墳と神明山1号墳という、静岡清水平野でも数えるほどしか確認されていない、大型の古墳が築造されている。これら大型の古墳が築造された背景には、位置的な条件や居住環境、広い生産域など古墳築造にかなった素地が整っていたからに他ならない。

これら丘陵のに囲まれた低地には、庵原川により形成された肥沃な低湿地帯が広がり、格好の生産の場であったことが平成21年度から継続的に発掘調査が実施されている一丁田遺跡の調査成果によって判明してきている。また、一丁田遺跡からは午王堂山遺跡群では検出されていない、古墳時代中期の遺物が多く出土している。遺構には伴わないが、洪水によって運ばれたにしては残りがよく、近傍に集落遺跡が広がっている可能性がある。午王堂山遺跡群で欠落する古墳時代中期頃には生活の中心が低地へ移ったのであろうか。これが古墳築造によるのものか住環境の変化によるものかはわからないが、低地における今後の調査で明らかにしていかなくてはならない。また、平安時代には小里前遺跡で見られるようなカマドを備えた竪穴住居がみられる一方で、午王堂山Ⅱ遺跡でも再び集落が営まれる。これらのことは庵原地域における人々の動きを捉える上では見過ごすことのできない現象である。午王堂山遺跡群など丘陵上に暮らす人々と低地に暮らす人々はどのような関係にあったのか、庵原地域一帯の遺跡について比較分析をすることで社会構造が明らかになると思われる。今回の調査成果が、当該期の庵原地域を復元するための資料として活用されることを期

待したい。

参考文献

2007　静岡市教育委員会　「上嶺遺跡」『ふちゅ～る』№15　静岡市教育委員会
2013　静岡市教育委員会　『一丁田遺跡1～3区』
2013　静岡市教育委員会　『一丁田遺跡4区』
2013　静岡市教育委員会　『一丁田遺跡5区』
2013　静岡市教育委員会　『一丁田遺跡6・7区』
2013　静岡市教育委員会　『一丁田遺跡8・9区』
2014　静岡市教育委員会　『一丁田遺跡10・12区』
1969　清水市郷土研究会　『清水市袖師町神明遺跡発掘調査概報』
1983　清水市郷土研究会　『庵原地域の考古資料』
1997　清水市教育委員会　『清水市の遺跡１』
2001　清水市教育委員会　『午王堂山３号墳　確認調査報告書』
1968　内藤晃・市原寿文　「清水市午王堂山遺跡及び午王堂山第1号墳・2号墳発掘調査概報」『埋蔵文化財発掘調査報告』静岡県教育委員会

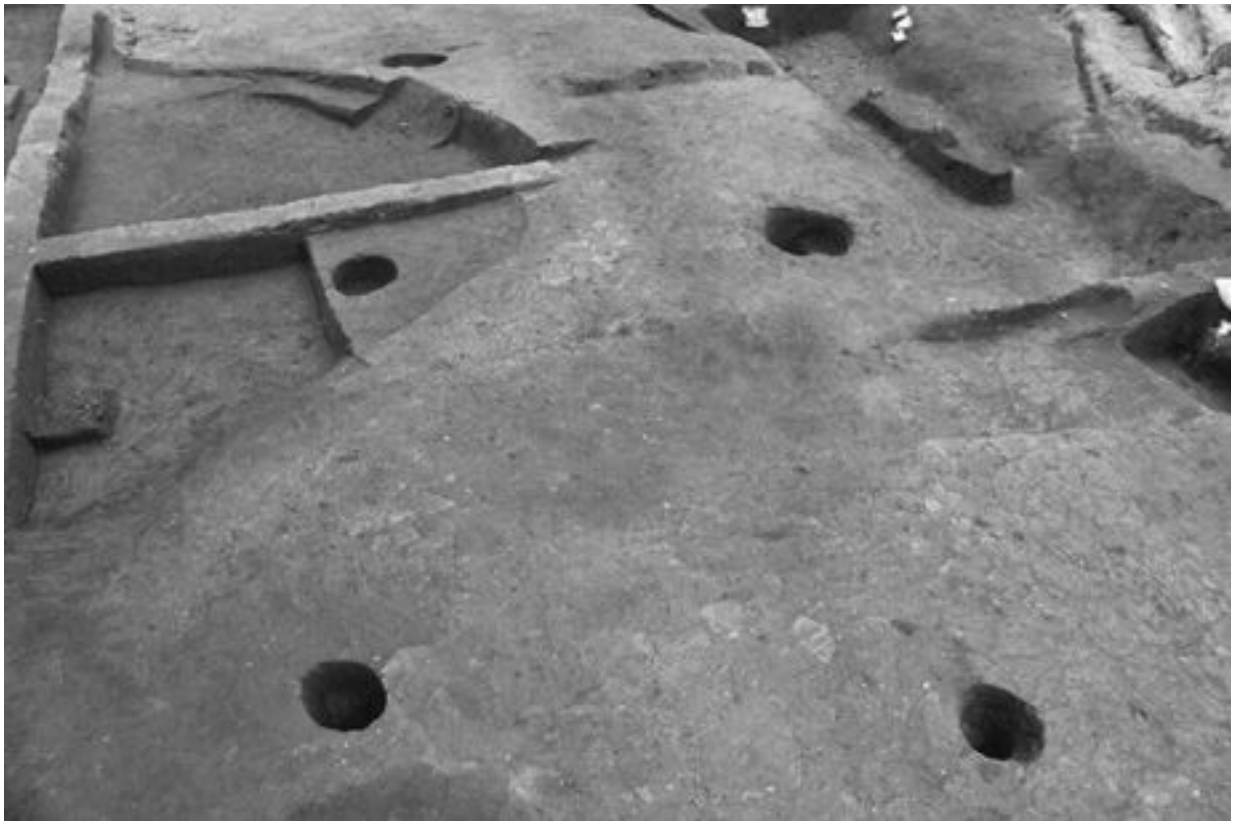
写　真　図　版

図版1

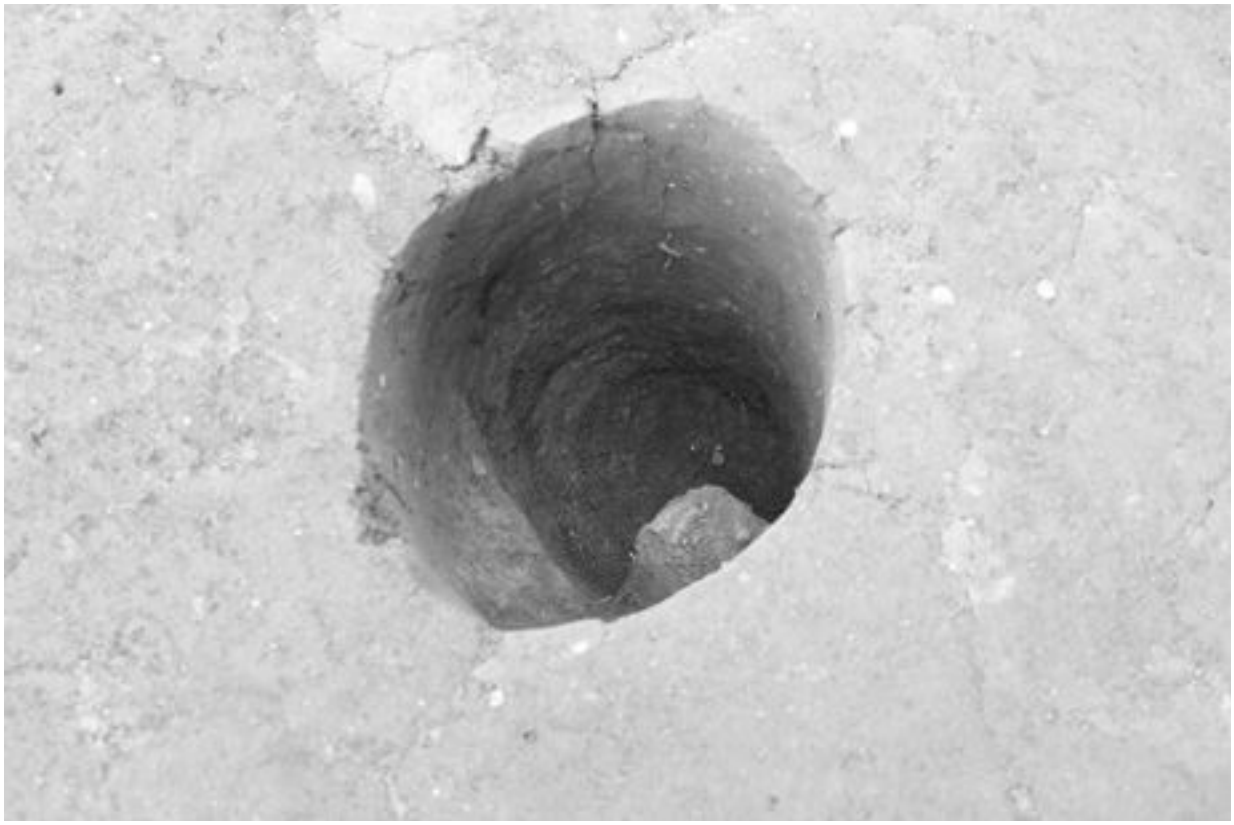
1. 調査地点遠景

2. 調査地点全景

図版2



1. SH01全景(東から)



2. SH01柱穴及び出土遺物

図版3

1. 住居跡検出状況(東から)

2. SB01完掘状況(南から)

3. SB01炉？(北東から)

4. SB02検出状況(東から)

5. SB02完掘状況(東から)

図版4

1. SB03検出状況(南から)

2. SB03炉跡検出状況(南から)

3. SB03炉半裁状況(西から)

4. SB03炉完掘状況(西から)

5. SB03完掘状況(南西から)

図版5

1. SB04床面検出状況(南東から)

2. SB04完掘状況(南東から)

図版6

1. SB04東西ベルト及び床検出（南から）

2. SB04・SB07切り合い関係（南から）

3. SB04西壁付近(南西から)

4. SB04壁溝完掘状況

5. SB04出土遺物（東から）

図版7

1. SB05床検出状況(南から)

2. SB05完掘状況(南から)

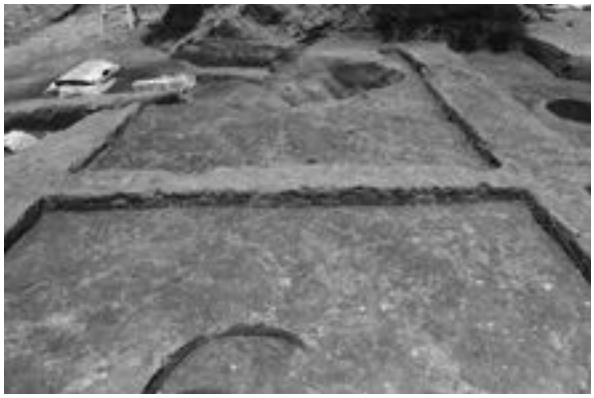
図版8

1. SB05出土遺物①(壺底部33)

2. SB05出土遺物②(高坏36)

3. SB05東西ベルト(床)

4. SB05南北ベルト(床)



5. SB05東西ベルト西半(掘方)

6. SB05東西ベルト東半(掘方)

7. SB05南北ベルト北半(掘方)

8. SB05南北ベルト南半(掘方)

図版9

1. SB06床検出状況(南から)

2. SB06完掘状況(南から)

図版10

1. SB06東西ベルト(南から)

2. SB06南北ベルト(西から)

3. SB06遺物出土状況①(東から)

4. SB06遺物出土状況②(東から)

5. SB07検出状況(北西から)

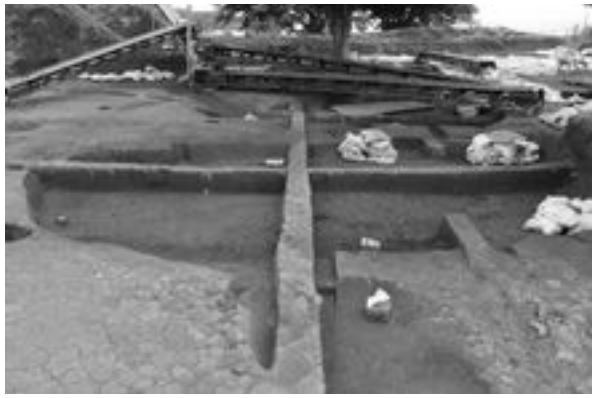
図版11

1. SB07床面検出状況(北西から)

2. SB07完掘状況(北西から)

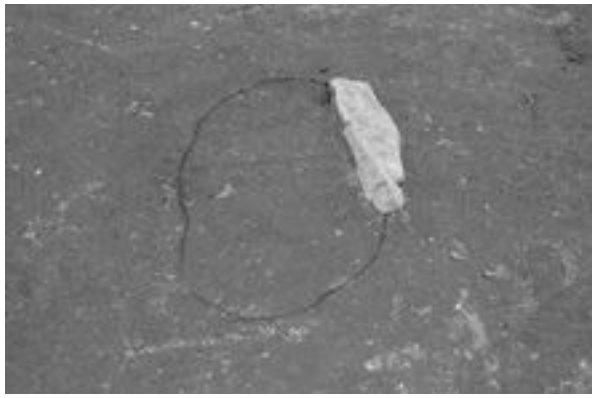
図版12

1. SB07東西ベルト(床、南から)



2. SB07南北ベルト(床、西から)

3. SB07遺物出土状況(南東から)



4. SB07炉検出状況（西から）

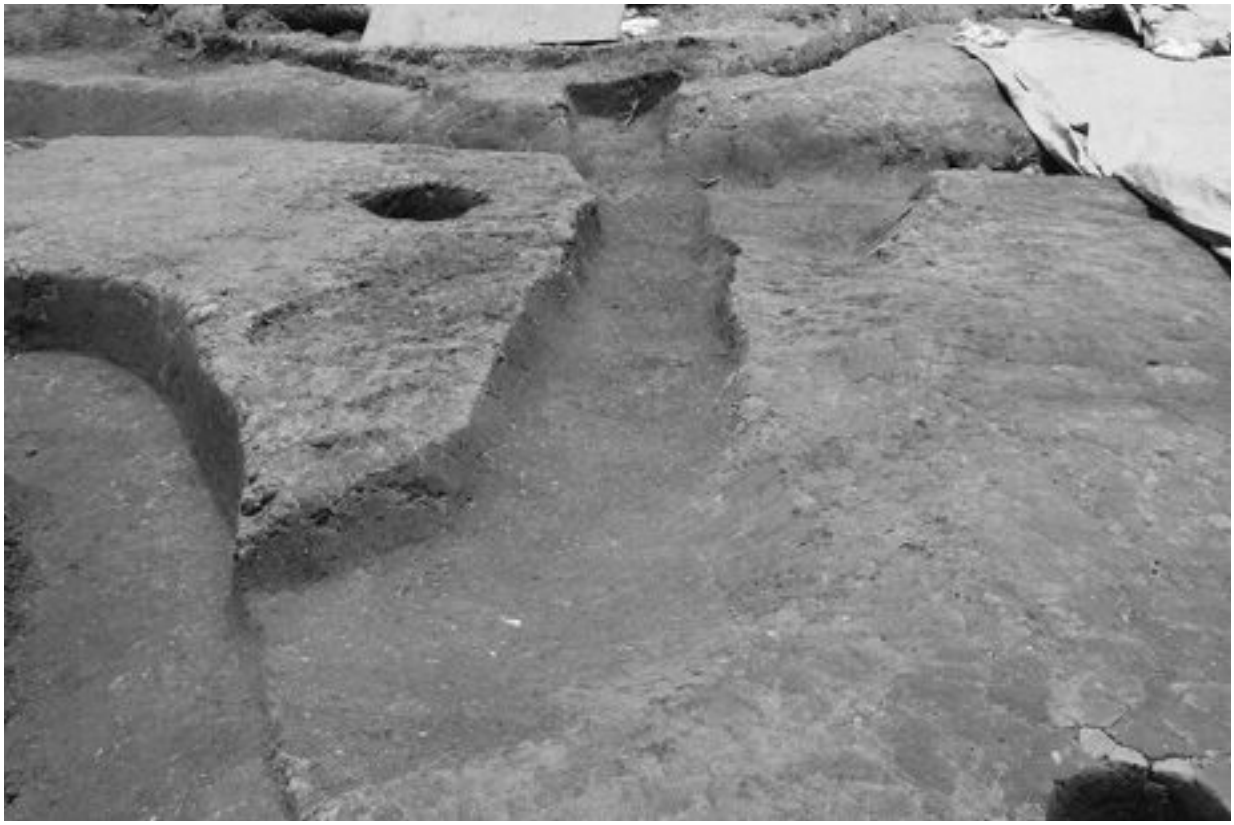
5. SB07炉半裁状況（西から）

6. SB07炉完掘状況（西から）

7. SB07ベルト（床）

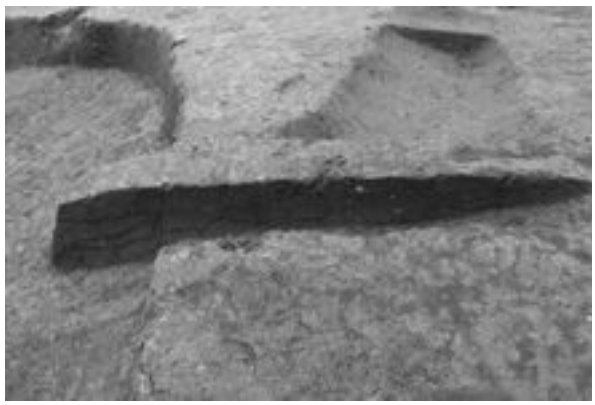
8. SK01ベルト（南から）

図版13

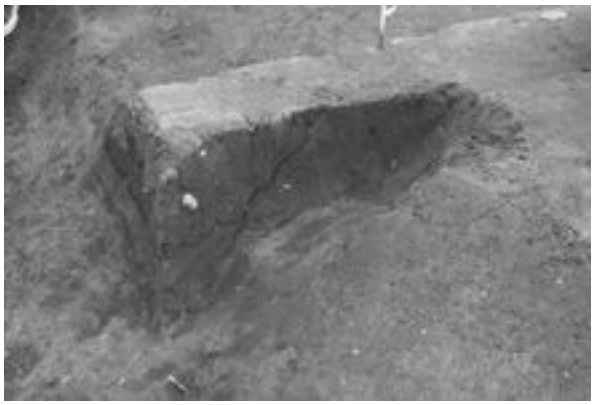


1. SD02完掘状況(南から)

2. SD02完掘状況(北から)



3. SB07・SD02　切り合い関係(南から)



4. SD01・SD02　切り合い関係(西から)

5. SD02覆土(南から)

図版14

1. SB08検出状況(北西から)

2. SB08床検出状況(北西から)

図版15

1. SB08完掘状況(北西から)

2. SB08東西ベルト(床、南から)

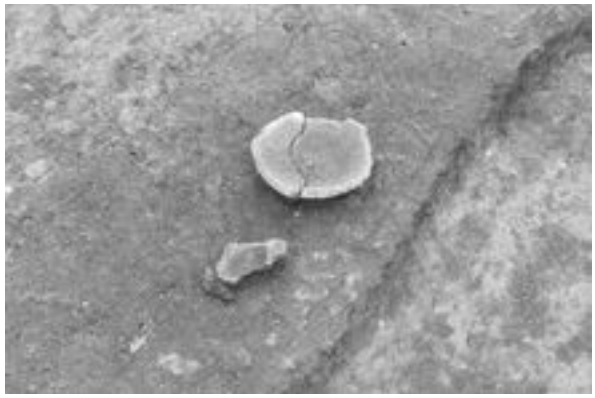
3. SB08南北ベルト(床、西から)

4. SB08東西ベルト (掘方、南から)

5. SB08南北ベルト(掘方、西から)

図版16

1. SB08壁溝土層断面(南から)



2. SB08遺物出土状況(壺72・73)

3. SB08炉検出、. 半裁状況 (西から)

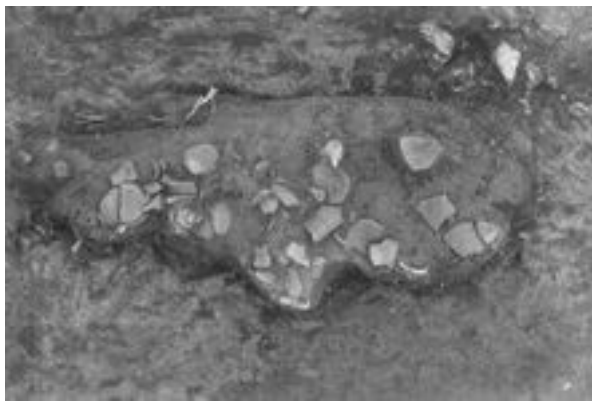
4. SB08炉跡完掘状況(西から)

5. SD01検出状況(北西から)

図版17

1. SD01完掘状況①(北西から)

2. SD01完掘状況②(西から)



3. SD01遺物出土状況(南から)

4. SD01ベルト①(南西から)

5. SD01ベルト②(南西から)

図版18

1. SB09～SB11検出状況(南東から)

2. SB09～SB11完掘状況(南東から)

図版19

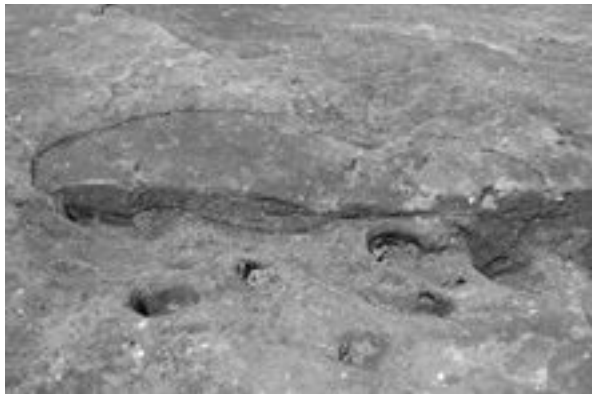
1. SB09炉半裁状況(南西から)

2. SB09炉完掘状況(南西から)

3. SB09完掘状況(南東から)

4. SB10東西ベルト(東から)

5. SB10完掘状況(東から)

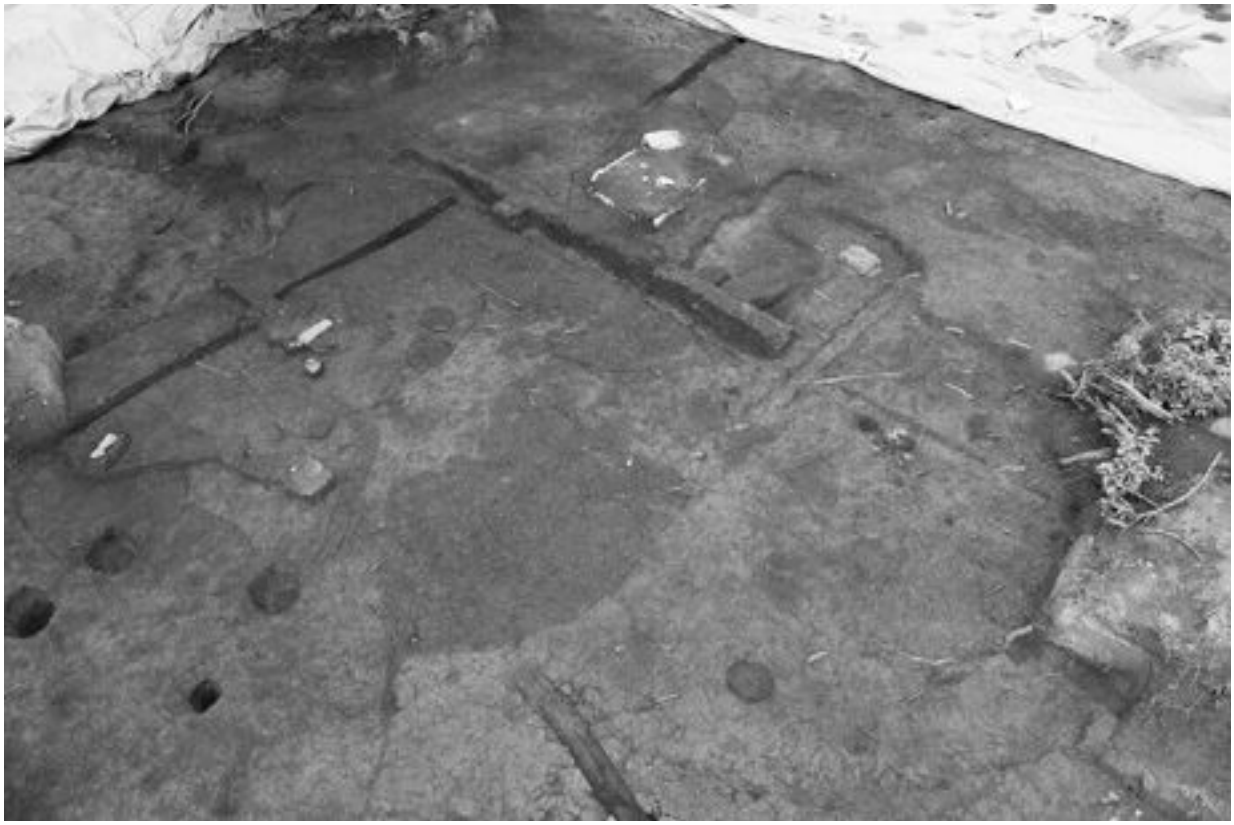


6. SB11炉半裁状況(南西から)

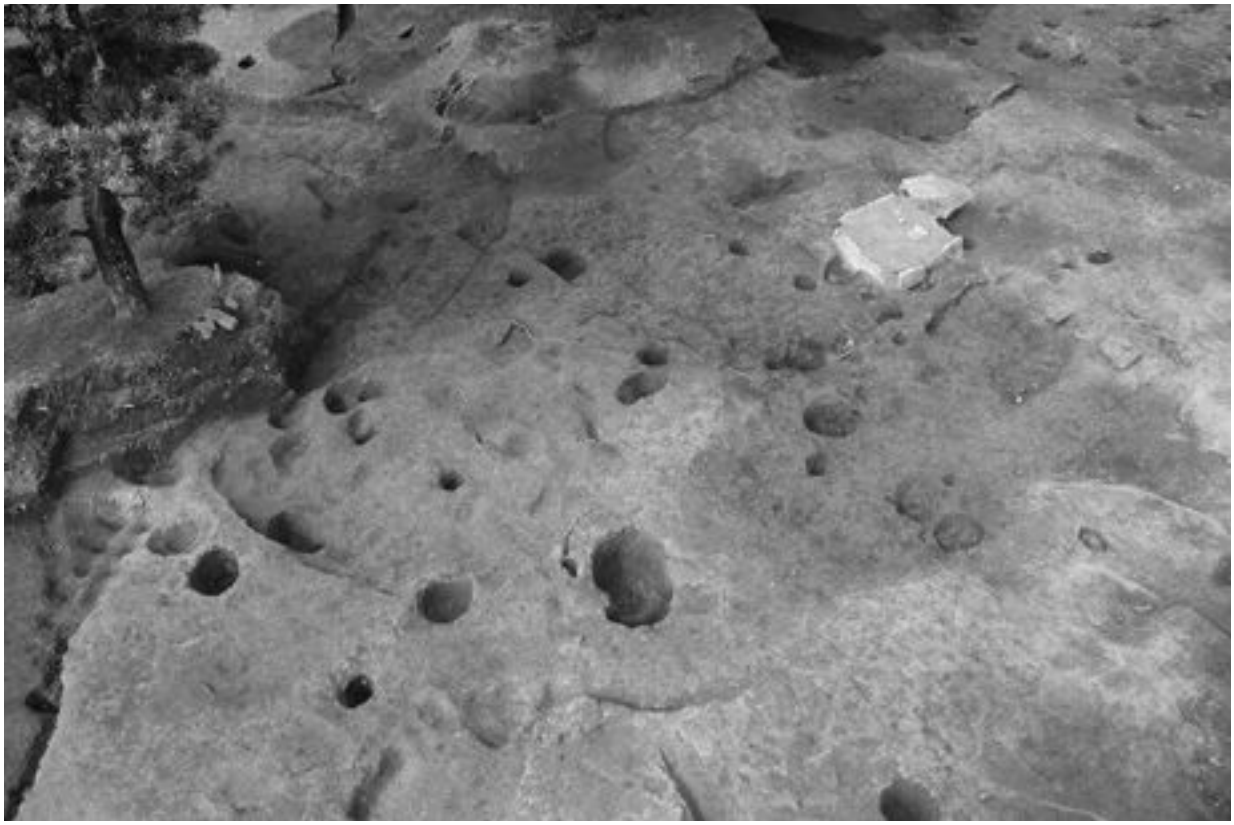
7. SB11炉完掘状況(南西から)

8. SB11完掘状況(南東から)

図版20



1. SB12検出状況(南西から)



2. SB12完掘状況(南西から)

図版21

1. SB12炉検出状況(東から)

2. SB12跡半裁状況(東から)

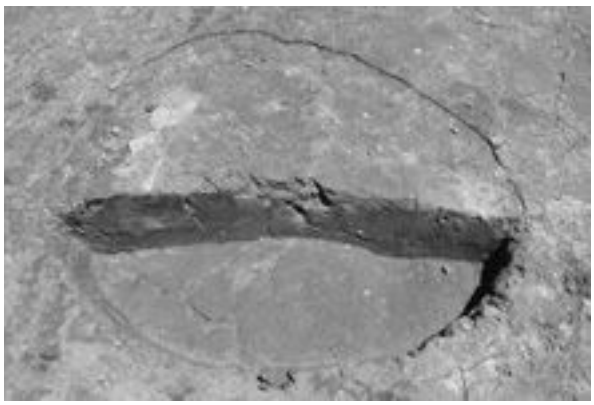
3. 炉完掘状況(東から)

4. SB12遺物出土状況(矩壺92)

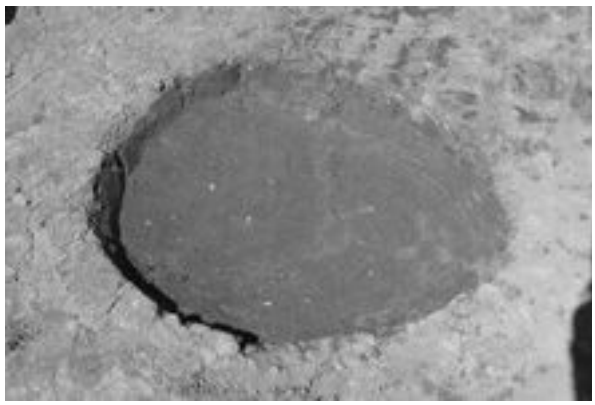
5. SB13検出状況(南西から)

図版22

1. SB13完掘状況(南西から)

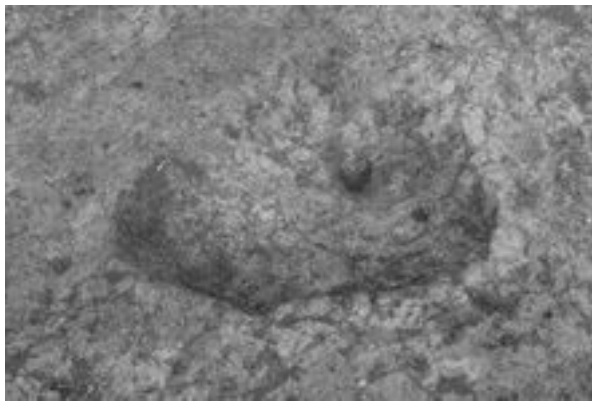


2. SB13炉半裁状況(西から)



3. SB13炉完掘状況(西から)

4. SK02半裁状況(南西から)



5. SK02完掘状況(南西から)

図版23

1. SB14検出状況(南西から)

2. SB14床検出状況(南西から)

図版24

1. SB14完掘状況(南西から)

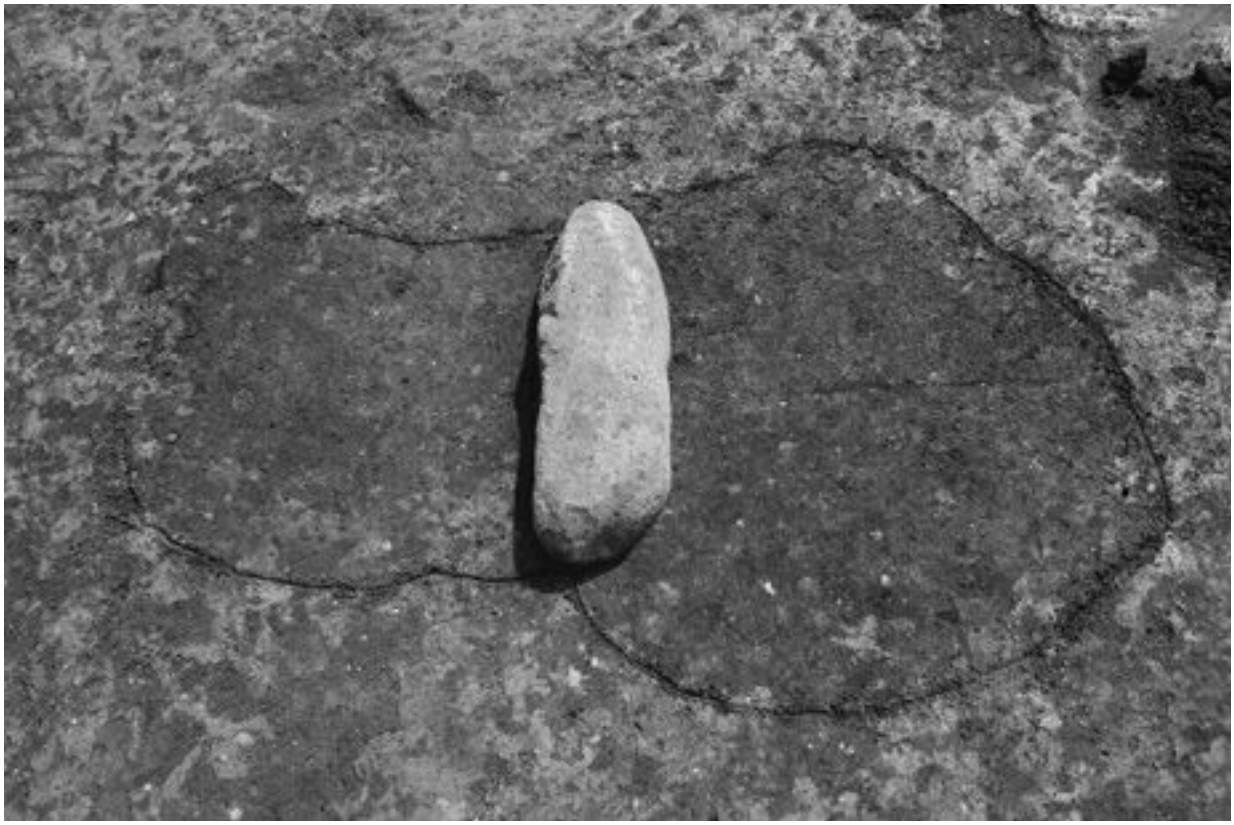
2. SB14ベルト(床、南西から)

3. SB14掘方及び壁溝検出状況(北から)

4. SB14ベルト(掘方、南西から)

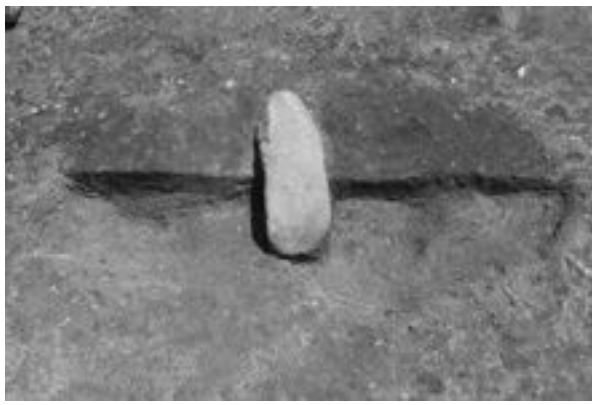
5. SB14掘方及び壁溝(南から)

図版25



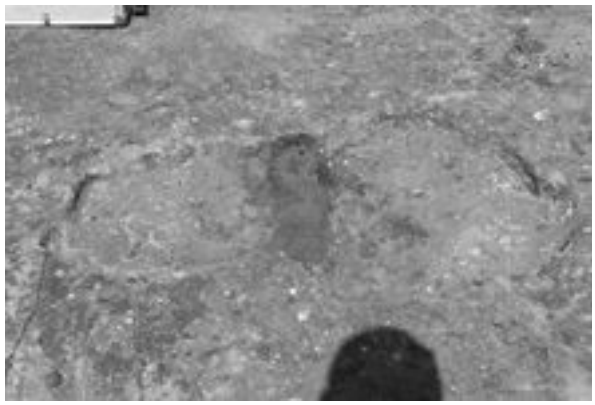
1. SB14炉検出状況(西から)

2. SB14炉半裁状況①(西から)



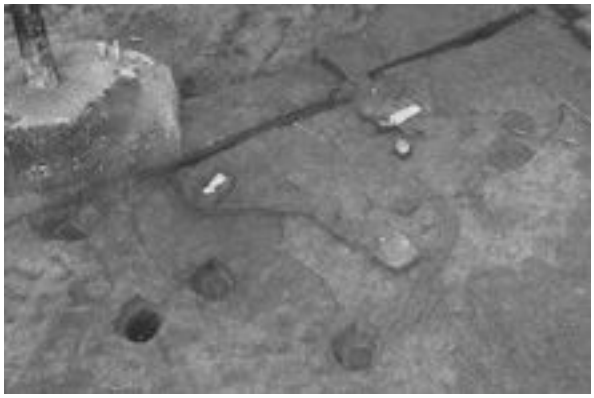
3. SB14炉半裁状況②(西から)

4. SB炉完掘状況(西から)



5. SB14炉枕石除去状況(西から)

図版26



1. SB15検出状況(南西から)

2. SB15壁溝完掘状況(南西から)

3. SB15？枕石検出状況(南から)

4. SB06内側壁溝検出状況(南西から)

5. SX01検出状況(北から)

6. SX01ベルト(東から)

7. SX01完掘状況(北から)

8. SX01遺物出土状況(北から)

図版27

1. SD04、. SB16完掘状況(南から)

2. SD04土層断面①(北から)

3. SD04土層断面②(東から)

4. SB16検出状況(北から)

5. SB16完掘状況(北から)

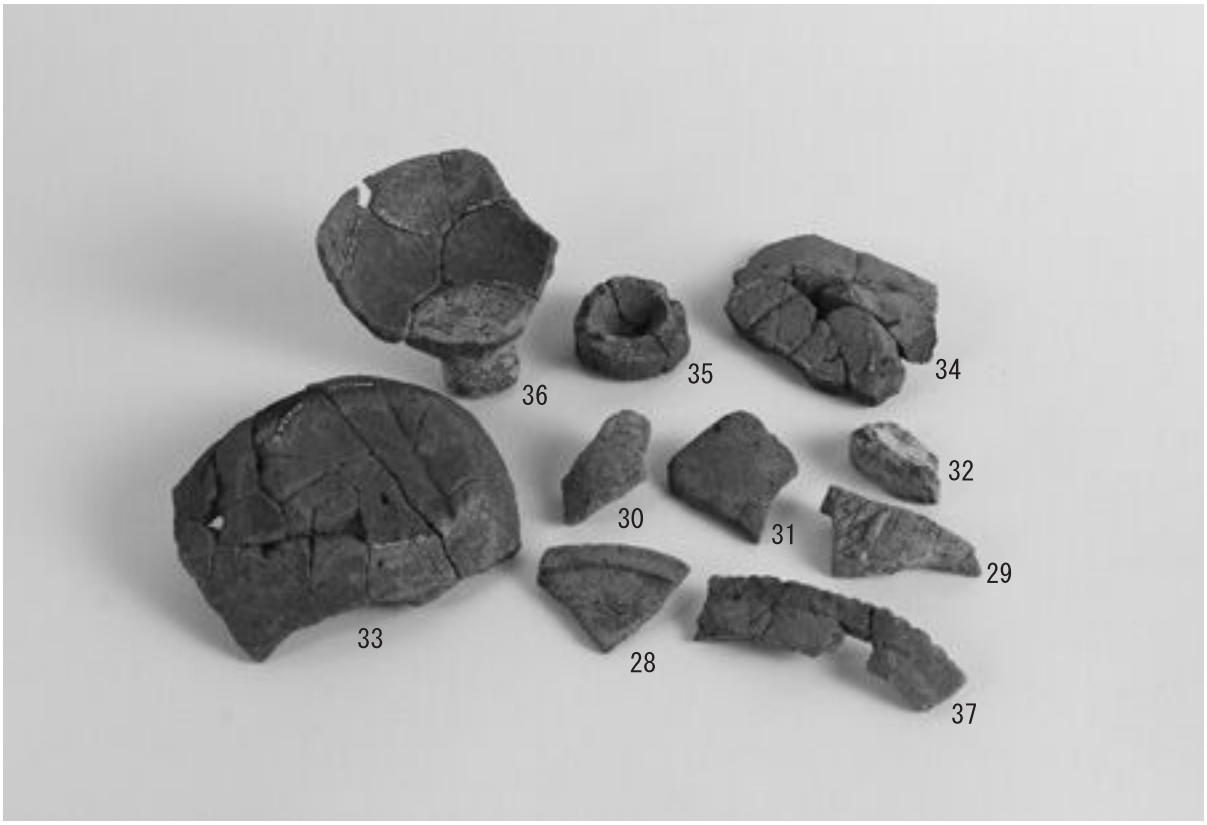
図版28

1. 上土掘削時出土土器

2. SB01・SB03出土土器

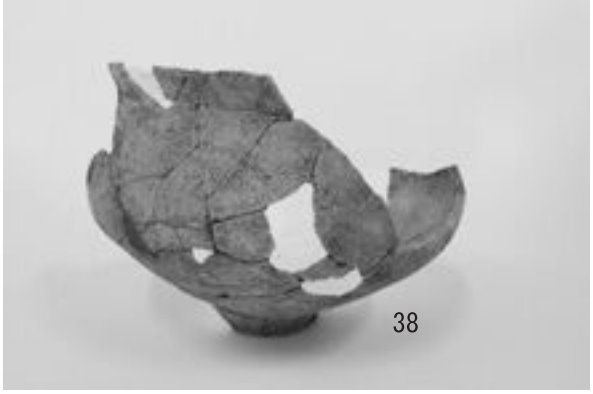
図版29

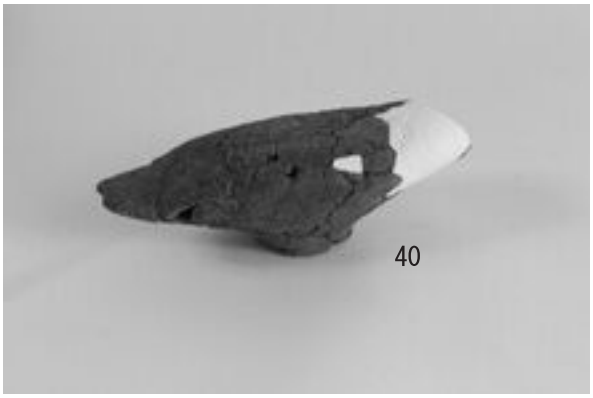
1. SB04出土土器

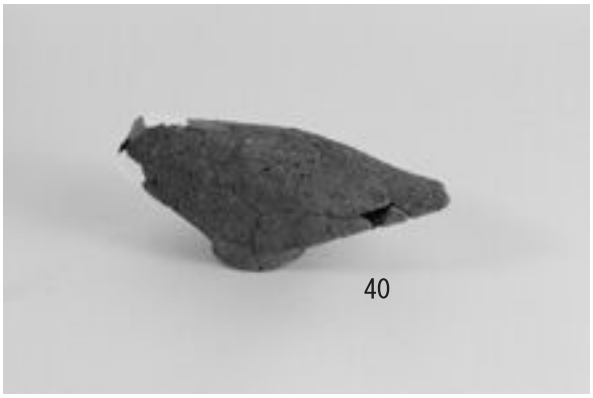


2. SB05・SB06出土土器①

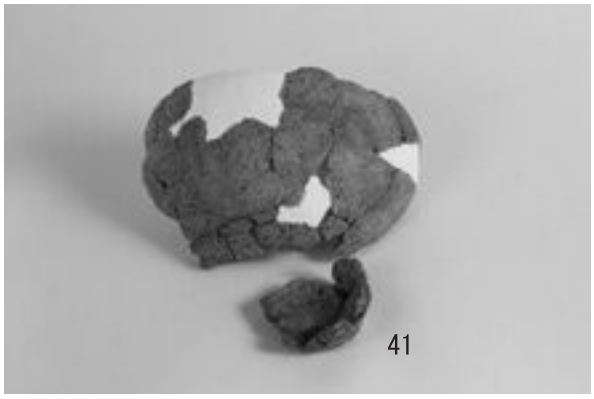
図版30





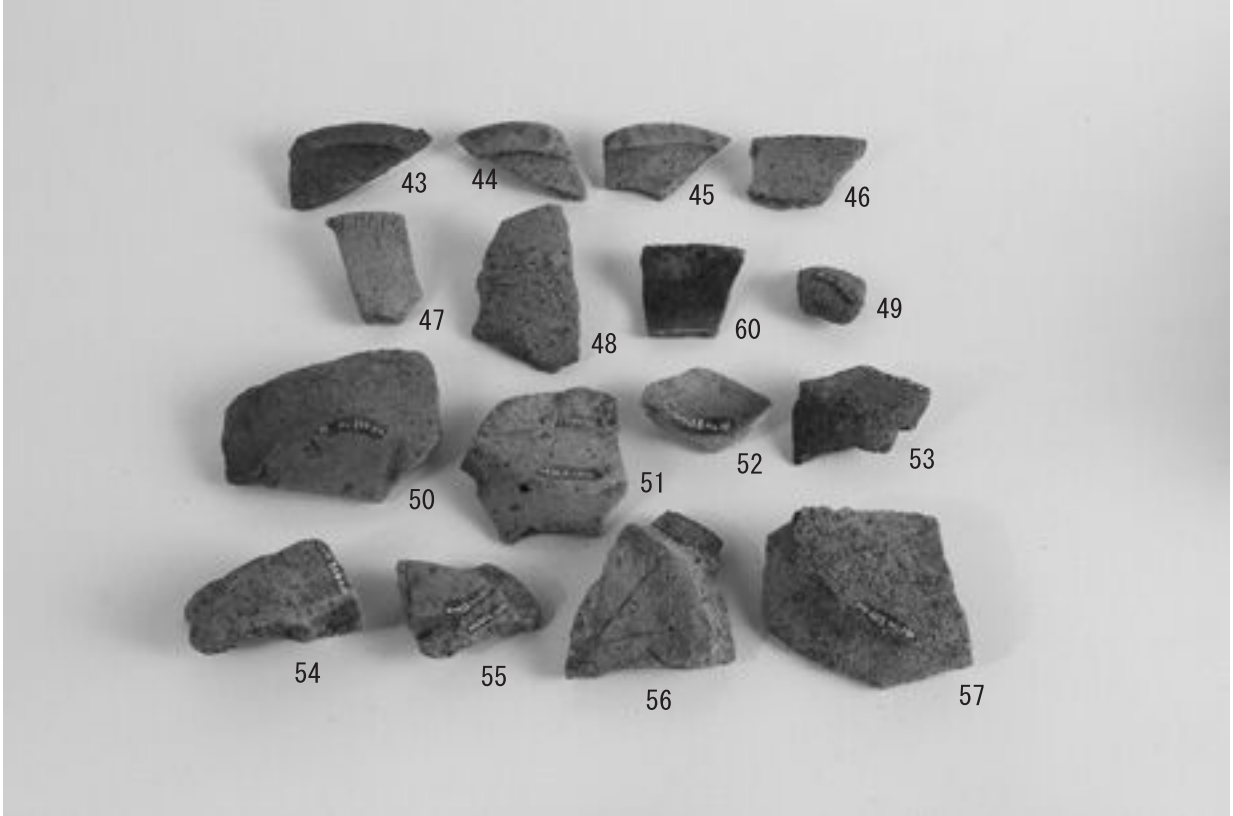


1. SB06出土土器②



2. SB06出土土器③

図版31

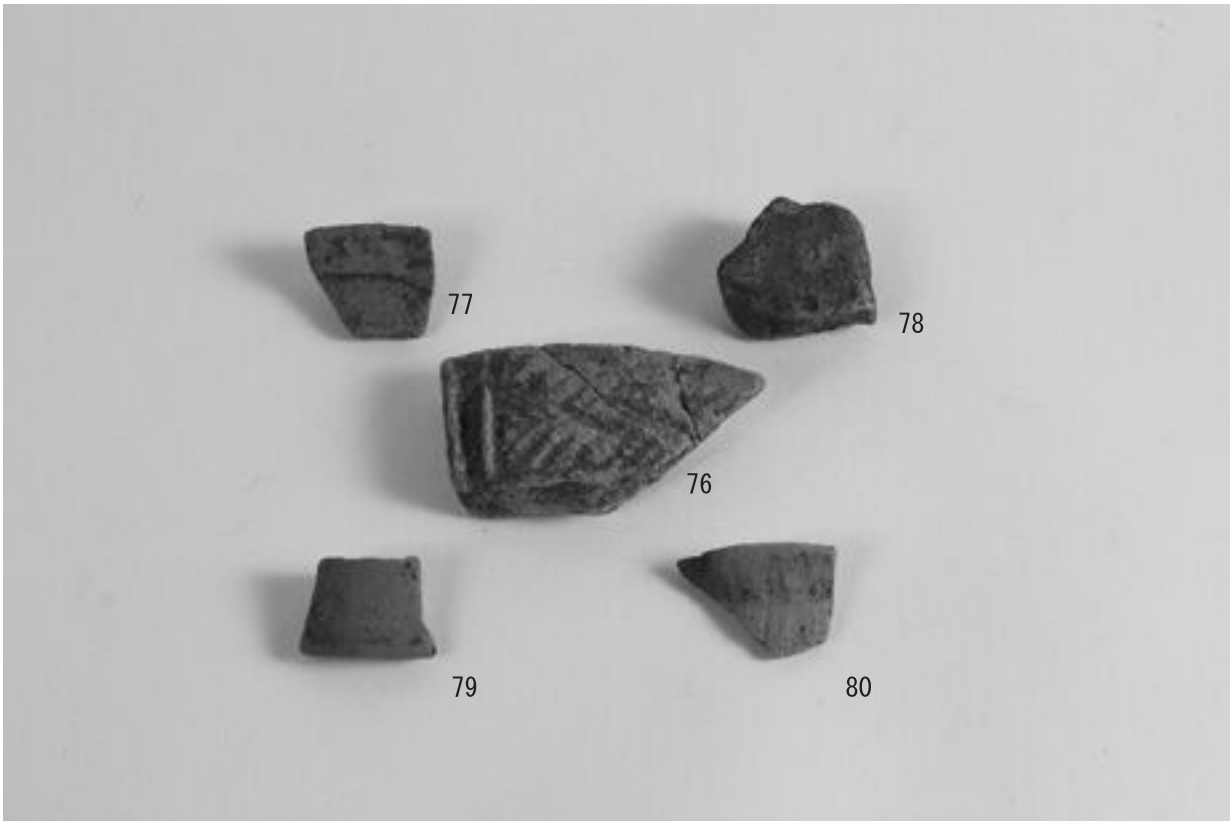


1. SB07出土土器①

2. SB07出土土器②

図版32

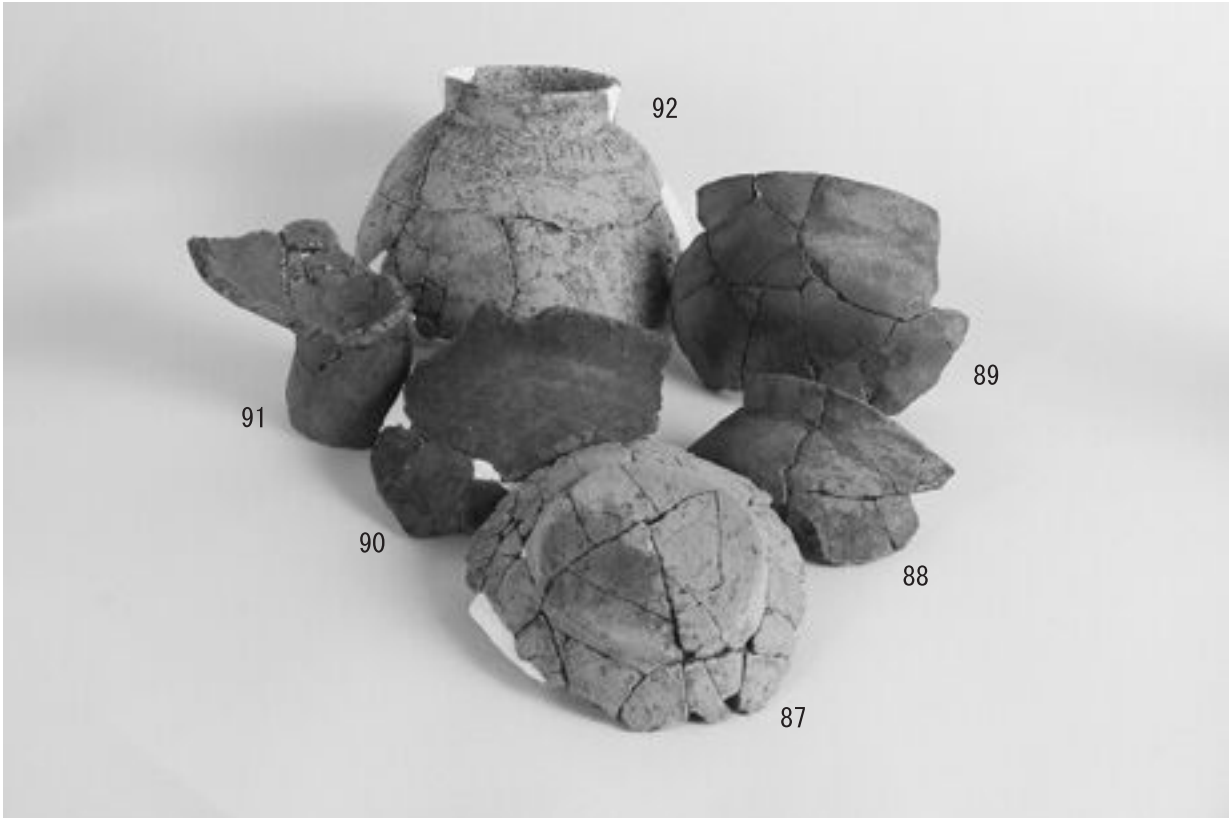
1. SB08出土土器



2. SB09出土土器

図版33

1. SB10・SB11出土土器

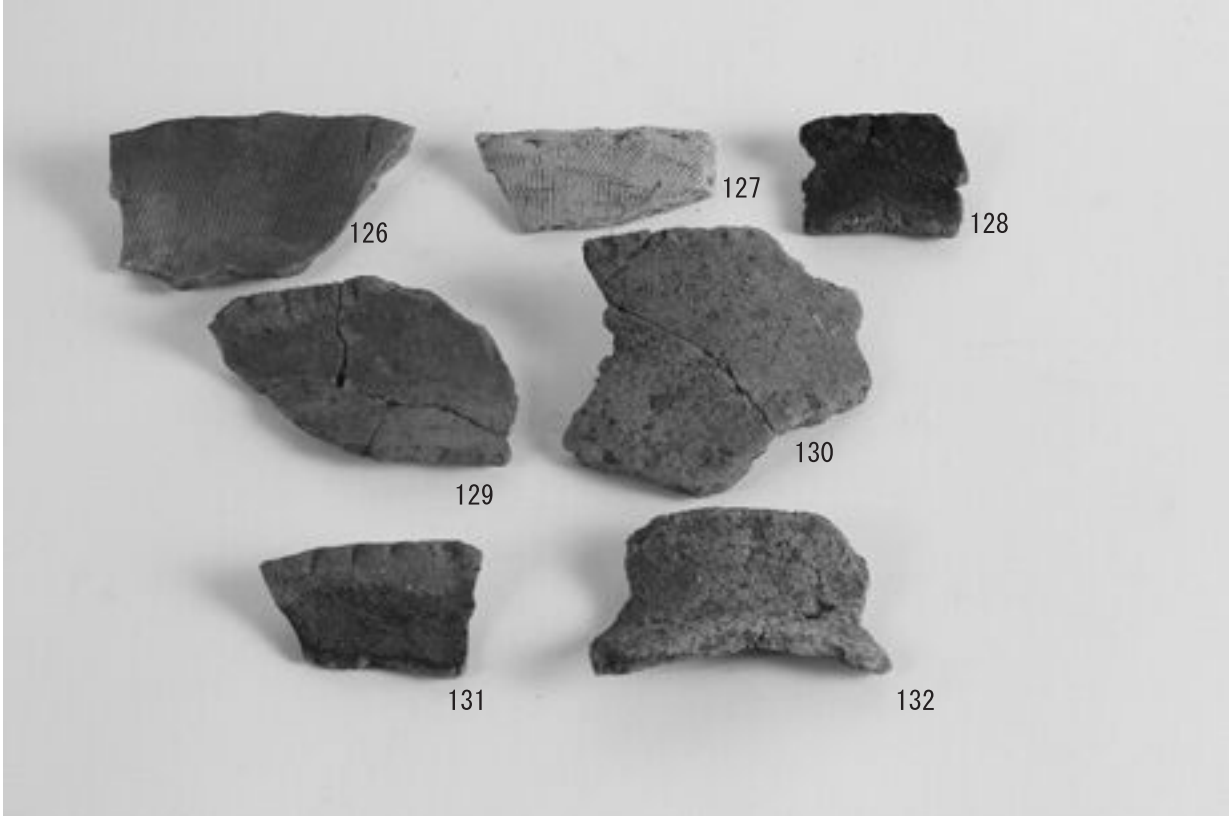


2. SB12出土土器

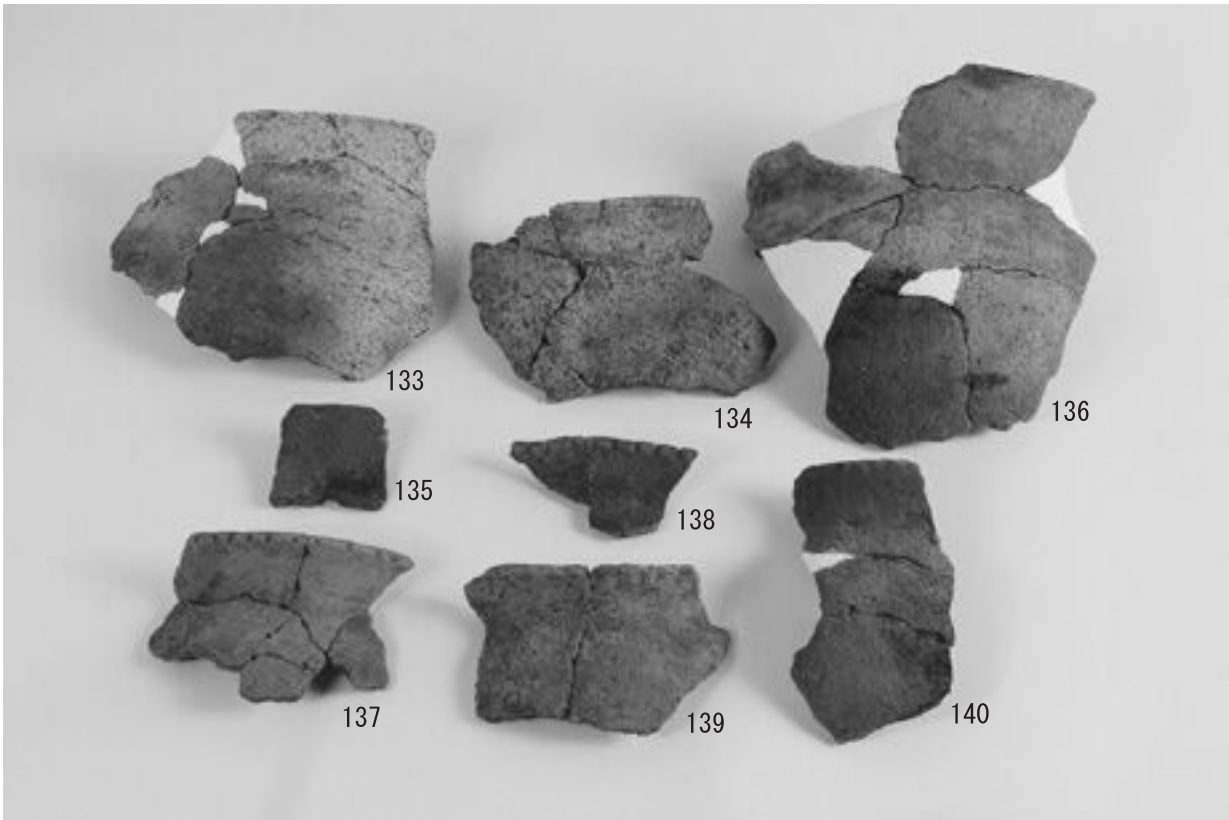
図版34

1. SB14出土土器

図版35



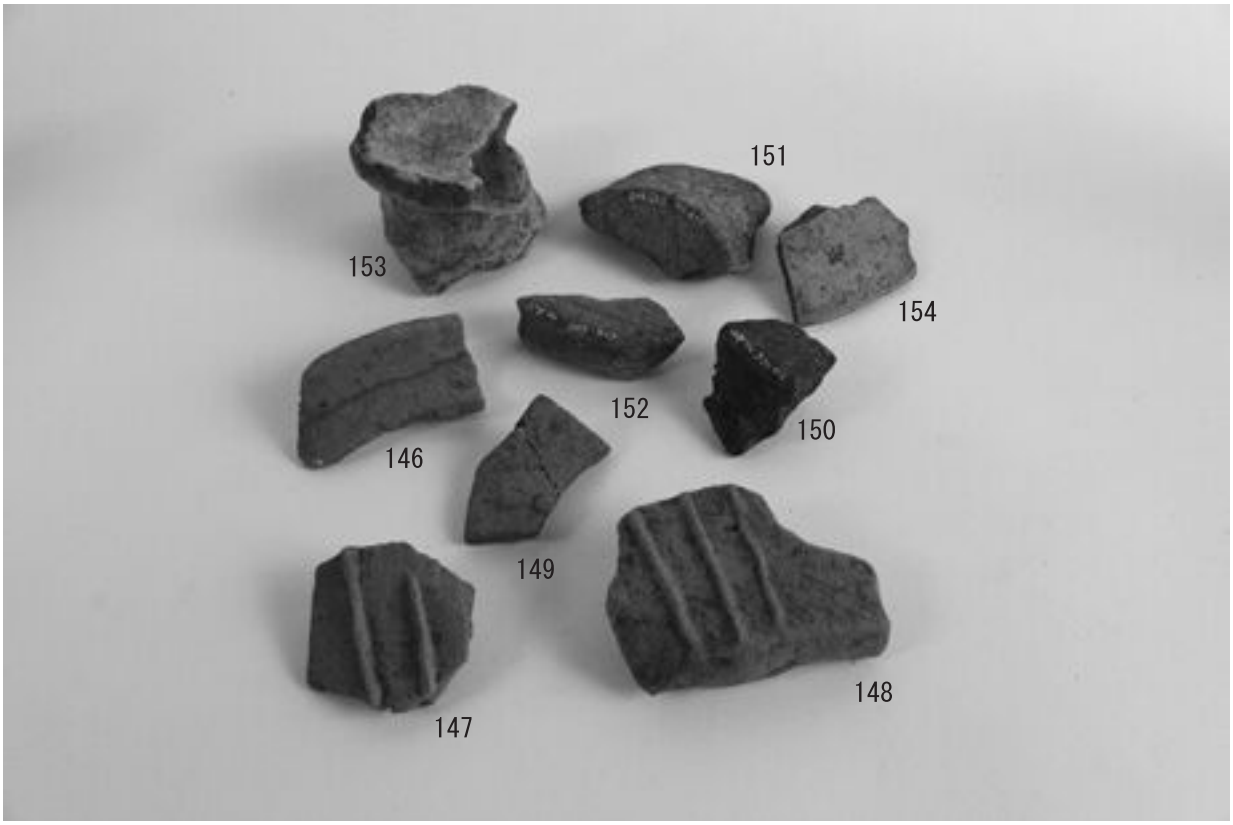
1. SD01出土土器②



2. SD01出土土器③

図版36

1. SD01出土土器④

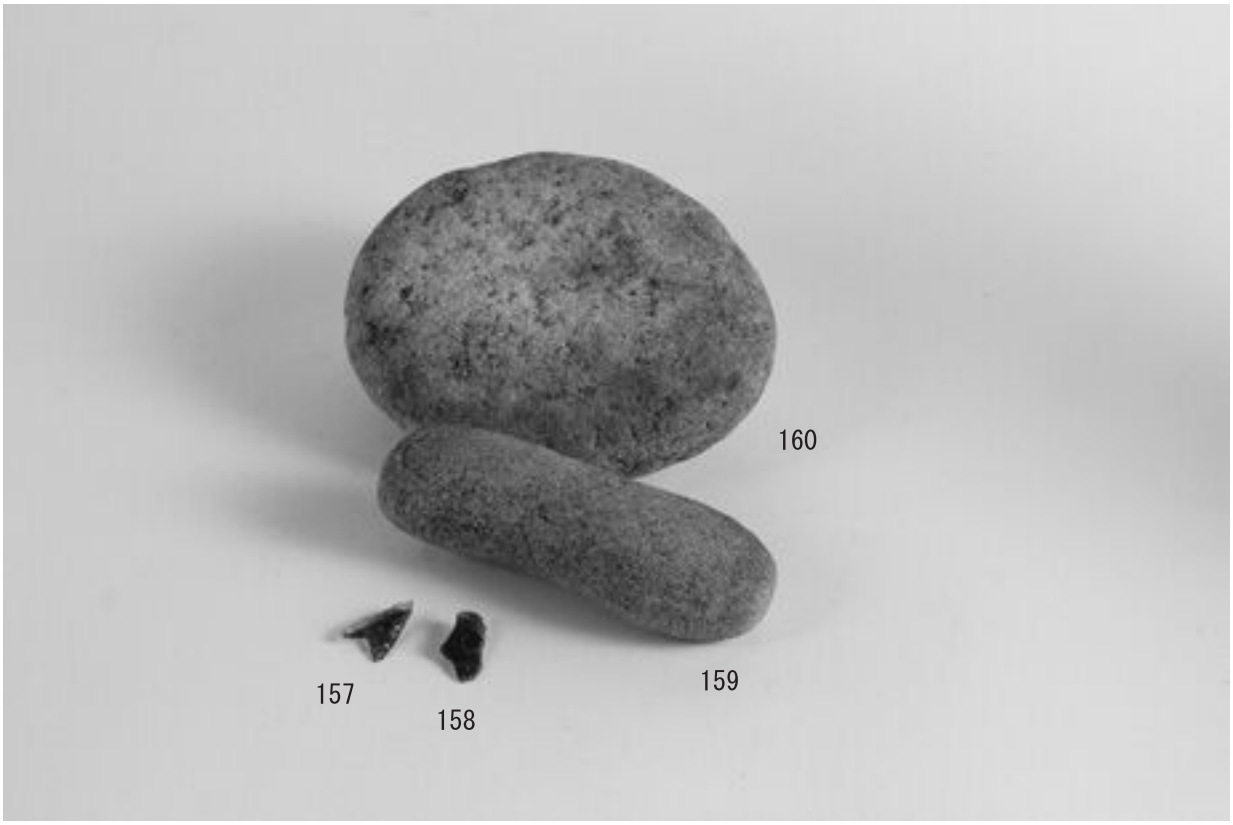


2. SD01出土土器⑤

図版37

1. SX01出土土器

2. SH01出土土器



3. 出土石器

Goodouyama Ⅱ Site

Geographical feature

Goodouyama Ⅱ *Site* was a village site which includes some pit-dwellings and isolation trenches in Shizuoka City Shizuoka Prefecture. We were able to gather plenty of information on account of two excavation investigations. Small pit-dwellings groups spread over slope of a hill. From the point of their period, they were in the late Yayoi period, the early Kohun period, the Nara period and the Heian period. Besides, *Goodouyama* Ⅲ *tomb* (large keyhole-shaped tomb) was also founded and became a rare example in this area. Around *Goudouyama* Ⅱ *Site*, same period of time pit-dwellings spread over Mt. Shinmei. In a low-lying area near Goudouyama Ⅱ Site, Ichouda Site was found . Some remains of rice fields in the Yayoi period, the Heian period were founded in this Ichouda Site and then this proved that people cultivated rice there.

Investigation background

In this area, the project that installing a photovoltaic power generating device and setting some solar panels had been planned before. Therefore, a trial excavation investigation was carried out before the construction working started. The investigation result showed that the site spread out widely than what was expected. At the same time, the full-scale excavation investigation was planned to collect more information. The investigation area was 1,480 ㎡, the excavation was carried out for two months (June 10th 2014 to August 10th 2014). According to these investigations, some pit-dwellings which were in the middle to late Yayoi period, the early Kohun period were found.

Unearthed relics

It was a significant factor that large amount of earthenware was found on each floor of pit-dwellings. In addition, most of earthenware was enabled to be restored perfectly. It helped us to identify the period when the people's life with pit-dwellings abolished there, and also comparing with its information may utilize to identify other similar shape of earthenware's period. A bird-shaped unearthed relic was found, and people might have taken worship by using it. Some fireplaces and Makura-ishi (a rectangular stones, each stone were approximately W10cm L30cm) were found in few pit-dwellings. Makura-ishi was suited a center of fireplace. These important remains showed us how were people's daily life in this area.

According to two excavation investigations in *Goodouyama* Ⅱ *Site* gave us lots of valuable information about pit-dwellings. The aim of next investigation is to clear the relations between *Goodouyama* Ⅱ *Site* and some surrounding remains of small villages or rice fields, and also collect more information about Ihara region.

報告書抄録

ふりがな	ごおどうやまにいせき　だいさんじはっくつちょうさほうこくしょ				
書　　名	午王堂山Ⅱ遺跡　第3次発掘調査報告書				
副書名					
シリーズ名	静岡市埋蔵文化財調査報告				
編著者名	古牧直久				
編集機関	静岡市教育委員会（生活文化局文化スポーツ部文化財課）				
所在地	静岡市葵区追手町5-1　電話054-221-1069				
発行年月日	平成27年2月26日				
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号		
ゴオドウヤマニイセキ 午王堂山Ⅱ遺跡	シズオカシシミズクイハラチョウ 静岡市清水区庵原町	2 2 2 0 1	C 72	35°　2′ 34″	138°　28′ 23″
調査期間	調査面積	調査原因	所収遺跡	種別	主な時代
20140609 ～20140814 20141101 ～20141113	1,480㎡	太陽光パネル設置	午王堂山Ⅱ遺跡	散布地	縄文時代から平安時代
主な遺構		主な遺物		特記事項	
竪穴住居、溝、土坑		弥生土器、鳥形土器、土師器 敲石			

平成27年２月26日　発行

静岡市埋蔵文化財調査報告

午王堂山Ⅱ遺跡
第３次発掘調査報告書

編集・発行　静岡市葵区追手町５番１号
静岡市教育委員会
（生活文化局文化スポーツ部文化財課）
印　　刷　池田屋印刷株式会社